

年度	2025
講義名称	臨床心理学特論Ⅱ〔心研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 高野 創子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	臨床心理学の理論の実践的な基礎である心理療法とは、どのようなプロセスで進んでいくのかを理解することを通して、その意義と価値を評価できるようになることが目標となる。また、知的な理解にとどまりがちな臨床心理学の諸概念を、実際の現象として把握することによって、実践的な概念として活かすことができるようになることを期待している。
到達目標	① 精神力動的心理療法の特徴を説明することができる。 ② 心理療法の大まかなプロセスについて説明することができる。 ③ 心理療法の中で生じる様々な現象を人間理解の手がかりとして考えることができるようになる。
授業の進め方	力動的精神分析の文献を用いて、その治療プロセスを学ぶ。講師の解説の後、それぞれの講義のテーマに沿った課題を提示し、受講者全員でディスカッションを行ない、理解を深める。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回の課題、グループワークでまとめた内容を紙面にて提出したものについて、講義内で内容の確認と添削指導を行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	イントロダクション・心理療法の中の精神分析的心理療法の位置づけ
第2回	精神力動的心理療法とは
第3回	初回面接
第4回	契約という関係
第5回	協力関係の形成
第6回	転移
第7回	逆転移
第8回	夢とその扱い
第9回	抵抗
第10回	ワークスルー①
第11回	ワークスルー②
第12回	心理療法の終結
第13回	まとめ

事	大学の図書館やインターネットなどを使って、専門領域に関連した必要な情報を積極的に収集・活用すること。日ごろから、ニュースや新聞などで心や福祉に関する 2025/04/01
---	--

前・事後学修	る情報を入手するよう心掛けること。テーマに関する議論で自分の意見が言えるように、テキストや配布された資料以外の文献も自主的に調べて学修をつむこと。 本演習は、自身の発表回の事前準備はもちろんのこと、講義時間外にも課題の実施などが必要となる。これらを予習・復習の時間の活動内容とし、併せて5時間を目安とする。
--------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	① 毎回のミニ・レポート60％ ② 学期末課題：40％
テキスト	必要に応じて適宜プリントを配布する。
参考文献	『サイコセラピー練習帳』 丸田俊彦著 岩崎学術出版社

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラー、ボランティア活動などの地域支援の経験のある教員が心理支援の発想と技術をクライアントに活かす視点と対人コミュニケーション能力を養う演習を実施する。
備考	受講者のニーズ、現場の状況に応じて、内容を変更することがある。

年度	2025
講義名称	臨床心理面接特論Ⅰ〔心研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 高野 創子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	臨床心理学の理論の実践的な基礎である心理療法について、とりわけ自我心理学の技法をもとに、面接初期から終結までのプロセスを学ぶ。また、知的な理解にとどまりがちな臨床心理学の諸概念を、実際の現象として把握することによって、ケース担当時に実践的な概念として活かすことができるようになることが目的となる。
到達目標	1. 精神力動的心理療法の特徴（心理面接における約束事や守るべき面接構造、クライエントの内面を尊重することや心の真実を扱うことの重要性）について説明できるようになる。 2. 心理療法の大まかなプロセスについて説明することができるようになる。 3. 心理療法内で生じるさまざまな現象を人間理解の手がかりとして考え、実践に生かすことができるようになる。
授業の進め方	指定のテキストや論文の各章について受講生が担当を分担してレポートし、そのテーマごとに受講生でディスカッションを行う。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回の課題、グループディスカッションでまとめた内容を紙面にて提出したものについて、講義内で内容の確認と添削指導を行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	イントロダクション・精神分析的心理療法とは
第2回	心理療法の基本的な枠組みⅠ
第3回	心理療法の基本的な枠組みⅡ
第4回	インテーク面接について（導入、動機づけ、合意、査定）
第5回	インテーク面接（初期の聴き方と構造）
第6回	治療場面で起こりうる現象（人間理解の手立て 転移Ⅰ）
第7回	治療場面で起こりうる現象（人間理解の手立て 転移Ⅱ）
第8回	治療場面で起こりうる現象（抵抗の意味と対応）
第9回	治療的介入と解釈（その1・その2）
第10回	中断と終結
第11回	児童期・思春期の面接Ⅰ
第12回	児童期・思春期の面接Ⅱ
第13回	まとめ・精神分析理論に関する諸概念

--

事前・事後学修	大学の図書館やインターネットなどを使って、専門領域に関連した必要な情報を積極的に収集・活用すること。日ごろから、ニュースや新聞などで心や福祉に関する情報を入手するよう心掛けること。テーマに関する議論で自分の意見が言えるように、テキストや配布された資料以外の文献も自主的に調べて学修をつむこと。
	本演習は、自身の発表回の事前準備はもちろんのこと、講義時間外にも課題の実施などが必要となる。予習・復習の時間は、それぞれ2.5時間を目安とする。

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	① ミニ・レポート（章ごとのまとめ）提出：60％ ② 学期末課題（担当発表）：40％
テキスト	馬場 禮子「精神分析的心理療法の実践」（岩崎学術出版社）
参考文献	適宜、紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラー、地域支援の経験のある教員が心理支援の基本的理論と姿勢をケースに生かす視点を養う演習を実施する。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	臨床心理面接特論Ⅱ〔心研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 松浦 秀太	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	「臨床心理面接特論Ⅰ」の学びを基に、臨床心理面接の実際を具体的に学ぶ。特に本科目では臨床心理面接の導入期からアセスメント、心理療法に至るまでの過程に焦点を当て、基本的な面接技法を確認する。
到達目標	① 臨床心理面接が人間理解の方法のひとつであることが理解できる。 ② 臨床心理面接を展開を理解できる。 ③ 面接プロセスで生じることを理解できる。
授業の進め方	講義形式＋グループワークやディスカッションなどを取り入れるなど、能動的な学修を目指す。受講者には適宜資料を配布する。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	講義内で解説する。
----------------------------	-----------

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション、面接課題の説明
第2回	構造化
第3回	来談理由と主訴の確認
第4回	モチベーション（動機づけ）
第5回	生育歴、現病歴の聴取
第6回	アセスメントワーク(1)
第7回	アセスメントワーク(2)
第8回	面接検討会(1)
第9回	面接検討会(2)
第10回	面接検討会(3)
第11回	面接検討会(4)
第12回	面接検討会(5)
第13回	面接検討会(6)、まとめ

事前・事後学修	事前事後に講義内で紹介された文献をよく読み、予習復習を行うこと。また、面接課題に取り組み、記録をつけること。上述のような事前及び事後学習の合計は5時間を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	以下の3点で評価する。 A) 面接記録の提出：30% B) 面接検討会でのディスカッション：30% C) アセスメントワークシート:40%
テキスト	各回、必要な文献を指示する。
参考文献	・ 吾妻壮 (2018). 精神分析的アプローチの理解と実践ーアセスメントから介入の技術まで. 岩崎学術出版社. ・ 青木省三 (2017). こころの病を診るということー私の伝えたい精神科診療の基本. 医学書院. ・ 土居健郎 (1992). 新訂 方法としての面接-臨床家のために. 医学書院. ・ 神田橋條治 (1997). 対話精神療法の初心者への手引き. 花クリニック神田橋研究会. ・ 笠原嘉 (2007). 精神科における予診・初診・初期治療. 星和書店. ・ 成田善弘 (2007). 新訂増補 精神療法の第一歩. 金剛出版. その他、適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は臨床心理士資格を有し、医療分野、福祉分野、教育分野において心理士としての実務経験がある教員が担当する。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	心理学研究法特論[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 荒関 守	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	心理学における研究の方法を理解し、修士論文執筆に必要な具体的作業内容とその手順・方法を学びます。「心理学の研究をすること」「修士論文を執筆すること」に役立つ、大きな枠組みを修得することが目的です。 心理学の研究法には、大きく分けて量的・質的・事例の各研究法がありますが、本講義では、まずすべての研究法に共通する概要を学び、その後、主に論文講読を通して、それぞれの研究法を学びます。
到達目標	①心理学における研究法の枠組みを理解し、研究に必要な作業を独力で進めることができる。 ②心理学の論文を読み、内容を理解し、批判的に検討できる。
授業の進め方	文献検討の回では、担当者を割り振り、文献検討の成果を発表してもらいます。第2回及び第13回では、現在の研究に関する問題意識や研究の方向性を全員に発表してもらいます。そのほかの回は、講師による講義および双方向対話（ソクラテス・メソッド）を実施します。 毎授業終了後、質問・意見・感想を記載するリアクションペーパーの提出を求めます。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表については、原則授業内でコメントします。 リアクションペーパーでの質問には、原則授業内またはLMS上で回答・コメントをします。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	オリエンテーション、心理学研究法概論	対面
第2回	問題意識（発表）	対面
第3回	情報収集と研究デザイン	対面
第4回	研究倫理、データ収集と分析	対面
第5回	結果のまとめと考察	対面
第6回	研究成果の発表方法	対面
第7回	量的研究文献検討 1	対面
第8回	量的研究文献検討 2	対面
第9回	質的研究文献検討 1	対面
第10回	質的研究文献検討 2	対面
第11回	事例研究文献検討 1	対面
第12回	事例研究文献検討 2	対面
第13回	問題意識と研究の方向性（発表）	対面

事前・事後学	授業時間外に、自ら調べ、考え、まとめる作業が相当あります。作業方法のヒントやコツは教授しますが、体得していく部分も多いです。積極性・主体性が求められます。
--------	---

修	自分の研究テーマ（修士論文）を念頭において受講すると、理解が進み、実用的な知識・技能が身につきます。 事前・事後合わせて1授業当たり5時間を目途とします。
---	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	毎授業後に提出するリアクションペーパー 30％ 授業内での議論の内容・積極性 30％ 発表の内容 40％
テキスト	事前または授業内で配布します。
参考文献	『心理臨床学研究論文執筆ガイド 2022年新訂版』 日本心理臨床学会学会誌編集委員会 その他の参考文献は、授業内で適宜紹介します。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、臨床心理士・公認心理師資格を持ち、産業・労働領域および司法・犯罪領域における心理支援実務経験のある教員が実施します。研究と実務の双方をフィールドとしていることを活かし、研究と実務の関連性について様々な角度から教授します。
備考	本科目は、臨床心理士選択必修A群の科目です。大学院心理学研究科を修了するためには、同じA群の「臨床心理学研究法特論」か本科目かのいずれかを修得する必要があります。

年度	2025
講義名称	認知心理学特論[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 岡田 顕宏	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	人間の心理学的なメカニズムを解明する心理学的研究のメインストリームである認知心理学について、その方法論を理解することを目的とする。特に、この講義では、認知心理学の手法の応用分野である、認知神経科学および感情神経科学的アプローチを通した、人間の共感メカニズムの解明に関する最新知見について概説する。
到達目標	認知心理学の基本的な知識や方法論を理解し、人間の行動・思考・感情を認知心理学的な視点からとらえる、という見方を身につける。
授業の進め方	認知心理学のおよび認知神経科学的な観点から人間の行動・思考・感情を扱っている文献を講読する。受講者の発表と教員による解説、そしてディスカッションを中心に授業を展開する。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表のための資料作成と発表が課題の中心となる。受講者の発表に対する解説を通して、課題に対するフィードバックを行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	認知心理学の概要に関する講義	対面
第2回	共感の概念について	対面
第3回	情動感染について	対面
第4回	自動的模倣の効果	対面
第5回	知識の投影による共感	対面
第6回	共感の正確さについて	対面
第7回	共感的反応：同情および個人的苦悩	対面
第8回	臨床的共感について（１）	対面
第9回	臨床的共感について（２）	対面
第10回	臨床的共感について（３）	対面
第11回	他者の苦痛の知覚	対面
第12回	共感に関する進化的視点	対面
第13回	期末試験と解説	対面

事前・事後学修	事前学習としては、次回の発表箇所の資料作成が毎回必要となる。
---------	--------------------------------

成績評価基準と方法	毎回の発表（50％）と筆記試験（50％）で評価する。
テキスト	ジャン・デセティ、ウィリアム・アイクス（著）『共感の社会神経科学』勁草書房。
参考文献	授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	臨床心理関連行政論[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 佐藤 千裕	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	本講義は、子どもの教育や福祉をめぐる問題（児童虐待、いじめと不登校、障害のある子どもの支援、DV、親の離婚とこどもの親権・養育費・親子の面会交流、少年非行など）について、その実情を把握するとともに、これらの問題に対する行政・司法の対応、その基盤となる法律と制度、関係機関の種類と役割などについて、実務に即して理解することを目的とします。また、これらの問題への対応や支援における心理職の職務、職務遂行上の留意点についても解説します。
到達目標	到達目標は、次のとおりです。 1 子どもの教育や福祉をめぐる問題の実情と課題について説明できる。 2 行政・司法の対応の基盤となる法律と制度の概要について説明できる。 3 心理職の職務の内容、職務遂行上の留意点について説明できる。
授業の進め方	授業は、基本的には講義形式で行いますが、必要に応じてディスカッションを取り入れたり、皆さんと意見や感想を交換しながら進めたいと思っています。テーマによっては、過去の公認心理師試験問題について解説するなどして、理解を深めることも予定しています。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題に対するフィードバックは授業時に行います。
----------------------------	-------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	はじめに 講義の開始に当たって、講義全体のねらいと計画、成績評価の方法などについて説明する。また、公認心理師の職務の5つの分野、国の組織における行政と司法の役割、行政（政策の遂行）の基盤となる法律・政令・規則などについて解説する。
第2回	子どもの教育・福祉をめぐる問題（その1、児童虐待） 児童虐待の実情と動向について、統計資料に基づいて把握する。これを踏まえて、児童福祉法の主要な内容、児童虐待防止法の趣旨と目的（児童虐待の定義、国・地方公共団体の責務、早期発見の義務、通告の義務、強制調査、児相と警察の連携など）について理解する。
第3回	児童相談所の役割と機能 児童虐待事例(1)の検討を通じて、児童虐待通告の受理、児童の安全確保（48時間ルール、臨検・捜索など）と一時保護、調査と診断、虐待リスクの評価方法、児童福祉司と児童心理司の業務、判定会議・援助方針会議、措置の種類と内容など、児童相談所の虐待対応について理解する。
第4回	社会的養護と児童福祉施設 児童虐待事例(2)の検討を通じて、児童福祉施設への入所措置、児童福祉施設の種類と内容、里親制度、家庭裁判所による児童の施設入所の承認（児童福祉法28条事件、家庭裁判所調査官の調査、家事審判手続）などについて理解する。また、児童虐待に関する国の施策の動向を把握・理解する。
第5回	子どもの教育・福祉をめぐる問題（その2、障害のある子どもの教育と支援） 障害者基本法、障害者差別解消法、障害者虐待防止法及び発達障害者支援法の内容について概観し、障害者福祉の理念について理解する。これを踏まえて、発達障害のある児童・生徒への特別支援教育の体系、障害福祉サービスの体系などについて把握する。
第6回	子どもの教育・福祉をめぐる問題（その3、不登校、いじめ、暴力行為） 児童生徒の不登校、いじめの実情と動向について、統計資料に基づいて把握する。これを踏まえて、教育機会確保法の内容、不登校の児童生徒への支援の在り方、いじめ防止対策推進法の内容、いじめ問題への対応の在り方、学校と警察との連携上の留意点などについて理解する。
第7回	学校の体制づくりと児童生徒への対応 児童生徒の暴力行為の実情と動向について、統計資料に基づいて把握し、その対応の在り方について理解する。また、学校の体制づくりの必要性・重要性、チームとしての学校とは何か、教員と専門スタッフとの連携と情報共有、スクールカウンセラーの職責・教職員との連携の在り方などについて理解する。

第8回	子どもの養育・福祉をめぐる問題（その4、DV） 配偶者暴力（DV）の実情と動向について、統計資料に基づいて把握する。これを踏まえて、DVのメカニズム、加害者・被害者の心理、DVが子どもの発達・心理に及ぼす影響、DVの相談、保護命令、一時保護、配偶者暴力相談支援センターなどについて理解する。
第9回	子どもの教育・福祉をめぐる問題（その5、親の離婚と子どもの親権、養育費、親子の面会交流） 日本の離婚制度、離婚の実情と動向などについて、統計資料などに基づいて把握する。これを踏まえて、離婚紛争の特徴と態様、離婚後の子どもの親権、養育費、親子の面会交流に関する法律と制度、家庭裁判所における調停制度などについて理解する。
第10回	家庭裁判所と離婚紛争の解決 離婚と子どもの親権をめぐる紛争事例の検討を通じて、家庭裁判所調査官の調査、親の離婚が子どもの発達・心理に与える影響、離婚紛争の解決の在り方、家庭裁判所と学校や関係機関との連携などについて理解する。
第11回	子どもの教育・福祉をめぐる問題（その6、犯罪と非行） 少年非行の実情と動向について、統計資料に基づいて把握する。これを踏まえて、刑事裁判と少年審判（非行少年の処分を決める手続）との違い、少年審判制度の理念と特色、最近の少年非行の特徴などについて理解する。
第12回	家庭裁判所と少年事件、少年院、少年鑑別所、保護観察所 少年非行の事例検討を通じて、少年事件の処分の種類と内容、家庭裁判所調査官の調査、非行少年の処遇の実情、少年院・少年鑑別所・保護観察所の役割と機能、法務教官・法務技官・保護観察官の職務などについて理解する。
第13回	犯罪被害者の支援、医療観察制度 犯罪被害の事例検討を通じて、犯罪被害者の被害と心理、犯罪被害者を支援する法律と制度（犯罪被害者等基本法、犯罪被害者支援法など）、国の基本施策、犯罪被害者給付金、犯罪被害者等早期援助団体の役割と機能、医療観察制度などについて理解する。

事前・事後学修	本講義で取り上げる課題や問題（児童虐待、いじめと不登校、障害のある子どもの支援、DV、親の離婚とこどもの親権・養育費・親子の面会交流、少年非行など）は、社会問題としてメディアで取り上げられることが多いと思います。日ごろからこれらに関心を持ち、ニュース・新聞などで情報を入手するなどして授業に備えてください。また、講義の補足として、参考資料を授業時に配付したり、WebClass にアップすることを予定しています。これらの資料を復習に活用し、理解を深めてください。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	到達目標に記載した1～3を踏まえ、授業時の意見交換・質疑応答及び期末レポートに基づいて成績を評価します。 授業における意見交換・質疑応答　50％ 期末レポート　50％
テキスト	テキスト（教科書）は使用しません。毎回の授業時に講義資料（レジュメ）を配付し、これに基づいて授業を進めます。講義資料は、講義の一週間前を目途に WebClass にアップしますので、講義当日までに目を通しておいください。
参考文献	参考文献は、必要に応じて授業時に紹介します。講義の参考となる資料は、授業時に配付するほか、 WebClass にアップします。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	講師は、公認心理師です。長年にわたって家庭裁判所調査官として、児童虐待、いじめ、DV、親の離婚と子どもの親権、養育費、親子の面会交流、少年非行など、子どもの教育や福祉をめぐる問題に関わってきました。その実務経験を踏まえて、これらの問題の実情と課題、行政・司法の対応、その基盤となる法律と制度、心理職の職責や職務遂行上の留意点などについて、実務の視点や立場から講義したいと思います。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	障害者心理学特論[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 青木 美和子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	この授業では、主に発達障害の各障害をとりあげ、それに関する知識を深めるとともに臨床心理学的ケアを学ぶことを目的とします。発達障害を持つ人、その家族の事例をもとに、障害の特性やその障害に起因する社会適応上の困難について理解し、心理学的視点から必要とされる支援について福祉現場での参与観察の経験も通して考えていきます。
到達目標	・発達障害の特性について知るとともに、障害を持つ人の内面的世界を理解し、必要とされる支援について考えることができる。 ・対人援助職に必要な知識と技能を理解することができる。
授業の進め方	学内の授業だけでなく学外の福祉現場での参与観察にも出向きます。また、障害に対する知識、支援方法などを深めるため文献購読しレジメ発表をしてもらいます。必要に応じて、視聴覚教材、参考資料、事例などの使用、グループディスカッションを行います。

アクティブ・ラーニング

フィールドワーク

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回、受講生のレジメ、発表、フィールドワーク報告書に対してコメントする。
----------------------------	--------------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション・障害について
第2回	知的障害について
第3回	知的障害児・者への支援（文献レジメ発表） ・フィールドワークについて
第4回	フィールドワーク①
第5回	フィールドワーク②
第6回	フィールドワークの振り返り① 自閉症スペクトラム障害について
第7回	発達障害児・者の家族支援について
第8回	自閉症スペクトラム障害児・者への支援（文献レジメ発表）
第9回	フィールドワーク③
第10回	フィールドワーク④
第11回	フィールドワークの振り返り② ADHD・LDについて
第12回	ADHD、LD児・者についての支援（文献レジメ発表）
第13回	まとめ

事前・事後 学修	発達障害を理解するには、人間の知的発達、言語発達、社会性発達、認知発達、上道の発生と自己の成長などを理解しなければなりません。それぞれ発達心理学のテキストを読み、次回の授業に関する箇所をまとめてください。また、障害に関する研究論文（文献）を読み、レジメ作成も求めます。予習・復習の時間はそれぞれ2時間半を目安とします。
-------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	レジメ作成・発表 40％ グループ討論発表 10％ 課題レポート 30％ フィールドワーク報告書 20％
テキスト	特に指定しない

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、公認心理師の資格を持ち、福祉分野において相談業務、コンサルティング業務などの実務経験のある教員が、障害の特性や心理社会的課題、必要とされる支援について解説し、学生の理解を深められるよう講義を実施します。
備考	フィールドワークの交通費がかかります。

年度	2025
講義名称	投映法特論[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 佐々木 淑子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	心理査定の中の投映法について学ぶ。投映法は非構造的で曖昧な刺激や教示に対する自由な反応結果からパーソナリティを理解する手法である。実施技能や解釈の複雑さおよび信頼性・妥当性の不確かさがつきまとうこともあり、熟達までには多くの困難が伴う。それに関わらず、投映法は臨床心理の世界でこれまで重要な地位を築いてきた経緯があり、人の心の奥深さを知るには欠かせない手法と思われる。よって将来心理臨床家として歩もうとしている学生にとって、投映法の概略を理解し、実践的に諸技法の幾つかを体験することが重要となる。ここでは、投映法の考え方や諸技法、解釈法の基本を学び、さらに単独の投映法検査による解釈だけではなく、テスト・バッテリーを組むことで重層的に人間を理解することを目指す。
到達目標	投映法の中で使用頻度が高い「PFスタディ」と「描画法」については、その技法の習熟を目指す。他の心理アセスメントについては、種々の技法の特徴や使い方を理解する。そのうえで、知能検査や質問紙紙法と投映法を合わせて適切なテスト・バッテリーを組み、そこから具体的な人間像を描き出せるようなレポートを書くことを目指す。
授業の進め方	精神科臨床で心理査定、特に投映法の長い実務経験を持つ教員が、投映法の持つ意義や実施上の要点・スキルを伝えていく。人間の心理を奥深い次元で捉える投映法の考え方について、講義で学ぶ。その後、幾つかの投映法検査について理論的に学び、実際に検査者一被検者のロールプレイ実習を通して体験する。それらの検査について、実施法、採点法、解釈法、報告書作成等の一連のプロセスを実践的に習得する。

アクティブ・ラーニング

体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業時に実習的に取り組んだ心理査定についての課題（主にレポート作成）は、随時教員によるフィードバックを経て修正を重ねてレポートを提出することになる。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション。質問紙と投映法を体験し振り返る。質問紙のスコアリングおよびレポート作成を行う。
第2回	第1回目で実施した質問紙と投映法を振り返り、その違いと共通点を確認する。心理アセスメントの基本の振り返りを行う。
第3回	PFスタディ実習。PFスタディについて理論的に学習する。
第4回	PFスタディの結果を整理しレポートを作成する。
第5回	提出したレポートについてフィードバックを経て修正する。
第6回	描画法実習。描画法について理論的に学習する。主にHTPについて学ぶ。
第7回	描画法の理論的学習。主に風景構成法について学ぶ。実施した描画法のレポートを作成する。
第8回	提出したレポートについてフィードバックを経て修正する。
第9回	その他の投映法、主にSCTおよびTATについて学ぶ。
第10回	その他の投映法、主に夢および箱庭について学ぶ。
第11回	投映法を含めたテスト・バッテリーの組み方を学び、事例理解を深める。
第12回	学期末課題の説明を経て学期末課題レポート執筆に取り組む。
第13回	学期末課題レポートの指導を経て修正の上提出する。

事前・事後学修	各投映法に関する文献調査および資料から解釈を含めたレポート作成、さらにテスト・バッテリーを組んだ多量のデータからのまとめなど、予習・復習に費やす努力が求められる。特にPFスタディと描画、および学期末課題のレポート作成については、時間をかけて扱われるため、それぞれ丁寧なデータの読み取りと考察を膨らませる思考が求められる。上記のレポート作成には、予習・復習の時間合わせてそれぞれ2時間は必要と思われる。
---------	--

成績評価基準と方法	① PFスタディに関するレポート&ディスカッション：25% ② 描画法に関するレポート&ディスカッション：25% ①②の評価基準は、実施法を習熟して実施できること、採点表やレポートは担当教員のフィードバック&指導を受けて修正したうえで提出する。 ③ 学期末課題：50% ③の評価基準は、テスト・バッテリーを組むことの意義を理解しレポートに反映させること、および総合考察を担当教員の指導を受けて修正の上提出する。
テキスト	なし
参考文献	テキストおよび参考文献については、特に指定しない。授業内で重要と思われる著書や論文などの資料を適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	精神科臨床において心理査定の長い実務経験を持つ。投映法についても、ロールシャッハ・テスト、PFスタディ、描画法、SCTなどの経験を積んでいる。単に投映法だけの単独使用ではなく、アセスメント面接や知能検査および質問紙とバッテリーを組み、力動的な視点でどのように人間理解を深めるかについて伝える。また、心理面接と心理査定を照合していくことの重要性を伝える。
-------------------	--

年度	2025
講義名称	臨床心理査定演習Ⅰ〔心研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 澤田 信也	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	臨床心理的援助は多くの情報の総合的な判断に基づいて行われますが、本講義では行動観察や面接、心理検査の中では質問紙法を中心に学び、心理検査を実際に体験しながらレポート作成まで取り組みます。
到達目標	心理査定的重要性を理解し、自立して実施、処理、解釈しつつ実際の援助に役立てられる水準を目指します。
授業の進め方	講義と並行して検査を実際に体験し、議論しながら理解を深めていきます。臨床心理士として実務経験がある教員が指導します。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	レポートは講評を加えて返却し、検討を重ねながら一定の水準に達するまで援助します。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	オリエンテーション・心理査定の概要	対面
第2回	行動観察と面接法	対面
第3回	質問紙法①YG性格検査	対面
第4回	質問紙法②エゴグラム	対面
第5回	質問紙法③BIG 5	対面
第6回	知能検査の概要	対面
第7回	知能検査①鈴木ビネー式知能検査 1	対面
第8回	知能検査②鈴木ビネー式知能検査 2	対面
第9回	知能検査③WISCⅣ	対面
第10回	知能検査④WISCⅤ	対面
第11回	知能検査⑤WAISⅣ	対面
第12回	WAISⅣの実施	対面
第13回	レポート作成と事例検討	対面

事前・事後学修	検査データの分析やレポート作成には講義外の時間が必要です。事前、事後ともに2時間程度です。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●

自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	小レポート 30％ 検査実技 30％ まとめのレポート 40％
テキスト	指定はありません。資料を配布します。
参考文献	授業内で紹介します。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の 経歴と授業内容	公務員として多くの分野で臨床心理に関する実務を経験し、子供から成人まで多くの査定を実施してきました。児童精神科、児童相談所、職員健康管理部門などでの経験を参考に、実際の検査を体験しながら学びます。
-----------------------	--

年度	2025
講義名称	臨床心理査定演習Ⅱ〔心研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 澤田 信也	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	臨床心理査定Ⅰにおいて心理査定の基礎を学んだ後、さらに投影法について諸検査を身に付け、テストバッテリーを組むことで人間理解の深化を図ります。主に片口法を用いたロールシャッハ検査を学びます。
到達目標	片口法によるロールシャッハ検査が実施可能となり、総合的な査定力が実務レベルに達することを目指します。
授業の進め方	ロールシャッハ法を含め、臨床心理士として精神科臨床で多様な査定実務経験のある教員が指導します。検査の実施、処理、解釈からレポート作成まで実践の即した知識、技能の獲得を目指します。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	検査の実施や処理、レポート作成とその検討を通じて指導を重ねます。
----------------------------	----------------------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	ガイダンスと投影法の概要	対面
第2回	ロールシャッハ法に触れる	対面
第3回	反応領域	対面
第4回	反応決定因	対面
第5回	反応内容・形態水準	対面
第6回	結果の整理と解釈の基礎	対面
第7回	決定因の考え方	対面
第8回	反応内容の意味	対面
第9回	継列分析	対面
第10回	事例検討	対面
第11回	検査の実施	対面
第12回	データ整理	対面
第13回	解釈の基本とレポート作成	対面

事前・事後学修	テキストの読み込み、データの処理や解釈、レポート作成には講義外の時間が必要です。事前・事後ともに2時間程度。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●

自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	検査実技 30％ 小レポート 30％ まとめのレポート 40％
テキスト	資料を随時配布します。
参考文献	片口安史「改訂 新・心理診断法」金子書房

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	公務員心理士として多様な職場で実務を経験しました。児童精神科、児童相談所、職員健康管理部署、精神保健福祉センターなどで多くの査定実務に携わりました。講義ではその実務経験を生かした実践的な内容にします。理論のみならず検査の実施から解釈、報告まで実務レベルを目指します。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	臨床心理基礎実習Ⅰ〔心研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	1単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 松浦 秀太	大学・人文学部・心理学科
澤田 信也	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	「臨床心理基礎実習」では、臨床心理士として心理臨床活動を実践していく上で必要となる（１）クライアントと関わる際に必要となる基本的な心構え、（２）臨床心理士として必要となる基本的な知識と技能、（３）職業倫理（心理職の職責）、という３点の修得を目指す。 特に本実習科目「臨床心理基礎実習Ⅰ」では上記目標を達成するため、VTR学習とロールプレイを中心に行い、事例担当に必要な知識と技能、倫理を身につける。
到達目標	臨床心理士に必要な基本的心構え、倫理的態度、基礎的面接技法を身につける。また、それらに対する自分自身の課題を自覚する。
授業の進め方	形式は講義＋演習＋実習形式で行う。特に本科目ではロールプレイを中心に心理面接に必要な知識と技能を体験的に学習する。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題および見学施設先からの評価については、講義内でフィードバックを行う。
----------------------------	--------------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション（「実習の手引き」などの確認）
第2回	心理相談研究所の見学、倫理的側面の確認
第3回	心理面接の基礎（１）インテーク面接とは一概論／VTR視聴
第4回	心理面接の基礎（２）インテーク面接－親／VTR視聴
第5回	心理面接の基礎（３）インテーク面接－子ども／VTR視聴
第6回	心理面接の基礎（４）インテーク面接－青年・成人／VTR視聴
第7回	表現療法体験
第8回	心理相談研究所での電話受付演習（１）基本文献確認
第9回	心理相談研究所での電話受付演習（２）ロールプレイ
第10回	心理相談研究所での電話受付演習（３）ロールプレイ
第11回	心理相談研究所での電話受付演習（４）ロールプレイ
第12回	心理相談研究所での電話受付演習（５）ロールプレイ
第13回	模擬試験

事前・事後学修	・事前に「臨床心理面接特論Ⅰ」のテキストや心理療法、心理査定関連の書籍を読み込み、面接や査定についての理解を深めておくこと。 ・事後学習としてロールプレイなどの記録を書き、自身の面接スタイルについて理解を深めておくこと。 ・「臨床心理学特論Ⅰ」「臨床心理面接特論Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅰ」で学習した知識や理論と実習内容を常に総合することが重要となる。 ・上述のような事前及び事後学習は合計5時間を目安とする。	2025/04/01
---------	--	------------

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	以下の3点によって評価する。 ① 実習記録：45% ② ディスカッション：25% ③ 審査の評価：30%
テキスト	森田美弥子・金子一史（編）(2004). 臨床心理学実践の基礎 その1―基本的姿勢からインテーク面接まで. ナカニシヤ出版.
参考文献	適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本科目は臨床心理士としての医療保健領域、福祉領域、教育領域、産業領域での実務経験のある教員が担当する。
備考	本実習を履修するにあたり、以下の注意事項をよく読み、理解しておくことが必要となる。 【注意事項】 ・やむを得ない理由で欠席もしくは遅刻する場合、担当教員（澤田、松浦）に事前に連絡すること（事前連絡が難しい場合は、連絡が取れる状況となった後、早急に連絡すること）。欠席した回から2日以内に連絡がない場合、実習活動が中止となる場合がある。 ・課題などの提出物が期限内に提出されなかった場合、評価は「不可」となる場合がある。 ・初回講義時に春学期オリエンテーションで配布された「心理学研究科便覧」を持参すること。

年度	2025
講義名称	臨床心理基礎実習Ⅱ〔心研〕
講義開講時期	秋学期
必修区分	1:必修
学年	1年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	1単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 荒関 守	大学・人文学部・心理学科
澤田 信也	大学・人文学部・心理学科

授業の 目的と 概要	臨床心理行為の基本的心構えや技能を確実に身に付け、実践の場での活用方法を実習体験を通して学ぶ。具体的には、心理相談研究所をベースとして行われる種々の活動に指導教員の指導を受けながら参加し、心理臨床行為の実践訓練を積む。
到達目 標	「臨床心理基礎実習Ⅰ」で見出された各自の課題を振り返り、それらを確実に吸収していく。心理相談研究所に来談するケースに対して、様々な情報を総合して援助計画を立て、ケース担当に進む。
授業の 進め方	精神科臨床および本学心理相談研究所で臨床心理士として実務経験を有する教員が担当する。基本技法のスキルアップおよび陪席実習を重ね、実践現場への応用を図る。ケース担当が可能となった段階で、機会に恵まれる場合はケース担当へ進む。陪席記録の検討会や拡大事例検討会への参加が必要である。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	ロールプレイの実施や面接への陪席で触れた事例報告等について、疑問点や課題を解説しフィードバックする。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	オリエンテーションと実習の手引きの確認	対面
第2回	心理面接の基礎知識	対面
第3回	初回面接	対面
第4回	心理療法の基礎知識①、ロールプレイ①	対面
第5回	心理療法の基礎知識②、ロールプレイ②	対面
第6回	心理療法の基礎知識③、ロールプレイ③	対面
第7回	心理療法の基礎知識④、ロールプレイ④	対面
第8回	精神分析的遊戯療法、ロールプレイ⑤	対面
第9回	遊戯療法の基礎知識①。ロールプレイ⑥	対面
第10回	遊戯療法の基礎知識②、ロールプレイ⑦	対面
第11回	遊戯療法の基礎知識③、ロールプレイ⑧	対面
第12回	陪席面接の検討	対面
第13回	事例検討会の振り返り	対面

事前・事後学修	事前事後学習が必要であり、それぞれ2時間半程度を要する。
---------	------------------------------

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	ロールプレイによる理解と実践 3 0 % ミニレポート（面接記録） 4 0 % 発表会および討議 3 0 %
テキスト	竹内健司著「Q & Aで学ぶ心理療法の考え方・進め方」創元社 竹内健司著「Q & Aで学ぶ遊戯療法と親面接の考え方・進め方」創元社 伊藤研一・吉田弘道著「遊戯療法 二つのアプローチ」福村出版
参考文献	適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	司法、産業、福祉、医療等幅広い分野で臨床心理士としての実務経験豊富な複数の教員が指導する。より実践的な内容となるよう工夫している。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	臨床心理実習Ⅱ〔心研〕
講義開講時期	通年
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 荒関 守	大学・人文学部・心理学科
鈴木 憲治	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	本科目は、日本臨床心理士資格認定協会第1種指定校として修了認定の方針に基づく。本実習の目的は、修士1年目で学習してきた理論やスキルを実際の事例に活かせるようになることが目的である。具体的には心理相談研究所で担当する事例を通して、指導を受けるための事例のまとめ方、発表の仕方などを学び、アセスメントとセラピーをつなぐ事例理解、臨床家として必要な資質を自覚することを目標とする。
到達目標	①実際に事例を担当することを通し、臨床心理学的実践に関する知識や理論が、実践の場で如何に役立つかを理解し、面接の中で役立てることができる。 ②実践的学習であるスーパービジョンや事例検討会が臨床心理学的学習及び研究に占める重要性を理解し、報告資料をまとめることができる。 ③記録の取り方、保管、管理について、臨床心理士の守秘や倫理を理解した上で厳重に取り扱うことができる。
授業の進め方	本科目は、大きく分けて事例担当実習と事例発表実習の二つの実習で構成されている。 ①心理相談研究所の事例を担当し、毎回のケース終了後に記録をつける。 ②担当事例の記録を基に事例検討会に向けた報告書を作成し、事例検討会形式の実習講義にて発表（プレゼンテーション）し、ディスカッションを通して教員と他の受講者からの意見・助言を受ける。それらの意見・助言を事例の展開、解決に活かす。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	事例検討会形式の実習講義の中で、事例記録の付け方に関する添削指導を行う。また事例理解の視点についてディスカッションを重ねる過程で、事例理解を一層深め、その後の面接対応に活かす。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	オリエンテーション（実習記録のつけ方）	対面
第2回	事例検討のための資料の作り方Ⅰ	対面
第3回	初回来談時 面接陪席（主訴の確認）	対面（実習）
第4回	上記面接陪席報告とディスカッション（主訴内容の検討Ⅰ）	対面
第5回	アセスメント面接陪席Ⅰ（成育歴聴取）	対面（実習）
第6回	上記面接陪席報告とディスカッション（成育歴からの見立て作成）	対面
第7回	アセスメント面接陪席Ⅱ（家族関係の聴取）	対面（実習）
第8回	記面接陪席報告とディスカッション（家族力動の見立て）	対面
第9回	アセスメント面接陪席Ⅲ（介入・支援方針の検討）	対面（実習）
第10回	上記面接陪席報告とディスカッション（治療契約の確認）	対面
第11回	初期面接Ⅰ（ラポール形成）	対面（実習）
第12回	上記面接に対するディスカッション（ラポール形成確認とフィードバック）	対面
第13回	初期面接Ⅱ（ラポール形成）	対面（実習）

第14回	上記面接に対するディスカッション（ラポール形成確認とフィードバック）	対面
第15回	初期面接Ⅲ（ラポール形成）	対面（実習）
第16回	上記面接に対するディスカッション（面接中期に向けての見立て再検討）	対面
第17回	中期面接Ⅰ（面接の状況把握と介入）	対面（実習）
第18回	上記面接に対する進捗状況に応じた介入方法の再検討	対面
第19回	中期面接Ⅱ（面接の状況把握と介入）	対面（実習）
第20回	上記面接に対する進捗状況に応じた介入方法の再検討	対面
第21回	中期面接Ⅲ（面接の状況把握と介入）	対面（実習）
第22回	上記面接に対する進捗状況に応じた介入方法の再検討	対面
第23回	中期面接Ⅳ（面接の状況把握と介入）	対面（実習）
第24回	上記面接に対する進捗状況に応じた介入方法の再検討	対面
第25回	中期面接Ⅴ（面接の状況把握と介入）	対面（実習）
第26回	上記面接に対する面接終結に向けての治療計画の検討	対面
第27回	事例検討のための資料の作り方Ⅱ	対面
第28回	事例検討のための資料の作り方Ⅲ	対面
第29回	M 1 との合同事例検討会Ⅰ	対面
第30回	M 1 との合同事例検討会Ⅱ	対面
第31回	M 1 との外部講師を招聘しての検討会Ⅰ	対面
第32回	M 1 との外部講師を招聘しての検討会Ⅱ	対面
第33回	終結に向けた面接Ⅰ（終わりを告げること）	対面（実習）
第34回	上記面接に対する関わりの確認とクライアントの変化について	対面
第35回	終結に向けた面接Ⅱ（別れの痛みに対する支援）	対面（実習）
第36回	上記面接に関するクライアントの反応に対する支援の検討	対面
第37回	最終面接（別れ、または引き継事項について）	対面（実習）
第38回	上記面接に関するクライアントの反応に対する支援の検討	対面
第39回	「保育と心理臨床」事例検討会参加	対面
第40回	実習のまとめ（担当事例の支援の有効性について検討、ケースを終えてクライアントから学んだこと）	対面

事前・事後学修	【事前】 1 年次に学んだ知識や実習体験を振り返り、実際の事例担当に備える。また、担当事例に関連する幾つかの事例研究論文、文献を読む。 【事後】 担当事例の検討会形式授業を踏まえ、事例理解についての再検討、事例理解に必要な文献の収集、読み込みを行う。 事前・事後を合わせ、概ね5時間を目安とする。
-----------------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	①担当事例の発表内容評価：30％ ②他が担当した事例発表内容への関与度，貢献度：20％ ③事例の記録内容，記録の保管・管理：10％ ④学期末課題評価（事例検討会資料）：40％
テキスト	本研究科の実習の手引き、その他、適宜プリントを配布する。
参考文献	「心理臨床の発想と実践（心理臨床の基礎 1）」下山晴彦著 2000年 岩波書店 「精神分析的心理療法の実践―クライアントに会う前に」馬場禮子著 1999年 岩崎学術出版社 その他の参考文献は、授業内で適宜紹介します。

実務経験のある教員の有無

有り	
実務経験のある教員の経歴と授業内容	教育領域、産業・労働領域、司法・犯罪領域で実務経験のある複数の教員が、実務により培われた心理支援における視点を生かして、アセスメントとセラピーの基本を理解できる講義を実施する。
備考	臨床心理事例指導Ⅰ・Ⅱを並行して受講しなければならない。 授業の進展は各受講者の担当するケースの進展状況を勘案しながら調整する。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅰ〔心研〕〔橋本〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 橋本 久美	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	担当者の基本テーマに沿いつつ、学生個々の興味・関心に基づいて研究テーマを設定し、研究計画をたてて、調査・研究を進め、中間報告としてまとめる。中間報告は春学期1回、秋学期1回行う。
到達目標	研究テーマを設定し、研究計画を具体的にたてて資料・論文を集めて中間報告書にまとめる。
授業の進め方	臨床現場で研究テーマに即した事例と関わったり、データ収集に努めながら、蓄積した資料を、ゼミ内での発表や討論を通して検討し、仮説を精査し、研究を進めていく。論文作成のための基本指導は既に1年次から始まっている。担当教員である研究アドバイザーの下で、臨床心理学に関連した研究を進める。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員が指導する。担当教員として主たる研究アドバイザーである研究主査1名と、研究を側面からサポートする研究副査1名が関わる。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	教員や学生の前でのプレゼンテーション発表に対して、参加者の評価を求め、そのフィードバックをすることで、修士論文のよりよい完成に近づけるよう、意欲を促進する。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	1年次での成果を基礎に、さらに論文講読を重ね研究テーマを決定し、より詳細で具体的な研究計画をたてる	対面
第2回	1年次での成果を基礎に、さらに論文講読を重ね研究テーマを決定し、より詳細で具体的な研究計画をたてる	対面
第3回	1年次での成果を基礎に、さらに論文講読を重ね研究テーマを決定し、より詳細で具体的な研究計画をたてる	対面
第4回	1年次での成果を基礎に、さらに論文講読を重ね研究テーマを決定し、より詳細で具体的な研究計画をたてる	対面
第5回	1年次での成果を基礎に、さらに論文講読を重ね研究テーマを決定し、より詳細で具体的な研究計画をたてる	対面
第6回	調査研究計画に基づきデータの収集に努める。また、研究テーマに即した臨床現場のフィールドに赴いたり、事例との関わりを続け記録を蓄積していく	対面
第7回	調査研究計画に基づきデータの収集に努める。また、研究テーマに即した臨床現場のフィールドに赴いたり、事例との関わりを続け記録を蓄積していく	対面
第8回	調査研究計画に基づきデータの収集に努める。また、研究テーマに即した臨床現場のフィールドに赴いたり、事例との関わりを続け記録を蓄積していく	対面
第9回	調査研究計画に基づきデータの収集に努める。また、研究テーマに即した臨床現場のフィールドに赴いたり、事例との関わりを続け記録を蓄積していく	対面
第10回	調査研究計画に基づきデータの収集に努める。また、研究テーマに即した臨床現場のフィールドに赴いたり、事例との関わりを続け記録を蓄積していく	対面
第11回	担当教員の指導を受けながら、中間報告書をまとめる。中間報告発表会で、多くの教員からの評価や指導を受けたり、他の学生からの意見も参考にし、後期の論文完成に向かう。中間発表は、途中経過の発表という意味合いにとどまるのではなく、これまでの成果を発表し、多くの議論と批判を頂いて、さらに論文を精査するものである。	対面
第12回	中間発表でのフィードバックを踏まえて研究作業を進める	対面

第13回	中間発表でのフィードバックを踏まえて研究作業を進める 研究倫理申請書作成を進める	対面
------	--	----

事前・事後学修	【具体的な内容】 課題研究指導Ⅰ・Ⅱの準備として、1年目で心理学研究法や、臨床心理学研究法で学んだ内容を理解しておくこと。 【必要な時間】 事前・事後共におおむね2時間程度。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	授業への出席、調査・研究の進行状況の報告・発表の仕方、作成された中間報告書などを総合的に評価する。 中間報告は、論文提出の条件である。
テキスト	個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。
参考文献	個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員が修士論文を指導する。
備考	課題研究は、入学時に提出した研究テーマを元に準備を進める。1年目での講義、演習、実習などで、それぞれ研究に必要な知識や研究手法などを意識した履修をすること。また、アドバイザーとの相談の機会も活用し、準備を進めること。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅰ〔心研〕〔岡田〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 岡田 顕宏	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	学生の興味・関心を生かして研究テーマを設定し、研究計画の作成、調査、研究を進め、中間報告としてまとめる。
到達目標	修士論文の完成に向けて、（１）研究計画などを発表できる形にすること、（２）研究の背景についてまとめること、（３）調査研究を実施・分析し、文章としてまとめることが到達目標となる。
授業の進め方	研究テーマに沿った調査、データ収集に努める。データの取り扱いに習熟し、仮説生成、検証、討論を重ねていく。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士資格を有する教員が指導する。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業中に指導します。
----------------------------	------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	研究テーマの発表と指導	対面
第2回	研究テーマの発表と指導	対面
第3回	研究テーマの発表と指導	対面
第4回	調査実施計画の指導	対面
第5回	調査実施計画の指導	対面
第6回	調査実施計画の指導	対面
第7回	予備調査の分析指導	対面
第8回	調査実施計画指導	対面
第9回	デー分析指導	対面
第10回	デー分析指導	対面
第11回	デー分析指導	対面
第12回	中間報告指導	対面
第13回	中間報告指導	

事前・事後学修	必要な文献の講読、調査の準備・実施・分析、発表資料の作成が必要となります。
---------	---------------------------------------

成績評価基準と方法	授業における発表（8%）、中間報告での発表内容（41%）、中間レポート（41%）によって評価する。
テキスト	テキストの指定はありません
参考文献	日本心理学会「執筆・投稿の手引き」 https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2019/02/The-JPA-Publication-Manual.pdf その他、授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅰ[心研][複本]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	学生個々の興味・関心に基づいて研究テーマを設定し，研究計画を立て，調査・実験等研究を進め，中間報告としてまとめる。中間報告は春学期1回，秋学期1回行う。
到達目標	①研究計画書を完成させる。 ②研究計画書に沿って研究を進め，中間報告書を作成する。 ③中間報告書の内容を報告会で発表する。
授業の進め方	研究や論文の進捗状況についてゼミ内で報告をし，指導教員とのディスカッションを通して結果の分析や考察，仮説の検証を行い，研究を進めていく。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	教員や学生の前でのプレゼンテーションや発表に対して参加者のコメントを求め，フィードバックを受けることで修士論文のよりよい完成に近づけるよう意欲を促進する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション／論文の講読について
第2回	研究計画報告
第3回	先行研究レビュー報告①
第4回	先行研究レビュー報告②
第5回	研究計画修正報告
第6回	論文執筆報告①
第7回	論文執筆報告②
第8回	研究倫理審査について
第9回	研究倫理審査申請書報告
第10回	中間報告に向けて①
第11回	中間報告に向けて②
第12回	中間報告振り返り／今後の研究計画について
第13回	研究計画修正報告②

事前・事後学修	<事前学習> ・論文を講読し，興味を持ったこと，疑問に思ったことや今後の課題であると思われることを述べられるようにしておいてください。 ・興味・関心のあるテーマについて，日ごろから注意深くアンテナを張り，論文や書籍等から情報を収集しておいてください。 <事後学習>
---------	---

	講義内容の復習や、提示されたり自ら見つけた発展課題をノート等にまとめてください。 <必要な時間> 事前・事後学習にはそれぞれ2時間必要となります。
--	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	研究の進行状況の報告レポート（30点）＋ゼミ内でのプレゼンテーション（30点）＋中間報告書（40点）＝100点で評価する。 中間報告は修士論文提出の条件である。
テキスト	使用しない。
参考文献	必要に応じてその都度紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、教育・福祉・医療現場で臨床心理士・公認心理師として27年の実務経験のある教員がその臨床経験を生かして修士論文の執筆を指導します。
備考	論文作成のための基本指導は既に1年次から始まっている。担当教員である研究アドバイザーの下で、臨床心理学に関連した研究を進める。課題研究は入学時に提出した研究テーマを元に準備を進める。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅰ(長期履修)[心研][澤田]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 澤田 信也	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	学生の興味・関心を生かして研究テーマを設定し、研究計画の作成、調査、研究を進め、中間報告としてまとめる。
到達目標	先行研究の調査を十分行い、問題意識をしっかりと持って計画を作成する。調査、分析方法についても研究を深める。
授業の進め方	臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士資格を有する教員が指導する。臨床現場で実際に事例にかかわり、研究テーマに沿った調査、データ収集を行い、データの取り扱い、仮説生成、検証、討論を重ねる。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	調査、研究のプロセスに沿って議論を重ねる。
----------------------------	-----------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	テーマの検討	対面
第2回	テーマの設定	対面
第3回	研究計画の検討	対面
第4回	先行研究調査	対面
第5回	調査・研究	対面
第6回	調査・研究	対面
第7回	倫理審査・中間報告準備	対面
第8回	論文作成	対面
第9回	論文作成	対面
第10回	論文作成	対面
第11回	研究計画・倫理審査・中間発表検討	対面
第12回	論文作成	対面
第13回	総括討論	対面

事前・事後学修	講義前後には調査やデータ整理、論文化の作業が必須です。それぞれ少なくとも2時間を要します。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●

自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	講義への出席、調査研究の実施状況、中間報告の内容等を総合的に評価する。なお、中間報告は論文提出の条件である。
テキスト	適宜推薦する。
参考文献	適宜推薦する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	臨床心理士、公認心理師である教員は、公務員心理職として幅広い現場での実務経験を有する。医療、福祉、産業、地域精神保健等の実務経験を活かし、実践に即した指導を行う。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅰ(長期履修)[心研][榎本]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	学生個々の興味・関心に基づいて研究テーマを設定し，研究計画を立て，調査・実験等研究を進め，中間報告としてまとめる。中間報告は春学期1回，秋学期1回行う。
到達目標	①研究計画書を完成させる。 ②研究計画書に沿って研究を進め，中間報告書を作成する。 ③中間報告書の内容を報告会で発表する。
授業の進め方	研究や論文の進捗状況についてゼミ内で報告をし，指導教員とのディスカッションを通して結果の分析や考察，仮説の検証を行い，研究を進めていく。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	教員や学生の前でのプレゼンテーションや発表に対して参加者のコメントを求め，フィードバックを受けることで修士論文のよりよい完成に近づけるよう意欲を促進する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション／論文の講読について
第2回	研究計画報告①
第3回	先行研究レビュー報告①
第4回	先行研究レビュー報告②
第5回	研究計画修正報告①
第6回	論文執筆報告①
第7回	論文執筆報告②
第8回	研究倫理審査について
第9回	研究倫理審査申請書報告
第10回	中間報告に向けて①
第11回	中間報告に向けて②
第12回	中間報告振り返り／今後の研究計画について
第13回	研究計画修正報告②

事前・事後学修	<事前学習> ・論文を講読し，興味を持ったこと，疑問に思ったことや今後の課題であると思われることを述べられるようにしておいてください。 ・興味・関心のあるテーマについて，日ごろから注意深くアンテナを張り，論文や書籍等から情報を収集しておいてください。 <事後学習> 講義内容の復習や，提示されたり自ら見つけた発展課題をノート等にまとめてください。
---------	---

	<必要な時間> 事前・事後学習にはそれぞれ2時間必要となります。
--	-------------------------------------

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	研究の進行状況の報告レポート（30点）＋ゼミ内でのプレゼンテーション（30点）＋中間報告書（40点）＝100点で評価する。 中間報告は修士論文提出の条件である。
テキスト	使用しない。
参考文献	必要に応じてその都度紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、教育・福祉・医療現場で臨床心理士・公認心理師として27年の実務経験のある教員がその臨床経験を生かして修士論文の執筆を指導します。
備考	論文作成のための基本指導は既に1年次から始まっている。担当教員である研究アドバイザーの下で、臨床心理学に関連した研究を進める。課題研究は入学時に提出した研究テーマを元に準備を進める。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅱ〔心研〕〔橋本〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 橋本 久美	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	前期にまとめた中間報告書の内容をさらに発展させながら、それらの研究成果を研究として完成させる。 「課題研究指導Ⅰ」で培った理解・分析をさらに発展させていくことに努め、仮説を実証し、考察力を深め、最終的には論文にまとめていく。
到達目標	研究テーマを設定し、研究計画を具体的にたて、資料・論文を集めて論文を完成させ、提出する。
授業の進め方	臨床現場での実践や調査の過程を報告し、全体での討議と担当者の指導を受けながら、各自で主体的に研究を進める。実践、調査、データ処理とまとめ、考察の過程を通して教員の指導を受けながら、学生が主体的に研究を進める。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員が指導する。 前期に引き続き、臨床心理学の諸概念や心理的援助などの心理臨床に関連した研究を進めていく。 各自実験調査もしくは臨床現場での実践によるデータを蓄積していく。

アクティブ・ラーニング

PBL 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	検討内容を共有し、論文作成をすすめていく。
----------------------------	-----------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第2回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第3回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第4回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第5回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第6回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第7回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第8回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第9回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面
第10回	授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。	対面

第11回	第2回中間報告発表会場で、参加した他の教員や学生から得た意見および指導を論文作成に活かす。	対面
第12回	前回までの過程を重ねながら、最終的に修士論文を完成させ提出する。	対面
第13回	前回までの過程を重ねながら、最終的に修士論文を完成させ提出する。	対面

事前・事後学修	【具体的な内容】 課題研究指導Ⅰ・Ⅱの準備として、1年目で心理学の研究法や、臨床心理学研究法を必ず理解しておくこと。 【必要な時間】 事前・事後共に2時間程度。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	提出された課題研究論文に関して、審査を行いその内容を評価する。併せて、研究科在籍期間全体を通しての、心理臨床の実践に関しても面接および記録を通して評価し、総合的な判断の上で、単位認定を行う。
テキスト	個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。
参考文献	個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員が論文指導する。
備考	課題研究は、入学前に提出した研究テーマをもとに準備を進める。1年目での講義、演習、実習などで、それぞれの研究に必要な知識や研究手法などを意識した履修をすること。また、アドバイザーとの相談の機会も活用し、準備を進めること。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅱ〔心研〕〔岡田〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 岡田 顕宏	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	臨床心理学のテーマに基づいた修士論文を完成させるための指導を行うのがこの授業の目的となります。
到達目標	臨床心理学的なテーマに沿った、実証研究に基づく修士論文を完成させることが目標です。
授業の進め方	研究テーマに沿った調査、データ収集に努める。データの取り扱いに習熟し、仮説生成、検証、討論を重ねていく。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士資格を有する教員が指導する。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業中に指導します。
----------------------------	------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	データ分析と論文執筆指導	対面
第2回	データ分析と論文執筆指導	対面
第3回	データ分析と論文執筆指導	対面
第4回	データ分析と論文執筆指導	対面
第5回	データ分析と論文執筆指導	対面
第6回	データ分析と論文執筆指導	対面
第7回	データ分析と論文執筆指導	対面
第8回	データ分析と論文執筆指導	対面
第9回	論文執筆指導	対面
第10回	論文執筆指導	対面
第11回	口頭試問のための指導	対面
第12回	口頭試問のための指導	対面
第13回	研究発表のための指導	対面

事前・事後学修	必要な文献の講読、調査の準備・実施・分析、発表資料の作成が必要となります。
---------	---------------------------------------

成績評価基準と方法	中間報告での発表、論文審査に基づいて評価します。
テキスト	テキストの指定はありません。
参考文献	日本心理学会「執筆・投稿の手引き」 https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2019/02/The-JPA-Publication-Manual.pdf その他、授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅱ[心研][複本]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	春学期にまとめた中間報告書の内容をさらに発展させながら，それらの研究成果を研究として完成させる。 「課題研究指導Ⅰ」で培った理解・分析をさらに発展させていくことに努め，仮説を検証し，研究の結果について考察を深め，最終的には論文にまとめる。
到達目標	①研究計画書に沿って，調査，実験，面接等を行う。 ②調査，実験，面接などで収集したデータをまとめ，量的あるいは質的分析を行う。 ③分析結果について考察を行う。仮説を立てた場合は仮説の検証も行う。 ④上記について修士論文にまとめる。
授業の進め方	「課題研究指導Ⅰ」で立てた研究計画に沿って研究を進める。論文は随時執筆をし，担当者からの添削を受ける。調査，実験，面接の実施やデータの分析については随時指導者に報告をし，指導を受ける。

アクティブ・ラーニング

フィールドワーク ディスカッション 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	教員や学生の前でのプレゼンテーションや発表に対して参加者のコメントを求め，フィードバックを受けることで修士論文のよりよい完成に近づけるよう意欲を促進する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	調査・実験・面接の実施について
第2回	論文添削指導①
第3回	論文添削指導②
第4回	データの集計と分析について①
第5回	データの集計と分析について②
第6回	データの集計と分析について③
第7回	第2回中間報告会に向けて
第8回	第2回中間報告会振り返り
第9回	考察についてのディスカッション①
第10回	論文添削指導③
第11回	考察についてのディスカッション②
第12回	論文添削指導④
第13回	論文添削指導⑤／修士論文執筆の振り返り

	＜事前学習＞ 次回の講義の内容について必要な文献を読んだり，プレゼンテーションの準備をしたりしてください。	2025/04/01
--	--	------------

事前・事後学修	<事後学習> 講義時に指導を受けた内容について論文の執筆を進めたり，考察を行ったりしてください。 <必要な時間> 事前・事後学習にはそれぞれ2時間必要となります。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	研究の進行状況の報告レポート（30点）＋ゼミ内でのプレゼンテーション（30点）＋中間報告書（40点）＝100点で評価する。 中間報告は修士論文提出の条件である。
テキスト	使用しない。
参考文献	必要に応じてその都度紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、教育・福祉・医療現場で臨床心理士・公認心理師として27年の実務経験のある教員がその臨床経験を生かして修士論文の執筆を指導します。
備考	論文作成のための基本指導は既に1年次から始まっている。担当教員である研究アドバイザーの下で，臨床心理学に関連した研究を進める。課題研究は入学時に提出した研究テーマを元に準備を進める。

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅱ(長期履修)[心研][澤田]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 澤田 信也	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	中間報告の内容をさらに発展させ、仮説検証、考察をすすめ最終的には論文にまとめる。
到達目標	研究テーマに沿い、研究計画を進めて論文の完成を目指す。
授業の進め方	実践、調査、データ処理とまとめ、考察の過程を通して教員の指導を受けながら、学生が主体的に研究を進める。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士資格を有する教員が指導する。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	検討内容を共有し、論文作成を進めていく。
----------------------------	----------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	調査・研究	対面
第2回	調査・研究	対面
第3回	調査・研究	対面
第4回	調査・研究	対面
第5回	論文作成	対面
第6回	論文作成	対面
第7回	論文作成	対面
第8回	中間報告準備	対面
第9回	中間報告	対面
第10回	論文作成	対面
第11回	論文作成	対面
第12回	論文作成	対面
第13回	発表会準備・総括	

事前・事後学修	講義前後の自己学習が重要であり、それぞれ2時間程度を要する。
---------	--------------------------------

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●

自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	提出された論文の審査を行う。研究科在籍期間全体の実践や研究を総合的に評価する。
テキスト	適宜推薦する。
参考文献	適宜推薦する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	臨床心理士、公認心理師である教員は、公務員心理職として幅広い実務経験がある。医療、福祉、地域精神保健等幅広い分野での実践をもとに、総合的な分析を支援する。
-------------------	---

年度	2025
講義名称	課題研究指導Ⅱ(長期履修)[心研][榎本]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	春学期にまとめた中間報告書の内容をさらに発展させながら，それらの研究成果を研究として完成させる。 「課題研究指導Ⅰ」で培った理解・分析をさらに発展させていくことに努め，仮説を検証し，研究の結果について考察を深め，最終的には論文にまとめる。
到達目標	①研究計画書に沿って，調査，実験，面接等を行う。 ②調査，実験，面接などで収集したデータをまとめ，量的あるいは質的分析を行う。 ③分析結果について考察を行う。仮説を立てた場合は仮説の検証も行う。 ④上記について修士論文にまとめる。
授業の進め方	「課題研究指導Ⅰ」で立てた研究計画に沿って研究を進める。論文は随時執筆をし，担当者からの添削を受ける。調査，実験，面接の実施やデータの分析については随時指導者に報告をし，指導を受ける。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	教員や学生の前でのプレゼンテーションや発表に対して参加者のコメントを求め，フィードバックを受けることで修士論文のよりよい完成に近づけるよう意欲を促進する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	調査・実験・面接の実施について
第2回	論文添削指導①
第3回	論文添削指導②
第4回	データの集計と分析について①
第5回	データの集計と分析について②
第6回	データの集計と分析について③
第7回	第2回中間報告会に向けて
第8回	第2回中間報告会振り返り
第9回	考察についてのディスカッション①
第10回	論文添削指導③
第11回	考察についてのディスカッション②
第12回	論文添削指導④
第13回	論文添削指導⑤／修士論文執筆の振り返り

	<事前学習> 次回の講義の内容について必要な文献を読んだり，プレゼンテーションの準備をしたりしてください。	2025/04/01
--	--	------------

事前・事後学修	<事後学習> 講義時に指導を受けた内容について論文の執筆を進めたり，考察を行ったりしてください。 <必要な時間> 事前・事後学習にはそれぞれ2時間必要となります。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	研究の進行状況の報告レポート（30点）＋ゼミ内でのプレゼンテーション（30点）＋中間報告書（40点）＝100点で評価する。 中間報告は修士論文提出の条件である。
テキスト	使用しない。
参考文献	必要に応じてその都度紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、教育・福祉・医療現場で臨床心理士・公認心理師として27年の実務経験のある教員がその臨床経験を生かして修士論文の執筆を指導します。
備考	論文作成のための基本指導は既に1年次から始まっている。担当教員である研究アドバイザーの下で，臨床心理学に関連した研究を進める。課題研究は入学時に提出した研究テーマを元に準備を進める。

年度	2025
講義名称	[冬集]福祉分野に関する理論と支援の展開[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 山本 創	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	本講義では福祉、特に精神保健福祉の歴史、理論、制度、現在の状況を学ぶ。その上で心理として福祉分野で働くということについて、そのための一方法を学びながら、現場の実践家として自らの役割を俯瞰的に理解し、主体的に思考できる視点を獲得することを目指す。
到達目標	(1)公認心理師に必要な福祉分野に関する基本的な知識を獲得する。 (2)心理として福祉分野に関わって実践を行うための思考や判断の元となる視点を各自が確立する。
授業の進め方	精神科病院、福祉事業所にて臨床心理士・公認心理師として心理的援助に携わった実務経験を持つ教員による講義を基本としつつ、映像による現場の実状理解、それについてのディスカッション、シナリオロールプレイによる知的・情的な追体験、グループワークによる体験的な相互学習などを行う予定。 ①イントロダクション・・・心理職と福祉領域 ②福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(欧米1) ③福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(欧米2)、振り返り小レポート1 ④福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(日本1) ⑤福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(日本2) ⑥精神保健福祉の現在 就労支援1 ⑦福祉の理論 精神保健福祉に関わる諸法規・諸概念1 ⑧福祉の理論 精神保健福祉に関わる諸法規・諸概念2、ふり振り返り小レポート2 ⑨精神保健福祉の現在 就労支援2 ⑩一方法としての集団力動的視点(その理論)、ふり振り返り小レポート3 ⑪集団力動的視点を持ったデイケア実践 ⑫集団力動的視点を持った就労継続支援プログラム(シナリオロールプレイ) ⑬心理職としての視点と役割、とは何だろうか？

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	講義中の小レポートに対するコメントなどを通して行う。
----------------------------	----------------------------

事前・事後学修	前回授業のレジュメを読み返したり、関連する事象について文献を読むなどして、自律的に学びを深め視野を広げること。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	授業期間内のふり振り返り小レポート(20%)と終了後の総合レポート作成(80%)の提出による。
テキスト	なし
参考文献	毎回の講義に関連する参考文献・引用文献については、その都度紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	【医療分野】 大学病院精神神経科、民間精神科病院勤務歴29年 【教育分野】 札幌市・北海道スクールカウンセラーとして小中高に勤務歴24年 【福祉分野】 精神障がい者小規模作業所職員、障がい者就労支援を主事業とするNPO法人経営歴29年 いずれの領域に於いても心理職がすべき仕事について、狭義の役割に捉われずに何をすべきかという問題意識を持って活動してきている。そのような経験を踏まえて、本授業では福祉分野における心理職の仕事について皆さんと理解を深めていきたい。
備考	グループワークという学習形態の特質上、全回出席を基本的な前提とする。 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要があります。

年度	2025
講義名称	教育分野に関する理論と支援の展開[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 本間 芳文	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	教育分野において、スクールカウンセラー等の支援者として求められる知識と理解、支援方法等について学ぶ。 その内容は、教育における支援の基盤を定める法律と行政の動向およびいじめや不登校などの心理社会的な課題の予防や対応の方法、それに加えて特別な支援の配慮を要する障害のある子どもの理解と対応がある。また、健全な学校生活を送るためのすべての子どもたちを対象にした心理教育的啓発を含む。 また、教育現場や子どもの発達相談に関連のある心理検査についても演習や活用も含めて扱っていく。
到達目標	不登校課題やいじめ問題、学力不振を含む発達障害などの学校不適応諸課題を仔仔に題材にして、心理的支援者として求められる知識と理解、支援方法等について、以下の3点を説明できる。 ①教育分野を支える法律と行政の動向を説明できる。 ②不登校、いじめ、学力不振などの心理社会的な課題の予防や対応の方法を、担任の役割理解を含めて理解できる。 ③その支援者として求められる資質や実践力について理解できる。
授業の進め方	①オリエンテーション。授業のねらいと進め方について話し、園、学校における心理社会的背景をもつ教育課題について、調査や参考資料を活用しながら取り上げ、検討していく。下記授業の流れは、実態に応じて順番は再編成することがある。 ②教育分野を支える法律等と行政の動向についての基本的理解をする。 ③「学校心理学」の理念と概要を理解する。 ④「いじめ」とは何かを調べ学習をもとに発表する。 ⑤「いじめ」の対応の本質と具体的な対処方法について検討する。 ⑥「不登校」とは何かを調べ学習をもとに発表する。 ⑦「不登校」の対応の本質と具体的な対処方法について検討する。 ⑧「自閉症スペクトラル障害」とは何かを調べ学習をもとに発表し、対処方法について検討する。 ⑨「ADHD」とは何かについて調べ、対処方法について検討する。 ⑩「学力不振」と「学習障害」の違いを調べ、対処方法について検討する。 ⑪「学級崩壊」に象徴される学級集団の心理特性を理解し、その対処方法を検討する。 ⑫「今日の教育課題」といわれるものを自分なりに再度捉えなおし、その課題の対応に求められる心理支援者の役割を総括的にまとめる。 ⑬授業のまとめと、心理支援者となるための自己課題について考察させる。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	学習課題を適宜与え、その課題については授業で発表させるとともに、その発表を取り入れた授業を行い、達成感を味わわせる。不十分な点は補足加田を課題を与え、事後の授業の中で補足の発表をさせ、その折に肯定的なを重視したフードバックを行う。
----------------------------	---

事前・事後学習	①全体的な授業に臨む基本姿勢として、次の授業のテーマについての予習をすることや、授業後の感想文や発展課題を与え、基本的学びが高まるよう配慮する。 ②授業の中で授業発表課題として与えられた課題については、授業の事前学習としてよく調べるとともに、発表の効果があがるような表現も工夫させる。
---------	---

成績評価基準と方法	①「講義内容の理解や検出力」50％ ②「分担された課題やレポート課題の内容」50％
テキスト	テキストは指定しない。テーマに応じて院生自身が自主的に調べ学習をすることとする。
参考文献	①一般社団法人日本心理研修センター監修「公認心理師現任者講習会テキスト」金剛出版、 ②星野仁彦「発達障害にきづかない大人たち」（2017）祥伝社新書

実務経験のある教員の経歴	教育実務経験は以下の通り。 ①公立小学校、中学校教諭（特殊教育も含む）・・・20年 小学校では、社会、体育、図画工作の専科の指導、中学校では社会科の専科指導と担任としての指導および、全学を対象とした教育相談専任を担当。
--------------	---

と授業内容

②公立教育研究所教育相談室相談担当研究員・・・8年

この教育相談室では、札幌市全体の親子を対象にした教育相談を専任として毎日担当。相談内容では、不登校が多く、そのほかにいじめ、学力不振、発達障害、非行相談などがあった。

上記①②を通して子どもたちの気持ちに寄り添い、希望をききながら、ともに進むべき道を話し合う日々を過ごしていた。

年度	2025
講義名称	保健医療分野に関する理論と支援の展開[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 米島 広明	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	保健及び医療の分野における心理職の役割と、支援の考え方を整理していくことを基本としますが、実際の臨床の中で起こる具体的な事例から、支援の対象になる方々をどのように理解していくことが大切なのかを中心に考えていきたいと思います。またその理解の中で、支援の方法や方向性を柔軟に考えていけることの基礎となるような情報をお伝えできることを目標にしています。内容的には神経発達症の子どもたちの話を中心に理解と支援について考えていこうと思います。
到達目標	様々な支援・援助場面において多角的な視点をもって柔軟に考える姿勢（マニュアル的な見方や支援方法ではなく、自分で情報を捉えて、考えていける姿勢）の基礎ができること
授業の進め方	基本的には講義形式で進めていきます。講義の後半に皆さんとお話ができると良いかと考えています

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	学生からの求めがあれば、課題に対する感想や意見をお伝えしていこうと思います
----------------------------	---------------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	実際の医療や保健機関の概要を中心に、医療・保健のみならず福祉も含めた支援の実態を紹介する
第2回	医療・保健分野における精神医学・児童精神医学との関係について
第3回	幼児期における精神医学的な問題と対応
第4回	幼児期における精神医学的な問題と対応
第5回	保健領域における幼児期の関りについて
第6回	学齢期における精神医学的な問題と対応（神経発達症を中心に）
第7回	学齢期における精神医学的な問題と対応（神経発達症を中心に）
第8回	学齢期における精神医学的な問題と対応（不登校など）
第9回	家族への支援を考える
第10回	家族への支援を考える
第11回	保健医療分野と他領域との連携について
第12回	災害時の心のケアに関して
第13回	全体的なまとめと振り返り

事前・事後学習	必要な事前・事後学習は必要ありませんが、神経発達症の子どもたちの話が多くなりますので、多少関連する知識があった方が良いかもしれません。また子どもに関わるようなボランティアやアルバイトをしている学生の場合は、授業後に子どもと付き合う中で色々と考えていただけると良いかもしれません。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	● 2025/04/01
------------------	-----------------

臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	授業への出席に加え、講義中の発言や意見交換（２０％程度）、小レポート（２０％程度）、最終レポート（５０％程度）
-----------	---

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	障害児福祉施設に勤務の後、児童精神科の外来で心理職として勤務しています。また保健センターでおこなう乳幼児健診や発達相談も経験しています。
-------------------	--

年度	2025
講義名称	司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 鈴木 憲治	大学・人文学部・心理学科

授業の 目的と 概要	本講義では、「司法・犯罪心理学」で理解した、基礎的な理論及び各種技法をもとに、より高度で実務的な理論及び各種技法を習得することを目的とします。犯罪・非行にかかわる心理学の理論のみならず、関連する国内法（実体法、手続法）について関連付けて学びます。 司法における《刑事手続き分野》においては、犯罪行為や非行行動に至る心理や、犯罪被害者となった方々の心理とそのケア等、非行・犯罪のリスクアセスメント・リスクマネジメントに関する基本と刑事司法にかかわる心の問題を学びます。 司法における《民事手続き分野》においては、子どもの権利を中心に、家庭内で生じる紛争について、家族法や家族社会学、生涯発達心理学などの知見、当事者の方々への心理的援助法を学びます。 心理専門職である公認心理師として連携を求められる可能性が高い関係組織、関係機関や他職種の業務の内容、実態について知見を深めます。
到達目 標	本授業では、以下の事項について基礎的理解をもとに、実務的な知見を得ていることが求められます。 《刑事手続き分野》 1）少年法等基本法規が理解できる 2）少年事件の審判手続きが理解できる 3）非行臨床機関の概要が理解できる 4）少年非行の動向、特質、心理的背景が理解できる 5）非行臨床で用いられるアプローチが習得できている 6）司法・犯罪分野における心理社会的支援の課題が理解できる 《民事手続き分野》 1）家族法等基本法規が理解できている 2）司法手続きにおける子どもの権利について理解できる 3）司法手続きに関わる関係機関の概要について理解できる 4）司法手続き下にある子どもの心理的背景が理解できる 5）司法手続き下にある成人の心理的背景が理解できる 6）司法手続き下における心理社会的支援の課題が理解できる 【卒業認定・学位授与の方針との関連】 「臨床心理学領域における基礎的知識、技能の修得およびそれを基にした専門知識、技能の修得」を身に付けている学生に学位を授与するDPに基づき、司法・犯罪分野における心理的支援に不可欠な枠組を理解した上で、その基礎理論及び各種技法に関する基礎的知識を習得します。 本研究科の学位授与に関する総合的に身につけるべき能力は以下の通りです。 DP1「臨床心理に関する高度な知識と技能」 DP2「臨床心理学的研究法と観察事実の分析法」 DP3「自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能」 DP4「現代社会の臨床心理的課題の理解 具体的に求められるものは以下の通りです。 ①司法・犯罪分野の制度・法・職種についての基礎知識を得る。 ②司法・犯罪分野における犯罪者心理・被害者心理を知る。 ③司法・犯罪分野の関係組織、関係機関、他職種との連携の在り方を知る。
授業の 進め方	本講義では、司法領域で実務経験のある教員が、人間に対する深い理解、深い人間理解に根ざした支援を実践できるようにするため以下の方法をとります。 ア) 知識をパワーポイントによる講義形式で提供します。 イ) 両価的なテーマについてのディスカッションを実施して、知識を確かなものにします。 ウ) 臨床の現場を見学することで、リアルな心理臨床を体感し、職業選択を考える上でも役に立つ知見とします。

アクティブ・ラーニング

フィールドワーク ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回、授業計画にあるテーマに沿って、受講生は事前に課題が与えられ、授業冒頭に提出されたレポートをもとに、課題を解決する形式で講義が進められます
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	①司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開の概要
第2回	《刑事手続き分野》 ②RNR原則とリスクアセスメント
第3回	③各機関における活動（裁判所）
第4回	④各機関における活動（児童相談所，児童養護施設，児童自立支援施設）
第5回	⑤各機関における活動（少年鑑別所，少年院，少年刑務所，刑務所）
第6回	⑥各機関における活動（保護観察所，更生保護施設）
第7回	⑦各機関における活動（医療少年院，病院精神科，保健所）
第8回	⑧犯罪・非行分野への支援（被害者ケア）
第9回	⑨犯罪・非行分野への支援（修復的司法）
第10回	《民事手続き分野》 ⑩家庭紛争（家事）事件の理解
第11回	⑪家庭紛争（家事）事件における家族支援
第12回	⑫親の紛争下における子の意思の把握と考慮
第13回	⑬高齢者への支援（成年後見制度）

事前・事後学修	授業の前後に，裁判所，少年鑑別所，少年院，刑務所，更生保護施設等の関係機関見学の実施を予定しています。 毎回，授業の最後に次回授業内容の予習レポートを出題します。必ず予習をして授業冒頭に提出して授業に参加してください。 【必要な時間】 関係機関見学に要する時間は，各6時間が目安です。詳細は，受講者と相談の上決定します。 予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とします。 常日ごろからニュース，新聞，インターネットなどで，社会的な事件についての情報を入手するように心掛けてください。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	以下の2点で評価します。 毎回提出のレポート評価：60％ 5×12回 事例検討レポート：40％ 20×2回
テキスト	適宜プリントを配布します
参考文献	【参考文献】 「① 司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開の概要」時に「参考文献等リスト」を配布します。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	司法領域で実務経験のある教員が、裁判所、刑務所等の司法現場の心理臨床を、動画等も交えて具体的に解説します。
備考	本科目は，公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。 公認心理師試験を受験するためには，大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。 関係機関見学時の現地までの交通費は各人の負担となります。 なお，新型コロナウイルスの感染拡大等の影響により，関係機関の見学が中止となる場合があります。

年度	2025
講義名称	産業・労働分野に関する理論と支援の展開[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 荒関 守	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	本講義は、産業・組織心理学、臨床心理学、心理学的支援法の基礎的知識を前提として、産業・労働分野における心理支援（「産業心理臨床」と言います）について、その特徴および支援のための理論と実践を学ぶことを目的とします。心理職として、産業心理臨床の現場で主体的に考え、心理支援をするための基礎力の涵養を図ります。
到達目標	①産業心理臨床について、具体的にイメージできる。 ②産業心理臨床に必要な基礎的知識を説明できる。 ③産業・労働分野で生じる具体的な問題について、心理学的知見を用いて主体的に考え、議論することができる。
授業の進め方	講義（動画視聴を含む）、教員と学生の双方向対話（ソクラテス・メソッド）、グループディスカッション、ロールプレイを行います。 毎授業終了後、質問・意見・感想を記載するリアクションペーパーの提出を求めます。 第5回以降の「産業心理臨床の実践」では、各テーマについて担当者を決め、担当者の発表を中心にグループディスカッションを行います。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表には、その場でコメントをします。 授業内やリアクションペーパーでの質問には、原則授業内またはLMSで回答・コメントをします。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	ガイダンス、産業心理臨床の全体像（産業・組織心理学、臨床心理学との関連）	対面
第2回	産業心理臨床を支える理論：キャリア	対面
第3回	産業心理臨床を支える理論：ストレス	対面
第4回	産業・組織心理学の応用／労働関係法規／産業精神保健	対面
第5回	産業心理臨床の実践：産業領域における心理職の役割、倫理	対面
第6回	産業心理臨床の実践：キャリア支援／心理教育／自殺予防	対面
第7回	産業心理臨床の実践：職場復帰支援／危機介入	対面
第8回	産業心理臨床の実践：実践演習 1（第 5 ～ 7 回に関連したロールプレイ中心）	対面
第9回	産業心理臨床の実践：ハラスメント	対面
第10回	産業心理臨床の実践：ストレスチェック／協働的支援	対面
第11回	産業心理臨床の実践：様々な現場	対面
第12回	産業心理臨床の実践：実践演習 2（第 9 ～ 1 1 回に関連したロールプレイ中心）	対面
第13回	まとめ／試験	対面

<事前> 第1～4回：予習シートを読み、指示された予習を実施する。	2025/04/01
--------------------------------------	------------

事前・事後学修	第5～12回：担当者はトピックについて発表準備を行う。担当者以外は、トピックについての予習またはこれまでの授業を振り返ってロールプレイの準備を行う。 <事後> 配布資料、発表資料、ノートなどを用い、講義の復習や体験の記録化を行う。 <時間> 事前・事後とも、概ね2時間半程度。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	毎授業後に提出するリアクションペーパー 30％ 授業内での取り組みの内容・積極性 45％ 試験 25％
テキスト	事前または授業中に配布します。
参考文献	『産業心理臨床実践』（心の専門家養成講座⑧）金井篤子編 ナカニシヤ出版 『新版 キャリアの心理学【第2版】』 渡辺三枝子編著 ナカニシヤ出版 学部における「産業・組織心理学」「臨床心理学概論」「心理学的支援法」等で使用したテキスト・資料 ※そのほかの参考文献は、授業内で適宜紹介します。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、産業心理臨床の実務経験を有する教員が担当します。産業心理臨床に関する重要論点を、実務的な観点からも解説します。
備考	本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。 産業心理臨床は、社会人経験のない学生には想像がつきにくい部分もあるかと思います。「分からない」「リアルなイメージが湧かない」部分については、授業内はもちろん、リアクションペーパー等による積極的な質問を期待します。

年度	2025
講義名称	心理支援に関する理論と実践[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 高野 創子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	本講義の目的は、公認心理師を目指す心理支援の担い手に、精神分析、分析心理学、遊戯療法，ヒューマニスティック心理学，認知行動療法，システミック・アプローチなどの理論と方法の基礎について学んだ上で、事例をもとにそれらの相談、助言、指導等への応用、支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整についての理解を深めることを目的としている。
到達目標	代表的な心理療法の概念、意義及び適応について概説できる。 心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じて適切な支援方法を選択・調整することができる。 心理療法やカウンセリングの適用には限界があることを説明できる。
授業の進め方	本講義は医療保健、教育に関わる臨床現場で実務経験のある教員が担当する。なお、講義の多くは講義もしくは演習形式で行う。受講者には適宜資料を配布する。必要に応じてグループワークやディスカッションを取り入れるなど、能動的な学修を目指す。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回の課題、グループディスカッションでまとめた内容を紙面にて提出したものについて、講義内で内容の確認と添削指導を行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション：心理支援とは何か（心理支援の共通性と多様性）
第2回	精神分析的アプローチ：理論と事例
第3回	分析心理学的アプローチ①理論
第4回	分析心理学的アプローチ②事例
第5回	遊戯療法①理論
第6回	遊戯療法②事例
第7回	ヒューマニスティック心理学①理論
第8回	ヒューマニスティック心理学②事例
第9回	認知行動療法①理論
第10回	認知行動療法②事例
第11回	システミック・アプローチ①理論
第12回	システミック・アプローチ②事例
第13回	まとめ

事前・事後 学修	心理的支援が必要な人の特性や、適切な支援を行うために、心理的な問題を含む社会問題（不登校・自殺対策・高齢者対策・就労支援など）について普段から情報収集をすること。本演習は、自身の発表回の事前準備はもちろんのこと、講義時間外にも課題の実施などが必要となる。これらを予習・復習の時間の活動内容とし、併せて5時間を目安とする。
-------------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	A) 担当章の発表：40% B) ディスカッションレポート：30% C) 定期課題レポート：30%
テキスト	講義時に紹介する。
参考文献	狐塚 貴博 ・ 田附 紘平 編 （2022）.心理支援の理論と方法 心の専門家養成講座④.ナカニシヤ出版

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラー、地域支援の経験のある教員が心理支援の基本的理論と姿勢をケースに生かす視点を養う演習を実施する。
備考	※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。

年度	2025
講義名称	[夏集]心理的アセスメントに関する理論と実践[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 渡邊 紀子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	昨今、神経発達症（発達障害）の過剰診断と過少診断が問題となっています。この問題の解消のためには、適切な心理アセスメントが求められます。心理アセスメントはセラピストがクライアントを知る手掛かりであり、同時に、クライアント自身が自分を知る手立てとなります。本講義では、日々の臨床実践に結び付けられるよう、「クラインとの役に立つアセスメント」という視点を拠り所としてアセスメントの技術と解釈を学びます。
到達目標	各心理検査の正しい実施、データ解析、臨床的解釈ができる。それをもとに適切な心理アセスメントを行うことができる。
授業の進め方	本講義は、医療機関および教育機関にて心理検査を用いたアセスメント実務経験のある教員が、心理検査の理論と技術を修得できるよう、講義と実習を実施します。具体的には、神経発達症の基本的知識を解説した後、アセスメントツールとして臨床的に使用頻度の高い心理検査をいくつか取り上げ、その技術修得のための検査実習を行います。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内で適宜、解説およびフィードバックを行います。
----------------------------	---------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	I. 公認心理師の実践における心理的アセスメントの意義
第2回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 児童・成人それぞれの神経発達症の臨床的特徴 障害の医学モデルと社会モデル
第3回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 ASDのスクリーニング検査（M-CHAT）
第4回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 PARS-TR
第5回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 AQ-J
第6回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 ADHDのアセスメント（ADHD-RS、CAARS）
第7回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 ADHDのアセスメント（MSPA）
第8回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 青年・成人感覚プロファイル、LDI-R
第9回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 読み書きアセスメント（URAWSS II）
第10回	II. 心理的アセスメントに関する理論と実践 適応行動のアセスメント（Vineland- II 適応行動尺度）

第11回	Ⅱ. 心理的アセスメントに関する理論と実践 「子どもの学業不振」ははじめや不登校、ときには希死念慮や自殺まで繋がるので決して見逃してはならない。 子どもの命を守るために必要な学校教育現場でのアセスメント実践の具体例を学ぶ。
第12回	Ⅲ. 心理に関する相談、助言、指導等への上記ⅠおよびⅡの応用 データに基づいた支援計画に関する概説
第13回	Ⅲ. 心理に関する相談、助言、指導等への上記ⅠおよびⅡの応用 アセスメントからトリートメントへの繋げ方
第14回	Ⅲ. 心理に関する相談、助言、指導等への上記ⅠおよびⅡの応用 AFS（アセスメント・フィードバック・セッション）の意義と基本原則
第15回	Ⅲ. 心理に関する相談、助言、指導等への上記ⅠおよびⅡの応用 AFS（アセスメント・フィードバック・セッション）の実施方法

事前・事後学修	必ず前回の授業内容を復習してから出席してください。予習・復習の時間はそれぞれ2時間を目安とします。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	単位認定レポート提出：40% 小課題提出：30% 検査実技：30%
テキスト	適宜レジュメを配布
参考文献	適宜紹介

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	実務経験あり。公認心理師および臨床心理士資格をもち、これまで主に医療・教育・産業領域にて30年間臨床実践に携わっています。臨床現場で培った知見を活かした授業展開を行います。
備考	本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。

年度	2025
講義名称	心の健康教育に関する理論と実践[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 橋本 久美	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	本講義は、臨床心理に関する高度な知識と技能の修得及び現代社会の臨床心理学的課題の理解を目的とする。将来の公認心理師としてクライアントに関わっていく上で不可欠な「心の健康教育に関する理論と実践」について学び、具体的に実践する力を身につける。
到達目標	心の健康教育に関わる基本的理論を理解し、その応用的実践事例での学びを、自らのクライアント理解・実践に活かすこと。
授業の進め方	本講義では、公認心理師・臨床心理士資格を持ち、医療・教育領域におけるスクールカウンセラーや産業領域でのカウンセリングなど実務経験のある教員が、「心の健康教育に関する理論とその実践」について知識の習得を目的とした講義を行う。基本的に講義形式ではあるが、担当の文献を調べてレジュメを作成した上での発表や、テーマを設けての討議を交えて進行する。

アクティブ・ラーニング

PBL 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表におけるディスカッション内容の記録にコメントをする。適宜、資料を配布する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	心の健康とは何か WHOの定義を通じて	対面
第2回	感情と健康のメカニズムについて	対面
第3回	認知と行動のメカニズム	対面
第4回	心理的ストレスについて	対面
第5回	社会的感情と健康行動	対面
第6回	生活習慣と社会的行動：睡眠・喫煙・飲酒・食行動など	対面
第7回	健康の維持・予防としての医療サポート	対面
第8回	心の健康を維持・向上するための心理療法：自律訓練法・筋弛緩法	対面
第9回	心理療法と生物学的エビデンス	対面
第10回	心の健康教育に関する文献要約発表	対面
第11回	心の健康教育に関する文献要約発表	対面
第12回	心の健康教育に関する文献要約発表	対面
第13回	心の健康教育に関するプログラムについて レポート課題の提示	対面

事前・事後学習	予習として心の健康教育に関する論文や技法を個々人で調べ、発表レジュメを作成する。また、授業で個々人が選んだ心理的技法を模擬実践する。毎回の授業内ディスカッションで得られた知見を広げ深化させるために文献を探し、プリントとしてまとめる。
---------	--

2025/04/01

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	担当文献レジュメ及び発表の評価 30％ 理論と技法の理解度（課題の到達による） 30％ 最終レポート 40％
参考文献	保健と健康の心理学 ポジティブヘルスの実現 大竹恵子 編著 ナカニシヤ出版

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の 経歴と授業内容	公認心理師・臨床心理士資格を持ち、医療・教育領域におけるスクールカウンセラーや産業領域でのカウンセリングなど実務経験のある教員が、「心の健康教育に関する理論とその実践」について知識の習得を目的とした講義を行う。
-----------------------	---

年度	2025
講義名称	臨床心理実習Ⅰ(心理実践実習Ⅳ)[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科
佐々木 淑子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	学外施設（主に医療機関）での実習体験を通じ、臨床心理士／公認心理師の職責や役割を実践的に把握する。また、実際のケースに触れると同時に、施設の機能や社会的役割を知り、さまざまな職種との連携を通して、人間性や社会性豊かな専門家を目指す上での下地を身につける。
到達目標	① 心理臨床の現場に触れ、理論と実践を統合していくことの重要性を知る。 ② 心理臨床家として必要な態度や技術および社会性の基本を身につけ、進むべき自らのフィールドを焦点化する。
授業の進め方	本科目は実習である。 実習施設での実習活動（外部実習、90時間以上）と学内講義・指導の二つで構成されている。受講生はこの二つの指導を受けることとなる。外部実習では、学外実習施設へ赴き、施設実習担当者の指導の下、心理臨床活動（ケース担当）を実践する。学内講義では各々の実習報告をもとに受講生全員で実習内容についてディスカッションを行う。心理に関する支援を要する者に関する技能や理解、チームアプローチの実際、職種間の連携や臨床心理士／公認心理師の倫理などについて幅広く学ぶ。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題および実習先からの評価については、講義内でフィードバックを行う。
----------------------------	------------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション・事前指導 ※概ね以下の予定に沿って講義を展開する。施設の受け入れ状況などにより、順序や内容は変更が生じる可能性がある。実習のフィードバック（学内授業）は実習状況を見ながら適宜行う。
第2回	事前学習，実習施設事前訪問
第3回	施設実習（ケース担当実習）（１）
第4回	施設実習（ケース担当実習）（２）
第5回	施設実習（ケース担当実習）（３）
第6回	施設実習（ケース担当実習）（４）
第7回	施設実習（ケース担当実習）（５）
第8回	施設実習（ケース担当実習）（６）
第9回	施設実習（ケース担当実習）（７）
第10回	施設実習（ケース担当実習）（８）
第11回	施設実習（ケース担当実習）（９）

第12回	施設実習（ケース担当実習）（１０）
第13回	フィードバック

事前・事後学修	<事前学修> 実習開始前に実習に関するオリエンテーションを行う場合がある。受講を希望する学生はこれに必ず参加し，学外実習に臨む必要な態度を自覚する。実習先配属決定後は，施設の理念，概要など下調べをしておくことが必要である。 <事後学修> 事後には講義時に指摘された点について振り返り，実習活動に活かせるよう関連図書などを読むこと。また，便覧に掲載されている「実習の手引き」を熟読しておくこと。 本講義を履修する者は1年次の必修科目全てと「精神医学特論」，「保健医療分野に関する理論と支援の展開」の単位を修得していなければならない。 <必要な時間> 上述のような事前及び事後学習はそれぞれ2時間を目安とする。
-----------------------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	評価は、以下の3点で行う。 A) 実習先の実習担当者の評価：40% B) 学内講義時の発表レポート，ディスカッション：30% C) 学期末レポート：30% ※ A)～C)全てに点数がついていることを単位取得最低条件とする。 ※ 所定の実習時間（90時間）が期日内に満たせない場合，評価は不可となる。
テキスト	日本デイケア学会 編 (2016). 新・精神科デイケアQ&A. 中央法規出版. 津川律子・橘玲子 編 (2022). 心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド. 誠信書房.
参考文献	適宜紹介します。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	精神科や児童精神科など医療機関での実務経験を有する教員が担当する。
備考	本実習を履修するにあたり、以下の注意事項をよく読み、理解しておくことが必要となる。 【注意事項】 ○ 公欠・病欠以外の欠席は認められない。病欠の場合は必ず医療機関へ行き，欠席した回から1週間以内に必要な書類を提出すること。 ○ やむを得ない理由で欠席もしくは遅刻しなくてはならない場合，担当教員（榎本，佐々木）に事前に連絡をすること（事前連絡が難しい場合は，事後直ちに連絡すること）。欠席した回から2日以内に連絡がない場合，実習活動は中止される。 ○ 課題などの提出物が期限内に提出されなかった場合，評価は「不可」となる。 ○ 初回講義時に「心理学研究科便覧」を持参すること。 ○ 外部実習に赴くには，マナーや協調性などの社会性が必要となる。そのような自覚を持ち臨むことが必要である。 ○ 実習参加費として実習費を徴収する（1万円）。 ○ 「臨床心理実習Ⅰ(心理実践実習Ⅳ)」の単位を修得していない者は，「心理実践実習Ⅴ」は履修できない。 ※ 本科目は，公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには，大学においてこの科目を修得しておく必要があります。 【実習時間】 90時間以上 【実習分野】 学外実習，医療機関

年度	2025
講義名称	心理実践実習Ⅰ[心研]
講義開講時期	通年
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科
佐々木 淑子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	公認心理師に必要な基本的心構えや態度を確実に身に着けるため、大学付属機関での実習活動を行う。具体的には、心理相談研究所をベースとして行われる種々の活動に、指導教員の指導を受けながら参加する。その活動を通して、公認心理師を目指す上で大事な学問的知識，倫理，社会性，コミュニケーション能力などを理論と実践のフィールド両面から学ぶ。
到達目標	実習活動を通して、公認心理師として必要な実践的な基礎知識，コミュニケーション・スキル等の社会性を身につけ，心理学的支援についての理解を深める。
授業の進め方	心理相談研究所が行う種々の活動に、指導教員の事前指導・フィールドでの指導および事後指導など、その段階ごとに受講学生と協議を重ね，振り返りを行いながら進めていく。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	多様な活動が行われるのだが、それぞれに対して、事前指導・実践の場、さらに事後指導等で、直接的なフィードバックと実習報告書へのコメントという形でフィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーションおよび実習計画作成・各実習への事前指導
第2回	子育て支援活動1
第3回	子育て支援活動2
第4回	子育て支援活動3
第5回	野外で遊ぶうでの活動1
第6回	野外で遊ぶうでの活動2
第7回	心理相談研究所電話受付・事務受付実習1
第8回	心理相談研究所電話受付・事務受付実習2
第9回	心理相談研究所電話受付・事務受付実習3
第10回	心理相談研究所陪席実習1
第11回	心理相談研究所陪席実習2
第12回	事例検討会1
第13回	事例検討会2

事前・事後学修	「実習の手引き」を読んでおく。次回の実習前に、必要な資料や用具をそろえ、資料や文献を読み実習内容を把握する。 <事後学修> フィールドでの実習後、速やかに実習記録をまとめ、学内での振り返りに備える。教員からのコメントを読み、次回の実習に活かせるように努める。 <必要な時間> 事前・事後学修の時間はそれぞれ2時間を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	① 心理相談研究所における実習評価：50％ ② 実習記録および報告書評価：50％
テキスト	使用しない。
参考文献	適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	医療・福祉・教育等の現場での臨床経験を有し、さらに、本授業のフィールドとなる心理相談研究所でカウンセリング業務や子育て支援・地域支援等の実務経験のある教員が、心理臨床の実務および多職種連携や地域支援等の要点を伝えていく。
備考	・現場に赴いての実践活動になるため、迅速かつ柔軟な判断力，活動性，マナーや協調性等の社会性が求められる。事前連絡のない遅刻や欠席は認められない。 ・以下で述べるように，社会状況や心理相談研究所の開閉状況を見ながら柔軟に実習活動を組み立て調整していく。よって，担当教員との相互連絡をしっかりとっていくことが求められる。 ・各実習は総計して90時間行う。以下の実習が含まれる。 【子育て支援活動】定期的に開催される子育て支援活動である 「安心子育て応援倶楽部」への参加および夏冬開催予定の「野外で遊ぼう」への参加。これらの活動は，対面を基本として実施予定であるが，状況を見ながら，オンラインによる方式，子育て通信の発行など多様な形を取りながら運営される可能性がある。 【心理相談研究電話受付・事務受付実習】 【陪席実習】 【事例検討会】 【心理相談研究所保管のフィールド活動資料閲覧】 それぞれの実習に，教員は関わる。また，実践した実習の報告・実習記録への振り返り，教員からのコメントなども含まれる。 ・本科目は，公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められている。公認心理師試験を受験するためには，大学においてこの科目を修得しておく必要がある。

年度	2025
講義名称	心理実践実習Ⅱ[心研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 青木 美和子	大学・人文学部・心理学科
本間 芳文	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	「教育分野」、「福祉分野」、「産業・労働分野」、「司法・犯罪分野」から2，3分野を取り出し、支援を必要とする人の①「心理状態の観察と分析」、②「心理相談に応じ、助言、指導をする」、③その関係者に対する相談に応じ、助言、指導を行う」、④「心の健康に関する教育や情報の提供」について実習を通して、公認心理師の役割について学ぶ。
到達目標	主に「教育分野」、「福祉分野」、「産業・労働分野」、「司法分野」から2，3分野を取り出し、支援を必要とする人の「①心理状態の観察と分析」、②「心理相談に応じ、助言、指導をする」、③その関係者に対する相談に応じ、助言、指導を行う」、④「心の健康に関する教育や情報の提供」について実習を通して、公認心理師の役割について具体的に説明できる。
授業の進め方	授業のねらいと実習の進め方の講義を行う。その指示に従って、上記の2，3の分野に出向き合わせて実習時間90時間を満たす実習を展開する。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内、あるいは実習先で出された課題は、それぞれの実習先の指導者や講義担当者の指導の中で指導を行うこととする。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	①オリエンテーション・学外実習Ⅰ①
第2回	学外実習Ⅰ②
第3回	学外実習Ⅰ③
第4回	学外実習Ⅰ④
第5回	学外実習Ⅰ⑤
第6回	学外実習Ⅰ⑥ ふりかえり
第7回	学外実習Ⅱ①
第8回	学外実習Ⅱ②
第9回	学外実習Ⅱ③
第10回	学外実習Ⅱ④
第11回	学外実習Ⅱ⑤・ふりかえり
第12回	学外実習Ⅲ
第13回	実習Ⅲ振り返り 実習報告・まとめ

	【具体的な内容】 実習先が決まったら、事前に実習先の業務概要や特色などを調べること。
--	---

事前・事後学修	実習後は、その日のうちに実習日誌を書き、翌日実習先指導者に提出し、指導を受けること。 実習終了後は、実習報告書、ふりかえり、お礼状を作成すること。 【必要な時間】 予習・復習の時間は、それぞれ2時間半を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	①実習先の実習評価：50％ ②実習先の理解、必要とされる支援、支援方法の理解と実習報告や提出物の内容：50％
テキスト	特に指定しない
参考文献	「公認心理師現任者講習会テキスト」 一般財団法人日本心理研修センター監修 金剛出版

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、公認心理師の資格を持ち、「教育分野」、「福祉分野」において相談業務、コンサルティング業務の実務経験のある教員が、障害の特性や心理社会的課題、施設の役割、必要とされる支援について解説し、学生の理解を深められるよう講義を実施します。
備考	①自分の体調管理に努めること。②実習先はすべて対人支援の場なので、実習指導者の指示を必ず守って実習すること。③困った事や迷うことは、実習指導者や教員に速やかに申し出て、指示に従うこと。※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目である。また実習費は2施設分で20,000円事前に証紙で納付すること。

年度	2025
講義名称	心理実践実習Ⅲ[心研]
講義開講時期	通年
必選区分	0:選択
学年	2年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科
佐々木 淑子	大学・人文学部・心理学科

授業の 目的と 概要	学内施設である心理相談研究所において、ケース担当実習を行う。インテーク面接や心理検査業務、心理面接業務等を教員の指導を受けながら経験することで、公認心理師として必要な援助の実際を理解し、スキルを身に付けていく。
到達目 標	実際にケースを担当し、理論と実践の照合、多面的で流動的な見立て等を心理面接や心理検査実施に活用することで、公認心理師としての実践的援助のありかたを自覚し、専門家としてスタートに立つ。 臨床実践を積み重ねる体験により、臨床心理学の知見の実際の運用の効用を実感することで、専門家としてスタートをきれるようにする。
授業の 進め方	心理相談研究所に来談し、受講生が担当するケースの心理面接および心理検査に対して準備段階から実際の臨床業務、さらに結果のまとめ方・報告・保管等の事後指導まで含めた過程について指導を受ける。授業時の事例報告の場では、受講生および担当教員間でグループ・ディスカッションを重ね理解を深めていく。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	心理相談研究所における心理面接及び心理検査の一連の流れを逐次指導する。および授業時の事例報告時には、様々な課題を解説し、フィードバックする。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション
第2回	ケース担当実習（１）
第3回	ケース担当実習（２）
第4回	ケース担当実習（３）
第5回	ケース担当実習（４）
第6回	ケース担当実習（５）
第7回	ケース担当実習（６）
第8回	ケース担当実習（７）
第9回	ケース担当実習（８）
第10回	ケース担当実習（９）
第11回	ケース担当実習（１０）
第12回	ケース担当実習（１１）
第13回	ケース担当実習（１２）

	< 事前・事後学修> 理論および知識を，出会った事例に活かせるように常に新しく吸収するように努めることが重要である。	2025/04/01
--	---	------------

事前・事後学修	便覧に掲載されている「実習の手引き」を熟読しておく。 <必要な時間> 事前・事後学修の時間は、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	① 心理相談研究所における実習評価：50％ ② 実習記録・報告書・発表等の評価：50％
テキスト	使用しない。
参考文献	適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	精神科臨床心理査定および心理面接，多職種連携等の臨床の実務経験のある教員が，心理臨床の実際的な業務内容を指導する。
備考	社会状況および心理相談研究所の開閉状況を見ながら，実習計画や授業計画を柔軟に組み立て調整していく。 本科目は，公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められている。公認心理師試験を受験するためには，大学においてこの科目を修得しておく必要がある。

年度	2025
講義名称	心理実践実習Ⅴ[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	2年
授業方法	実習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 榎本 光邦	大学・人文学部・心理学科
品田 一郎	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	学外の精神科医療機関で実習し、公認心理師としてのモデルを実践的に把握する。心理実践実習Ⅳでの実習を踏まえ、実際のケースに触れること、施設の機能や社会的役割を知り、様々な職員との連携を通して、人間性や社会性豊かな専門家を目指す上での下地とする。
到達目標	①心理臨床の現場に触れ、理論と実践を統合することの重要性を理解できる。 ②心理臨床家として必要な態度や技術、および社会性の基礎を身につけ、進むべき自らのフィールドを焦点化できる。
授業の進め方	本科目は実習である。実習施設での実習活動（外部実習90時間以上）と学内講義・指導の二つで構成されている。受講生はこの二つの指導を受けなければならない。外部実習では学外実習施設へ赴き、施設実習担当者の指導のもと、心理臨床活動を実践する。並行して行われる学内講義では各々の実習報告をもとに受講生全員で実習内容についてディスカッションを行う。多様な臨床現場があること、および職種間の連携などについて幅広く学ぶ。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題及び実習先からの評価については、講義内でフィードバックを行う。
----------------------------	-----------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション・事前指導：実習にあたって講義内容の説明と実習の留意点について
第2回	事前学習・事前訪問：実習施設の理念，社会的役割，スタッフおよび利用者の概要について臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅳ）での実習を整理してまとめて報告を行う。また担当教員と実習予定学生が実習施設へ事前打ち合わせに出向く。
第3回	学外実習（１）：個々の実習施設・機関において週一回程度の現場実習を行う。施設内実習担当者の指導のもとインテーク面接，心理査定，デイケアなどの臨床心理学的援助活動を行い，ケースと関わる。毎回実習日誌と面接記録の記載を義務付け，施設内実習担当者と担当教員へ報告し，指導を受ける。
第4回	学外実習（２）
第5回	学外実習（３）
第6回	学外実習（４）
第7回	学外実習（５）
第8回	学外実習（６）
第9回	学外実習（７）
第10回	学外実習（８）
第11回	学外実習（９）
第12回	実習の振り返り・実習報告書の作成（１）：実習先からの評価をもとに実習の振り返りと受講生同士でのグループディスカッションを通して，実習報告書を作成する。

第13回	実習の振り返り・実習報告書の作成（2）
------	---------------------

事前・事後学修	<事前学修> 講義開始前に行う事前指導・事前相談を行う。受講を希望する学生はこれに必ず参加し、学外実習に臨む必要な態度を自覚する。便覧に掲載されている「実習の手引き」を熟読しておくこと。 実習先配属決定後は、施設の理念、概要などについて調べ、文章にまとめておく必要がある。 <事後学修> 実習期間中は講義時に指摘された点について振り返り、実習活動に活かせるよう関連図書などを読み研鑽すること。 <必要な時間> 事前・事後学修の時間は、それぞれ2時間を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	●

成績評価基準と方法	①外部実習施設の実習指導担当者の評価：40％ ②学内講義時の発表レポート、およびディスカッション：30％ ③学期末レポート：30％
テキスト	津川律子・橘玲子 編 （2009）. 臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド.精神科書房.
参考文献	金子和夫（監修）（2016）. 心の専門家が会える法律［新版］. 誠信書房. 下山晴彦（2003）. 臨床心理学全集4 臨床心理実習論. 誠信書房. その他、実習の進捗状況によって必要なテーマの文献を適宜、紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	精神科臨床，司法臨床，教育臨床等の実務経験のある教員がその臨床経験を活かした指導を行う。
備考	・本実習を履修する者は臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅳ）の単位を修得していない者は本実習科目を履修することができない。 ・実習においては、マナーや協調性などの社会性が必要となるため、その自覚をもって臨むこと。 ・学外実習および学内講義において、事前（または事後すぐに）連絡のない欠席や遅刻は認められない。 ・実習参加費として実習費を徴収する（1万円） *本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められている。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要がある。 【実習時間】90時間以上 【実習分野】学外実習，医療機関

年度	2025
講義名称	臨床事例指導Ⅰ[心研]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 高野 創子	大学・人文学部・心理学科
佐々木 淑子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	「臨床事例指導」は心理相談研究所で担当した事例について個人指導を受ける。その中で担当事例に対する理解を深め、最終的には事例論文（心理相談研究所所報の事例論文）としてまとめることが本演習の目的である。
	「臨床事例指導Ⅰ」では、事例論文作成のための個人指導を受けながら、事例記録の取り方の基礎を学ぶ。また、担当事例の中間報告書を完成させることを目指す。
	概ね、授業計画の通り展開するが、事例の進行具合などにより変更する可能性がある。
到達目標	① 心理臨床家として必要な態度や技術を身につける。 ② 担当した事例について理解を深める。 ③ 担当した事例について文章化できる。
授業の進め方	臨床心理士の資格を有し、医療保健分野など臨床現場での実務経験のある教員が担当する。学内施設で行った実習の記録をもとに指導を受けて担当事例への理解を深める。それらの過程と並行しながら、事例論文として文章化する作業も進める。

アクティブ・ラーニング

体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	受講生は毎回の講義に面接記録を持参し、報告する。それに対し、教員がその場で指導を行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション、事例指導 (1)、プロセスノート (1)
第2回	事例指導 (2)、プロセスノート (2)
第3回	事例指導 (3)、プロセスノート (3)
第4回	事例指導 (4)、プロセスノート (4)
第5回	事例指導 (5)、プロセスノート (5)
第6回	事例指導 (6)、論文執筆指導 (1)
第7回	事例指導 (7)、論文執筆指導 (2)
第8回	事例指導 (8)、論文執筆指導 (3)
第9回	事例指導 (9)、論文執筆指導 (4)
第10回	事例指導 (10)、論文執筆指導 (5)
第11回	事例指導 (11)、論文執筆指導 (6)
第12回	事例指導 (12)、論文執筆指導 (7)
第13回	事例指導 (13)、論文執筆指導 (8)

事前・事後学修	心理相談研究所での担当事例について理解を深めるため、事例論文は当然のこと、カウンセリングや心理療法に関する論文や書籍を熟読することが求められる。 毎回の事例担当前に前回の記録を読んでおくこと、さらに面接終了後速やかに記録化すること、指導を振り返り、次回に活かすよう努める。 予習・復習の時間はそれぞれ2.5時間が目安となる。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	① 事例記録：40% ② 事例中間報告書：60%
テキスト	なし
参考文献	特にテキストは定めていないが、授業内で重要と思われる著書や論文を適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラーとして実務経験のある教員が心理支援の発想と技術、各種心理療法の理論をもとにした人間理解の視点をクライアントに活かす視点を養う指導を展開する。
備考	「臨床心理実習Ⅱ」を並行して履修する。

年度	2025
講義名称	臨床事例指導Ⅱ〔心研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	心理学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 高野 創子	大学・人文学部・心理学科
佐々木 淑子	大学・人文学部・心理学科

授業の目的と概要	「臨床事例指導」は心理相談研究所で担当した事例について個人指導を受ける。その中で担当事例に対する理解を深め、事例論文を完成させることを目的としている。「臨床事例指導Ⅱ」では、個人指導を受けながら、事例理解を更に深め、担当事例を文章化することを目指す。 概ね、授業計画の通り展開するが、事例の進行具合などにより変更する可能性がある。
到達目標	① 心理臨床家として必要な態度や技術を身につける。 ② 担当した事例について理解を深める。 ② 担当した事例について論文にできる。
授業の進め方	臨床心理士の資格を有し、精神科臨床現場での実務経験のある教員が担当する。学内施設で行った実習の記録をもとに指導を受ける。その上で担当事例への理解を深め、文章化の作業を進める。

アクティブ・ラーニング

体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	受講生は毎回の講義に面接記録を持参し、報告する。それに対し、教員がその場で指導を行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション、事例指導 (1)、論文執筆指導 (1)
第2回	事例指導 (2)、論文執筆指導 (2)
第3回	事例指導 (3)、論文執筆指導 (3)
第4回	事例指導 (4)、論文執筆指導 (4)
第5回	事例指導 (5)、論文執筆指導 (5)
第6回	事例指導 (6)、論文執筆指導 (6)
第7回	事例指導 (7)、論文執筆指導 (7)
第8回	事例指導 (8)、論文執筆指導 (8)
第9回	事例指導 (9)、論文執筆指導 (9)
第10回	事例指導 (10)、論文執筆指導 (10)
第11回	事例指導 (11)、論文執筆指導 (11)
第12回	事例指導 (12)、論文執筆指導 (12)
第13回	事例指導 (13)、論文執筆指導 (13)

--

事前・事後学修	心理相談研究所での担当事例について理解を深めるため、事例論文は当然のこと、カウンセリングや心理療法に関する論文や書籍を熟読することが求められる。 毎回の事例担当前に前回の記録を読んでおくこと、さらに面接終了後速やかに記録化すること、指導を振り返り、次回に活かすよう努める。 予習・復習の時間はそれぞれ2.5時間が目安となる。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（心理学研究科）

臨床心理に関する高度な知識と技能	●
臨床心理学的研究法と観察事実の分析法	●
自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能	●
現代社会の臨床心理的課題の理解	

成績評価基準と方法	① 事例記録：40% ② 事例論文：60%
テキスト	なし
参考文献	特にテキストを定めないが、重要と思われる著書や論文を授業内で適宜紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラーとして実務経験のある教員が心理支援の発想と技術、各種心理療法の理論をもとにした人間理解の視点をクライアントに活かす視点を養う指導を展開する。
備考	「臨床心理実習Ⅱ」を並行して履修する。

年度	2025
講義名称	観光研究テーマ演習〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 斉藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	本演習では、修士二年次の「修士論文指導演習Ⅰ・Ⅱ」の準備として、①アカデミックライティングの学習、②研究計画の作成（研究テーマ、研究の問いやアーギュメント、先行研究の検討、調査法の検討など）に取り組む。
到達目標	本授業を修了することによって、受講生は； ①論文執筆と研究計画作成の基礎を理解できるようになり、 ②論文を批判的に検討できるようになり、 ③論文に特有の形式に関心を持つことができるようになり、 ④高度に学術的な論文を執筆できるようになる。
授業の進め方	教員による講義と、学生によるグループワーク、個人ワーク、発表を組み合わせる。受講者は事前に示されたリーディングの課題を予習として精読しなければならない。また受講者はディスカッションへの参加や他の学生の発表や研究計画について積極的に質問などすることが求められる。アカデミックライティングの回では、リーディング課題をもとにして教員による講義をおこない、そのうち受講生はタスクを実施する。研究計画の発表の回では、各受講生は自身の研究計画について発表をし、授業全体で計画内容について検討・フィードバックをする。先行研究調査の回では、発表担当を決め、担当学生は自身で選択した論文について内容をまとめ発表する。論文の内容や形式の観点から論文を評価・検討し、全体でディスカッションをする。最終課題として、5,000字程度の研究計画書を提出する。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内でのタスクに対しては、その都度口頭でコメントや評価をする。
----------------------------	----------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス 授業の概要（授業スケジュールや成績評価など）について説明をする。論文とは何か、学術論文の役割、論文に特有の文章形態や構成、そもそも研究とは何かなど、論文の基礎について学習する。また観光の論文の特徴についてもディスカッションを通して考える。
第2回	アカデミックライティング：アーギュメントを鍛える 論文において必要不可欠なアーギュメント、あるいは問いとは何かを理解し、自身の研究テーマに関連したアーギュメントの作成についての訓練をおこなう。実際の論文も用いながら、アーギュメントを見つけ出す演習もおこなう。
第3回	アカデミックライティング：パラグラフの構成 文章の単位の一つであるパラグラフの構成について学習する。パラグラフは内容の抽象度において異なる文章によって構成され、純粋な事実から理論的な考察までが含まれる。実際の論文も用いながらパラグラフを読み解き、かつ自身でも学術的なパラグラフを描くための練習をおこなう。
第4回	アカデミックライティング：先行研究の使い方 すべての学術論文は先行研究を必要とする。先行研究の役割やその種類、その読み解き方、論文内での引用の仕方などをタスクを通して学ぶ。
第5回	研究計画の発表1（発表・ディスカッション） 受講生はここまでの授業で学んできたことを参考に、自身の研究計画について発表する。発表内容については受講生間でディスカッションをし、課題などを検討する。

第6回	研究計画の発表2 (発表・ディスカッション) 受講生はここまでの授業で学んできたことを参考に、自身の研究計画について発表する。発表内容については受講生間でディスカッションをし、課題などを検討する。
第7回	先行研究・関連文献調査1 (発表・ディスカッション) 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第8回	先行研究・関連文献調査2 (発表・ディスカッション) 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第9回	先行研究・関連文献調査3 (発表・ディスカッション) 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第10回	先行研究・関連文献調査4 (発表・ディスカッション) 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第11回	先行研究・関連文献調査5 (発表・ディスカッション) 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第12回	研究計画の再構築1 (発表・ディスカッション) 検討した先行研究の内容を踏まえ研究計画を修正し、発表をする。
第13回	研究計画の再構築2 (発表・ディスカッション) 検討した先行研究の内容を踏まえ研究計画を修正し、発表をする。

事前・事後学修	受講者は課題として課されるリーディングを精読したうえで授業に参加しなければならない。リーディングの内容を事前に理解することなく授業に臨むことは期待されない。事前学習とし2.5時間、復習として2.5時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	●

成績評価基準と方法	プレゼンテーション：40% 授業内課題：20% 質疑応答、ディスカッション：20% 研究計画書の提出：20%
テキスト	適宜必要な資料を配布する。
参考文献	『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』（阿部幸大, 2024年, 光文社）

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本授業は、社会科学分野において論文を執筆する実務経験を持ち、博士号をもつ教員によって実施される。
-------------------	--

年度	2025
講義名称	観光研究テーマ演習[観研](秋入生)
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 斉藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	本演習では、修士二年次の「修士論文指導演習Ⅰ・Ⅱ」の準備として、①アカデミックライティングの学習、②研究計画の作成（研究テーマ、研究の問いやアーギュメント、先行研究の検討、調査法の検討など）に取り組む。
到達目標	本授業を修了することによって、受講生は； ①論文執筆と研究計画作成の基礎を理解できるようになり、 ②論文を批判的に検討できるようになり、 ③論文に特有の形式に関心を持つことができるようになり、 ④高度に学術的な論文を執筆できるようになる。
授業の進め方	教員による講義と、学生によるグループワーク、個人ワーク、発表を組み合わせる。受講者は事前に示されたリーディングの課題を予習として精読しなければならない。また受講者はディスカッションへの参加や他の学生の発表や研究計画について積極的に質問などすることが求められる。アカデミックライティングの回では、リーディング課題をもとにして教員による講義をおこない、そののち受講生はタスクを実施する。研究計画の発表の回では、各受講生は自身の研究計画について発表をし、授業全体で計画内容について検討・フィードバックをする。先行研究調査の回では、発表担当を決め、担当学生は自身で選択した論文について内容をまとめ発表する。論文の内容や形式の観点から論文を評価・検討し、全体でディスカッションをする。最終課題として、5,000字程度の研究計画書を提出する。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内でのタスクに対しては、その都度口頭でコメントや評価をする。
----------------------------	----------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 授業の概要（授業スケジュールや成績評価など）について説明をする。論文とは何か、学術論文の役割、論文に特有の文章形態や構成、そもそも研究とは何かなど、論文の基礎について学習する。また観光の論文の特徴についてもディスカッションを通して考える。
第2回	アカデミックライティング：アーギュメントを鍛える： 論文において必要不可欠なアーギュメント、あるいは問いとは何かを理解し、自身の研究テーマに関連したアーギュメントの作成についての訓練をおこなう。実際の論文も用いながら、アーギュメントを見つけ出す演習もおこなう。
第3回	アカデミックライティング：パラグラフの構成： 文章の単位の一つであるパラグラフの構成について学習する。パラグラフは内容の抽象度において異なる文章によって構成され、純粋な事実から理論的な考察までが含まれる。実際の論文も用いながらパラグラフを読み解き、かつ自身でも学術的なパラグラフを描くための練習をおこなう。
第4回	アカデミックライティング：先行研究の使い方： すべての学術論文は先行研究を必要とする。先行研究の役割やその種類、その読み解き方、論文内での引用の仕方などをタスクを通して学ぶ。
第5回	研究計画の発表 1： 受講生はここまでの授業で学んできたことを参考に、自身の研究計画について発表する。発表内容については受講生間でディスカッションをし、課題などを検討する。

第6回	研究計画の発表 2： 受講生はここまでの授業で学んできたことを参考に、自身の研究計画について発表する。発表内容については受講生間でディスカッションをし、課題などを検討する。
第7回	先行研究・関連文献調査 1： 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第8回	先行研究・関連文献調査 2： 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第9回	先行研究・関連文献調査 3： 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第10回	先行研究・関連文献調査 4： 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第11回	先行研究・関連文献調査 5： 自分の研究テーマに関する先行研究を自身で選択し、その内容をまとめ発表する。またこれまで授業で学んできた点からその論文について評価をし、クラスでディスカッションを実施する。
第12回	研究計画の再構築 1： 検討した先行研究の内容を踏まえ研究計画を修正し、発表をする。
第13回	研究計画の再構築 2： 検討した先行研究の内容を踏まえ研究計画を修正し、発表をする。

事前・事後学修	受講者は課題として課されるリーディングを精読したうえで授業に参加しなければならない。リーディングの内容を事前に理解することなく授業に臨むことは期待されない。事前学習とし2.5時間、復習として2.5時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	●

成績評価基準と方法	プレゼンテーション：40%（到達目標②の評価） 授業内課題：20%（到達目標③の評価） 質疑応答、ディスカッション：20%（到達目標④の評価） 研究計画書の提出：20%（到達目標①の評価）
テキスト	適宜必要な資料を配布する。
参考文献	『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』（阿部幸大, 2024年, 光文社）

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本授業は、社会科学分野において論文を執筆する実務経験を持ち、博士号をもつ教員によって実施される。
-------------------	--

年度	2025
講義名称	観光産業・事業特殊講義[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 呉 泰均	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	本講義では、観光産業・事業あるいはその関連テーマで論ずるときに必要な知見と方法論を習得するとともに、どのような課題を関連づけて検討を加えることができるかを考えます。また、論文・文献を批判的に読解していくことで、分析の上でどのような問題が生ずるかについて認識を深めていきます。
到達目標	①日本における観光産業・事業の現状や課題について知見を得ることができます。 ②ポストコロナの観光復興に向け、中長期的な滞在者やリピーターの増加や地域コンテンツの創出が模索されるなか、復活のカギとして世界的に注目されているアドベンチャーツーリズムの概念や現状について知見を得ることができます。 ③北海道におけるアドベンチャートラベルの特徴や課題を客観的にとらえ、多角的に考えるための知見を習得し、分析を行うための基礎的能力を身につけることができます。 ④MICEの概念を習得するとともに、北海道におけるMICEの特徴や課題を客観的にとらえ、多角的に考えるための知見を習得し、分析を行うための基礎的能力を身につけることができます。 ⑤国際観光の特徴や課題を客観的にとらえ、多角的に考えるための知見を習得し、分析を行うための基礎的能力を身につけることができます。
授業の進め方	・関連分野の基礎知識について説明する「講義形式」の授業と関連するテーマについてプレゼンテーションやディスカッションを行う「演習形式」の授業を組み合わせ実施します。 ・初回授業時に授業の進め方などについてガイダンスを行います。参加者の数や学習ニーズに応じて、進め方を調整します。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	・毎回授業の冒頭に課題の解説およびフィードバックを行うとともに、前回の授業内容及び課題に関する質問や意見などを受け付けます。 ・授業外学習の際は、電子メールや学習管理システム（WebClass）などを活用してフィードバックを行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス（授業目標・計画・評価等について）： 本授業の概要と成績評価など、受講にあたっての必要事項について紹介する。また、日本の観光産業の現状と課題について概観する。
第2回	観光を取り巻く現状と課題： 日本の観光産業の現状と課題についての知見を深める。また、北海道の観光における現状と課題について議論および発表を行う。
第3回	今後の観光政策を考える1： 日本そして北海道における観光政策について考える。
第4回	今後の観光政策を考える2： 第3回の授業で学習した内容をもとに議論および発表を行う。
第5回	都市再生・地域振興1： 都市再生・地域振興における日本と海外の事例を比較する。また、さまざまな事例を通して持続可能な観光地域づくりについて考える。
第6回	都市再生・地域振興2： 第5回の授業で学習した内容をもとに議論および発表を行う。
第7回	アドベンチャーツーリズム1： AT（アドベンチャーツーリズム）の概念について学習したあと、北海道におけるATについて考える。

第8回	アドベンチャーツーリズム2： ATに関する文献を通して、ATの課題や未来について考える。
第9回	アドベンチャーツーリズム3： 第7回および第8回の授業で学習した内容をもとに議論および発表を行う。
第10回	MICEと国際観光1： MICEの概念について学習したあと、日本におけるMICEについて考える。
第11回	MICEと国際観光2： 第10回の授業で学習した内容をもとに、北海道のMICEについて議論および発表を行う。
第12回	観光と国際経済・社会・文化1： 国際観光に関する文献を通して、日本における国際観光の現状や課題について考える。
第13回	観光と国際経済・社会・文化2： 第12回の授業で学習した内容をもとに、日本における国際観光について議論および発表を行う。

事前・事後学修	【具体的な内容】 予習については、必要に応じて、指定されたテーマについて調べること、指定された関連文献を読むこと、配布する資料を読むこと、指定された問題を考えること、などを事前に指示します。復習については、毎回授業中に説明する用語や学習ポイントなどを理解しておくことが重要です。 【必要な時間】 前回の授業内容の復習は2時間、次回の授業内容の予習は2時間をを要します。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	●

成績評価基準と方法	主として「プレゼンテーション（40％）＋学期末のレポート（40％）」によりますが、平常の授業参加の状況（20％）を加えて、総合的に評価します。
テキスト	特定の教科書は用いません。必要に応じて講義資料を配布します。
参考文献	必要に応じて、授業の中で紹介します。

備考	①授業初回時に授業の進め方、取り上げるテーマなどを説明しますので、受講希望者は必ず出席してください。 ②講義の進度によって内容の変更や調整を行います。
----	---

年度	2025
講義名称	観光産業・事業文献演習[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 新海 茜	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	日本の観光産業・事業のあり方は海外とは異なる独自の性格を有するとともに、さまざまな問題もはらんでいる。本演習は、観光産業・事業に関する文献（基本書や学術論文、行政資料等）の精読及びディスカッションを通じて、修士論文の執筆に際して求められる分析力や批判的思考力を身に付けることを目的とする。受講生は、事前に持ち回りで割り当てられたテーマの文献内容をまとめたレジュメを作成し、授業内で口頭発表することが求められる。テーマごとに、受講生全員でディスカッションを行う。
到達目標	○日本の観光産業・事業の構造や特徴、問題点を体系的に理解できるようになる。 ○観光産業・事業に関する文献を精読する力を身に付ける。 ○学術的な批判的思考力を身に付ける。 ○学術的なディスカッションができるようになる。
授業の進め方	発表担当の受講生は、事前に持ち回りで割り当てられたテーマの文献内容をまとめたレジュメを作成し、授業の冒頭で口頭発表する。その後、受講生全員でディスカッションを行う。ディスカッションを深めるために、教員が適宜テーマに関する解説を加える。

アクティブ・ラーニング

PBL ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表担当者の作成したレジュメ及び発表に対して、教員がその場で良い点・改善点をコメントする。また、ディスカッションの中で浮かび上がった有意義な意見については、教員がその場で指摘し評価することによって議論を多角的に深化させる。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション
第2回	観光産業・事業概論①
第3回	観光産業・事業概論②
第4回	旅行業
第5回	宿泊業
第6回	航空輸送業
第7回	鉄道
第8回	テーマパーク
第9回	地域の観光産業・事業①
第10回	地域の観光産業・事業②
第11回	海外の観光産業・事業①
第12回	海外の観光産業・事業②
第13回	まとめ

事前・事後学修

発表担当者は、自身の担当回までに、割り当てられた文献の内容をまとめたレジュメを作成すること。
また、授業終了後には、各回のテーマが自身の修士論文のテーマとどう関連づけられるか考察すること。

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	○授業への姿勢（積極性、態度、発言など）：10％ ※発言内容の正否は問わず、発言量が多い者ほど評価する。 ○ディスカッション：20％ ○レジュメ作成・口頭発表：40％ ○最終レポート：30％
テキスト	[指定テキスト] 「1からの観光事業論」高橋一夫・柏木千春（編著）中央経済社

年度	2025
講義名称	観光情報メディア演習[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 齊藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	本演習では観光においてメディアが果たしている役割について、文献の精読と発表を通して、主に社会学的・メディア論的なアプローチから学習する。私たちは観光をするとき、メディアからの情報に頼りながら準備をしている。また、観光地がメディアと情報の働きによって作り上げられたりする。もしメディアというものがなければ、現代の観光は成り立たない。たとえば私たちは、スマホ無しでどれほど観光をすることができるだろうか？「インスタ映え」した写真を見て観光に向いたことはどれほどあるだろうか？ このように、現代観光において計り知れない影響を持っているメディアと情報について、多角的に学習する。
到達目標	本授業を修了することによって受講者は； ①現代観光とメディアの関係を社会学的・メディア論的な視点から理解することができるようになり、 ②観光におけるメディアの影響を批判的に捉えることができるようになり、 ③観光現象をメディアという視点から捉えることに関心を持つことができるようになり、 ④現代観光とメディアの関係を社会学的・メディア論的な視点から高度で学術的に分析できるようになる。
授業の進め方	基礎講義は教員による講義を主たる内容とする。指定文献輪読の授業は受講生によるリーディング課題の発表とディスカッション、小レポートの提出によって構成される。受講生は、予習として課されるリーディング課題を精読し、内容を理解し、また理解できなかった箇所を明確にした段階で授業に参加しなければならない。担当者はリーディング課題の内容について発表し、ディスカッションのテーマを二つ提示する。そのテーマについてペアやグループでディスカッションをし、発表をする。授業終わりには各回のテーマやディスカッション内容についての小レポートを提出する。自由文献輪読の回は、各受講生の興味関心のある文献を自身で選択し、発表をする（基本的な進行は指定文献輪読と同様である）。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表についてはその都度授業内でフィードバックをする。小レポートについては、WebClassにてフィードバックをする。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス：メディア／情報とは何か： 本授業の内容(スケジュールや成績評価など)について説明をする。授業テーマであるメディアについての基礎的な講義をおこなう。メディアという概念の幅の広さや、文化やコンテンツ、さらには私たちの身体とメディアとの関係性について理解をする。
第2回	基礎講義：観光とメディアの関係性（基礎）： 観光とメディアの関係性についての基礎的な講義を実施する。メディアには「仲介するもの」という理解があり、それは「記号」という概念の理解と結びついている。メディアがさまざまな情報の仲介の役割を果たすと同時に、それが多様な意味理解を形成する記号であるという考え方について、観光との関わりから理解する。
第3回	基礎講義：観光とメディアの関係性（発展）： 観光とメディアの関係性について学術的に論じた論文を取り上げ、観光とメディアの関係性の歴史的変容、現代観光におけるメディアの特殊な状況、多様な理論的概念について学習する。
第4回	指定文献輪読：メディアと観光地表象（基礎）： 私たちが思い描く観光地の印象や、特定の観光地に対する欲望が形成される仕組みについて、メディアの働きから論じた文献を取り上げ輪読をする。
第5回	指定文献輪読：メディアと観光地表象（発展）： メディアは、特定の観光地の印象のみならず、地理空間自体の捉え方を変化させる。デジタル地図（Google Mapsなど）が空間の理解の仕方に与える影響、観光地のイメージに与える影響や、私たちの行動の仕方に与える影響について論じた文献を輪読する。

第6回	指定文献輪読：観光のメディア・コミュニケーション（基礎）： 私たちは多様なメディアを使用して情報を発信したり、他者とコミュニケーションをしたりしている。特にSNSや動画配信サービスなどと観光の関係性について論じた文献を輪読する。
第7回	指定文献輪読：観光のメディア・コミュニケーション（発展）： SNSや観光情報ウェブサイトなどにおける観光情報は単に何かしらの情報を発信しているのではなく、非意図的な情報を伝達したり、それ自体が観光の楽しみになったりしている。ユニークな視点から観光のコミュニケーションのあり方を論じた文献を輪読する。
第8回	指定文献輪読：リアルとバーチャルの観光（基礎）： メディアの発達によって、観光は「リアル」な空間だけではなく「バーチャル」な空間で展開されるようになっていく。さらには、これら二つの領域の境界線があいまいになってきていく。このような空間の融合と観光の関係性についての文献を輪読する。
第9回	指定文献輪読：リアルとバーチャルの観光（発展）： コロナ禍を経て特徴的な形態として出現したオンラインツーリズムは、観光のバーチャル化という点でもっとも現代的な形態の一つと言える。オンラインツーリズムはそもそも観光と言えるのか、移動なしに観光するとは一体いかなる営みなのかという点について、文献の輪読から検討する。
第10回	指定文献輪読：コンテンツ・ツーリズム（基礎）： 映画やアニメなどのゆかりの地に訪れる観光行動であるコンテンツツーリズムは、多様なメディアによって媒介され、さらにはメディアの働きによって関連する多様なコンテンツを生み出す現象である。比較的新しい分野でもあるコンテンツツーリズムの定義や理論的視座について学習する。
第11回	指定文献輪読：コンテンツ・ツーリズム（発展）： コンテンツツーリズムの具体的な事例として、日本や海外における事例を論じた文献を取り上げる。多様なアクター間の関係性によってコンテンツが生み出されたり、それが地域振興といかに関わっているのかなどを、具体的事例分析の検討から学習する。
第12回	自由文献輪読（1） 受講者それぞれが自身の興味関心にあった観光・情報・メディアに関連する文献を選択し、内容についてまとめて発表をする。
第13回	自由文献輪読（2） 受講者それぞれが自身の興味関心にあった観光・情報・メディアに関連する文献を選択し、内容についてまとめて発表をする。

事前・事後学習	事前学習として、課題文献を精読し内容を理解しなければならない。また、理解できなかった箇所を明確にし、授業内でのディスカッションの準備をしなければならない。事後学習としては文献を再読し、理解度を確かめなければならない。それぞれ2.5時間を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	ディスカッションによる文献の批判的検討と、文献の発表を通じた内容理解について、以下の基準から評価する。 ・授業内ディスカッション・発表：30%（到達目標②④の評価） ・小レポート：30%（到達目標②④の評価） ・文献輪読の発表：40%（到達目標①③の評価）
テキスト	なし。
参考文献	・『観光メディア論』（遠藤英樹他編, 2014, ナカニシヤ出版） ・『メディア・コンテンツ論』（岡本健・遠藤英樹編, 2016, ナカニシヤ出版） ・『メディア文化論〔第二版〕』（遠藤英樹・松本健太郎・江藤茂博編, 2017, ナカニシヤ出版） ・『観光が世界をつくる：メディア／身体／リアリティの観光社会学』（須藤廣ほか編, 2023, 明石書店） ・『いま私たちをつなぐもの：拡張現実時代の観光とメディア』（山田義裕・岡本亮輔編, 2021, 弘文堂） ・『コンテンツツーリズム：メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』（山村高淑・フィリップ／シートン編著訳, 2021, 北海道大学出版会） ・『都市と文化のメディア論：情報化するコンテンツ／ツーリズム／トランスナショナルコミュニケーション』（堀野正人・谷島貴太・松本健太郎編, 2024, ナカニシヤ出版）

年度	2025
講義名称	観光振興特殊講義[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 新海 茜	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	日本には多くの観光振興の成功事例があるが、その中でも特にニセコエリアの事例は際立っている。本講義では、ニセコエリアの事例を取り上げながら、観光振興に関わる個別の論点を学習する。
到達目標	○ニセコエリアの観光振興について学習する。 ○特定の事例が学術体系の中でどのような位置を占めるのかを把握できるようになる。 ○観光振興に関わる様々な論点を学習する。
授業の進め方	本授業は、講義、ディスカッション、プレゼン発表、最終レポートによって構成される。 講義：ニセコエリアの事例と関係する具体的な論点について、教員が講義する。 ディスカッション：各回のテーマに沿った問いに対する答えを、受講生全員で討議する。 プレゼン発表：2～3人で1つのグループを作り、教員が指定した特定の論点に関わる具体的事例（ニセコエリア以外）を調査し、発表する。 最終レポート：教員が指定したテーマに沿ったレポートを執筆する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	ディスカッションやプレゼン発表に対して、教員がその場で良い点・改善点をコメントする。また、ディスカッションの中で浮かび上がった有意義な意見については、教員がその場で指摘し評価することによって、議論を多角的に深化させる。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション
第2回	ニセコエリアの概要
第3回	ニセコエリアの観光政策史
第4回	ニセコエリアのアクター構造
第5回	「英語圏」としてのニセコエリア：観光言語
第6回	ニセコエリアで顕在化される諸問題：オーバーツーリズム
第7回	Shiribeshi留学：関係人口
第8回	高級リゾート地としてのニセコエリア：富裕層観光
第9回	広がる「ニセコエリア」：広域連携
第10回	シビックプライドとニセコエリア：人材育成
第11回	グループ発表①
第12回	グループ発表②
第13回	まとめ

事前・事後学修	プレゼン発表当日までに、グループで、教員が指定した特定の論点についての具体的事例を調査し、発表の準備をしてくること。 また、授業終了後には、各回のテーマが自身の修士論文のテーマとどう関連づけられるか考察すること。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	○授業への姿勢（出席率、積極性、授業態度など）：20％ ※発言内容の正否は問わず、発言量が多い者ほど評価する。 ○ディスカッション：20％ ○プレゼン発表：30％ ○最終レポート：30％
テキスト	特になし。適宜プリントを配布する。

年度	2025
講義名称	観光振興文献演習[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 新海 茜	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	観光振興は、国・地方レベルの行政やDMOなど、さまざまなアクターによって行われるが、成功事例もあれば失敗事例もある。成功事例、失敗事例それぞれの要因を学術的に分析しつつ、観光振興を体系的に把握する能力を培うことは、修士論文を執筆する上で非常に重要である。本演習は、観光振興に関する文献（基本書や学術論文、行政資料等）の精読及びディスカッションを通じて、修士論文の執筆に際して求められる分析力や批判的思考力を身に付けることを目的とする。受講生は、事前に持ち回りで割り当てられたテーマの文献内容をまとめたレジュメを作成し、授業内で口頭発表することが求められる。テーマごとに、受講生全員でディスカッションを行う。
到達目標	○観光振興の意義や歴史的推移、近年の動向を学ぶ。 ○観光振興の成功事例、失敗事例を学ぶ。 ○観光振興の成功・失敗要因を分析する能力を身に付ける。 ○学術的な批判的思考力を身に付ける。 ○学術的なディスカッションができるようになる。
授業の進め方	発表担当の受講生は、事前に持ち回りで割り当てられたテーマの文献内容をまとめたレジュメを作成し、授業の冒頭で口頭発表する。その後、受講生全員でディスカッションを行う。ディスカッションを深めるために、教員が適宜テーマに関する解説を加える。

アクティブ・ラーニング

PBL ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	発表担当者の作成したレジュメ及び発表に対して、教員がその場で良い点・改善点をコメントする。また、ディスカッションの中で浮かび上がった有意義な意見については、教員がその場で指摘し評価することによって議論を多角的に深化させる。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション
第2回	観光振興の意義
第3回	観光振興の歴史的推移
第4回	観光振興の近年の動向①
第5回	観光振興の近年の動向②
第6回	観光振興の担い手
第7回	観光振興の具体的成功事例①
第8回	観光振興の具体的成功事例②
第9回	観光振興の具体的成功事例③
第10回	オーバーツーリズムの具体的事例①
第11回	オーバーツーリズムの具体的事例②
第12回	オーバーツーリズムの具体的事例③
第13回	まとめ

事前・事後学修	発表担当者は、自身の担当回までに、割り当てられた文献の内容をまとめたレジュメを作成すること。 また、授業終了後には、各回のテーマが自身の修士論文のテーマとどう関連づけられるか考察すること。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	○授業への姿勢（出席率、積極性、授業態度など）：10％ ※発言内容の正否は問わず、発言量が多い者ほど評価する。 ○ディスカッション：20％ ○レジュメ作成・口頭発表：40％ ○最終レポート：30％
テキスト	特になし。適宜プリントを配布する。

備考	上記授業計画は変更の可能性がある。
----	-------------------

年度	2025
講義名称	観光調査法[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 齊藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	本授業では、観光をめぐる多様な調査法の中でも、参与観察とインタビューを主とした質的調査法について学ぶ。いずれの調査法も、ただ「見る」「聞く」だけの調査法と捉えられる傾向があるが、それぞれに一定の手続や技術が存在している。これら二つの調査法は、大多数の傾向を捉えるために実施されるアンケート調査とは異なり、具体的かつ特有の人・事例の状況や背景を理解するために利用される。受講生が自身の調査において質的調査を予定していない場合も、本授業では各受講生は自身の研究テーマとの関連で参与観察とインタビューについて考え、その活用の仕方や技術について学習する。
到達目標	本授業を修了することによって受講生は； ①質的調査の特徴や利点を理解することができ、 ②質的調査に特有の視点からデータや分析結果を理解することができ、 ③質的調査を用いた調査に関心を持つことができ、 ④質的調査の実践的なスキルを獲得することができるようになる。
授業の進め方	講義、学生によるタスク、発表の三つによって授業は構成される。受講生は予習として科されるリーディングの文献を精読したうえで授業に臨まなければならない。授業ではそのリーディングの内容をもとにした講義をおこない、学生は質的調査に関するタスクと発表を実施する。インタビューとフィールドワークの模倣的、あるいは各受講生の研究テーマに沿った予備的な調査演習もおこなう。受講者数によって、タスクの実施形態（個人ワーク、ペアワーク、グループワーク）は調整する。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内でのタスクと発表には、その都度口頭でフィードバックをおこなう。
----------------------------	------------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション 授業の概要（講義スケジュールや成績評価法など）の説明をする。調査法の概要について紹介したのち、受講生は自身の研究テーマにおいて予定している調査法について、質的調査との関連から発表をする。
第2回	質的調査の基礎 基礎的講義として、質的調査法の特徴について学習をする。多様な質的調査、量的調査との違い、哲学的背景、データの捉え方などについて学ぶ。受講生は、事前に課されるリーディングを精読し、その文献についてのディスカッションをする。
第3回	テーマ設定 学期の後半で参与観察とインタビューを実施するために、自身の関心にあった調査テーマを検討し、発表をする。まずテーマやリサーチエスションの設定方法について基礎的講義をおこなう。それをもとに、自身の修士論文に直接関係するもの、あるいは全くのオリジナルもの、いずれかテーマの設定をする。ここで設定したテーマは、以降の講義を踏まえ、より精密なものへと修正をしていく。
第4回	参与観察の基礎 参与観察の特徴、データの収集・分析方法などについて学習する。受講生は、事前に課されるリーディングを精読し、その文献についてのディスカッションをする。また、参与観察のデータの分析の演習もおこなう。
第5回	参与観察を用いた研究事例の検討 参与観察を用いて実際に執筆された論文を精読し、その内容についてディスカッションをする。受講生は事前に論文を精読し、内容をまとめたレポートを提出する。授業内では課題論文における参与観察の扱われ方や分析の妥当性など、いくつかの点からディスカッションを実施し、発表をする。

第6回	参与観察計画の作成 自身で設定したテーマに従って、参与観察の計画を作成する。参与観察対象者、参与観察のスケジュール、参与観察においてフォーカスを当てる点の検討、参与観察の実施にあたって必要な準備の確認（許可どりなど）について検討し、発表をする。
第7回	インタビューの基礎 インタビュー調査の種類、特徴、データの収集・分析方法などについて学習する。受講生は、事前に課されるリーディングを精読し、その文献についてのディスカッションをする。また、インタビューデータの分析の演習もおこなう。
第8回	インタビューを用いた研究事例の検討 インタビューを用いて実際に執筆された論文を精読し、その内容についてディスカッションをする。受講生は事前に論文を精読し、内容をまとめたレポートを提出する。授業内では課題論文におけるインタビューの扱われ方や分析の妥当性など、いくつかの点からディスカッションを実施し、発表をする。
第9回	インタビュー計画の作成 自身で設定したテーマに従って、インタビューの計画を作成する。インタビュー対象者、インタビューのスケジュール、インタビューガイドの作成、インタビューの実施にあたって必要な準備の確認（許可どりなど）について検討し、発表をする。
第10回	参与観察とインタビューの実施 計画した参与観察とインタビューを実施する。参与観察についてはフィールドノートの正書をおこない、実施したインタビューは全て文字起こしをし、授業内で共有する準備をする。
第11回	調査の報告、データの分析 実施した調査について、概要を報告する。参与観察のフィールドノートとインタビューの文字起こしスクリプトを共有し、受講生間でのフィードバックをおこなう。データをコード化し、分析を実施する。
第12回	発表の準備 データの分析結果について、受講生間でフィードバックをおこなう。そのフィードバックのもと分析を修正し、最終発表に向けて準備をおこなう。
第13回	最終発表 実施した調査と分析をまとめ最終発表をおこなう。調査計画から分析結果まで、一連のプロセスと得られた知見について報告をする。

事前・事後学修	事前学習としてリーディングの課題に取り組む。事後学習として授業内容の復習に取り組む。それぞれ約2.5時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	●

成績評価基準と方法	各授業内の課題への取り組みと発表によって評価をする。 ・ 授業内課題：50%（到達目標①③の評価） ・ 授業内発表：50%（到達目標②④の評価）
テキスト	なし。
参考文献	『質的研究の考え方：研究方法論からSCATによる分析まで』（大谷尚, 2019, 名古屋大学出版会） 『観光人類学のフィールドワーク：ツーリズム現場の質的調査入門』（市野澤潤平ほか編著, 2021, ミネルヴァ書房） 『質的研究入門：〈人間の科学〉のための方法論【新版】』（ウヴェ・フリック, 2011, 春秋社） 『質的データの分析』（グラハム・R. ギブズ, 2017, 新曜社） 『質的データ分析法：原理・方法・実践』（佐藤郁哉, 2008, 新曜社） 『インタビュー調査法入門：質的調査実習の工夫と実践』（山口富子, 2023, ミネルヴァ書房） 『質的研究のための「インター・ビュー」』（スタイナー・クヴァール, 2016, 新曜社）

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、これまでインタビューを主とした質的調査を実施してきた実務経験のある教員によって実施される。
-------------------	--

年度	2025
講義名称	観光文化特殊講義[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	人びとの社会・経済・生活・環境と関わる観光について、文化とのつながりから探究し、理解を深めることを目的とします。
到達目標	文化を観光と結び付けて捉える視点を養い、観光を取り巻く人間の行動や生活、社会、経済、環境などとの関係性を理解し、自分の言葉で説明することができる。
授業の進め方	講義毎に指定した文献を精読してもらい、レジュメを作成し、口頭発表をしてもらいます。また発表内容を基にディスカッションを行います。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	文献を精読し、内容の要約と考察、追加で調べた内容に関するレジュメおよび口頭発表を、授業内で評価します。他の受講生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスを適宜行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション： 本講義のねらいと授業概要について説明します。
第2回	観光と文化： 観光と文化に関する学術的な捉え方と定義について解説し、ディスカッションを行います。
第3回	観光文化の歴史： 観光文化の歴史の変遷について解説し、先行研究や参考文献の精読を基にディスカッションを行います。
第4回	文化観光の概要： 文化観光の様々な種類とその特徴について解説し、複数の事例を基にディスカッションを行います。
第5回	先住民文化を対象とする観光①： 北海道アイヌ民族を観光資源とする様々な取り組みに関する現状と課題について解説し、ディスカッションを行います。
第6回	先住民文化を対象とする観光②： カナダ、オーストラリア、台湾など世界各地の先住民観光に関する事例を紹介し、現状と課題についてディスカッションを行います。
第7回	文化財・博物館を活用した観光①： 遺跡や文化財、歴史的建造物などを対象とする文化観光の特徴について解説し、その教育的・経済的・社会的効果についてディスカッションを行います。
第8回	文化財・博物館を活用した観光②： 世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の観光活用の現状について解説し、その教育的・経済的・社会的効果についてディスカッションを行います。
第9回	人びとの暮らしと観光： 観光が人間の行動や生活、社会、経済、環境とどのような関係性があるかを解説し、ディスカッションを行います。
第10回	文化観光／観光文化のケーススタディ①： 受講生各自が興味関心のある文化観光／観光文化の事例を選定し、文献・資料などで調査した結果をレジュメにまとめて発表し、ディスカッションを行います。
第11回	文化観光／観光文化のケーススタディ②： 受講生各自が興味関心のある文化観光／観光文化の事例を選定し、文献・資料などで調査した結果をレジュメにまとめて発表し、ディスカッションを行います。
第12回	文化観光／観光文化のケーススタディ③： 受講生各自が興味関心のある文化観光／観光文化の事例を選定し、文献・資料などで調査した結果をレジュメにまとめて発表し、ディスカッションを行います。

第13回	総括： 本講義で学んだことを振り返り、獲得した知識や新たな視点などについてディスカッションを行い、レポート作成や研究報告を通してまとめます。
------	--

事前・事後学修	事前学修としては、指定文献の精読、レジュメの作成および口頭発表の準備、事後学修としては、授業で行った口頭発表後のディスカッション内容に基づく振り返り作業が必要です。 事前・事後学修の時間数はともに5時間を目安とします。
----------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	口頭発表・レジュメ：40% 課題レポート：30% ディスカッション：30%
テキスト	特になし。
参考文献	授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	観光文化文献演習[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	観光文化領域の文献調査を通して、国内・海外の観光文化および文化観光に関する動向や専門的知識を習熟することを目的とします。
到達目標	観光文化研究の概念と特徴を理解し、関連する世界の観光文化／文化観光の様々な事例からその理論と実践の動向を把握した上で、自らの研究に反映することができる。
授業の進め方	講義毎に指定した文献を精読してもらい、レジュメを作成し、口頭発表をしてもらいます。また発表内容を基にディスカッションを行います。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	文献を精読し、内容の要約と考察、追加で調べた内容に関するレジュメおよび口頭発表を、授業内で評価します。他の受講生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスを適宜行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション： 本講義のねらいと授業概要について説明します。
第2回	文化観光の推進に関する法律： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第3回	文化観光の経済分析①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第4回	文化観光の経済分析②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第5回	地域社会に文化観光がもたらす影響①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第6回	地域社会に文化観光がもたらす影響②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第7回	芸術文化観光を活かしたまちの活性化①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第8回	芸術文化観光を活かしたまちの活性化②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第9回	コミュニティ・ベースド・ツーリズムによる伝統文化の保護と活用①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第10回	コミュニティ・ベースド・ツーリズムによる伝統文化の保護と活用②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第11回	文化遺産と観光開発をめぐる議論①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第12回	文化遺産と観光開発をめぐる議論②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。

第13回	総括： 本講義で学んだことを振り返り、獲得した知識や新たな視点などについてディスカッションを行い、レポート作成や研究報告を通してまとめます。
------	---

事前・事後 学修	事前学修としては、指定文献の精読、レジュメの作成および口頭発表の準備、事後学修としては、授業で行った口頭発表後のディスカッション内容に基づく振り返り作業が必要です。 事前・事後学修の時間数はともに5時間を目安とします。
-------------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	レジュメ・発表：40% 課題レポート：30% ディスカッション：30%
テキスト	特になし。
参考文献	授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 齊藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 横田 久貴	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 呉 泰均	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 田村　こずえ	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 田村　こずえ	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 黄 旭暉	大学・人文学部・国際教養学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 齊藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 新海 茜	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅰ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 顔 欒蘭	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	修士論文のフレームワークと目次の作成に向けて演習と指導を行う。研究のテーマ・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等に取り組み、修士論文執筆のための基礎を構築していく。
到達目標	・研究テーマに関する専門知識と方法論を習得し、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。 ・研究の到達目標を院生自身で設定し、これに見合う量・質の文献調査と独自調査を遂行する。 ・研究内容の流れと構成を把握し、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆に向けた課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文のテーマ設定と研究計画を行う。
第2回	先行研究の収集： 修士論文のテーマに関連する先行研究を調べて収集し、文献・資料リストを作成する。
第3回	先行研究のレビュー①： 収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第4回	先行研究のレビュー②： ①に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第5回	先行研究のレビュー③： ②に引き続き、収集した文献・資料を調査し、既往研究の読解と整理を行い、明らかにされていることや残された課題について再評価・再検討を行う。
第6回	問題提起と課題設定： 先行研究のレビュー結果を基に、修士論文の研究テーマにおける問題提起と課題設定を検討する。
第7回	調査の準備①： 研究の目的を明確にし、調査の概要（対象、方法、内容、スケジュール等）について計画・立案する。
第8回	調査の準備②： 独自調査（インタビュー、アンケート等）の具体的な内容を作成する。
第9回	調査の実施： 準備した調査を実施する。
第10回	調査結果の整理： 調査で得られたデータを集計し、整理する。
第11回	調査結果の分析： 集計・整理した調査データを分析し、結果をまとめる。

第12回	修士論文のフレームワークと目次の作成： これまで行ってきた研究内容の流れと構成を踏まえて、修士論文のフレームワークと目次を作成する。
第13回	次学期の研究計画： 今学期の研究内容を総括・再検討し、次学期の修士論文執筆に向けた追加の参考文献・資料や追加の調査等について計画・準備を行う。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・ 先行研究：30% ・ 調査内容：30% ・ 修士論文の目次作成、本文執筆：40%
テキスト	特になし。
参考文献	特になし。授業中必要に応じて適宜示す。

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 斉藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・ 専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・ 研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・ 観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 黄 旭暉	大学・人文学部・国際教養学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・ 専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・ 研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・ 観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 横田 久貴	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 呉 泰均	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 田村　こずえ	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・ 専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・ 研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・ 観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 田村　こずえ	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 黄 旭暉	大学・人文学部・国際教養学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・ 専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・ 研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・ 観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 斉藤 巧弥	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・ 専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・ 研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・ 観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 新海 茜	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	修士論文指導演習Ⅱ〔観研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 顔 欒蘭	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	前学期「修士論文指導演習Ⅰ」で取り組んできた研究テーマに基づく目的・方法論・デザインの設定、先行研究のレビュー、データの収集と分析、調査の実施等の成果をまとめながら、修士論文の執筆を進めていく。最終的に修士論文を完成させることを目的とする。
到達目標	・ 専門的かつ高度な知識を獲得し、先行研究や調査結果を十分に踏まえた妥当性と信頼性のある分析を行うことができる。 ・ 研究テーマに対する問題提起や課題設定を的確に行い、根拠に基づいた整合性のある論理展開によって考察や結論を導くことができる。 ・ 観光の学問分野や実務現場への貢献に資する修士学位論文を完成することができる。
授業の進め方	指導教員による個別指導を中心に、ディスカッション形式で授業を進める。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回院生より修士論文執筆の進捗に係る課題提出や研究報告をしてもらい、指導教員より添削やコメント、アドバイス等で適宜フィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス： 修士論文の完成・提出に向けた執筆計画を行う。
第2回	論文構成の再検討： 修士論文の目次の章立ておよび論述内容を再検討し、適宜変更に応じて追加の先行研究レビューや文献・資料・データの収集、追加の調査実施等に関する研究計画を立てる。
第3回	修士論文の執筆作業（序論・本論）①： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第4回	修士論文の執筆作業（序論・本論）②： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第5回	修士論文の執筆作業（序論・本論）③： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第6回	修士論文の執筆作業（序論・本論）④： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第7回	修士論文の執筆作業（序論・本論）⑤： 目次の章立てに基づき、先行研究のレビューや文献・資料・データの収集と整理、調査結果の分析をまとめ、各章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第8回	中間報告会の発表準備①： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。
第9回	中間報告会の発表準備②： 修士論文の内容に関する要旨およびパワーポイント等による発表資料を作成し、中間報告会に向けた準備を行う。

第10回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）①： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第11回	修士論文の執筆作業（まとめ・結論）②： 中間報告会でのフィードバックを基に修正作業を行い、序論・本論までの議論を推敲し、本論文のまとめと本研究で得られた結論、考察、提案等について、終章で論述する。指導教員に執筆作業の進捗報告を行う。
第12回	参考文献リスト・図表の完成： 修士論文で引用した参考文献のリストおよび挿入した図表をチェックし、適宜修正を行い、本文との整合性を図る作業を行う。
第13回	修士論文の完成： 論文全体をチェックし、書式の体裁や内容の構成、文章表現、誤字脱字、論旨の矛盾等について再確認を行い、完成させる。

事前・事後学修	事前学修については、毎回先行研究や関連文献・資料を精読し、指示された課題に取り組み、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要である。事後学修としては、授業で指導された研究内容や調査結果を集計・整理・分析し、修士論文に反映させる執筆作業が必要である。事前・事後学修の時間数はともに10時間以上を目安とする。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	研究内容および調査分析の量・質：20% 中間報告会での発表：20% 修士論文の完成度：60%
-----------	--

年度	2025
講義名称	観光文化研究演習[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	観光文化領域の基礎と応用を学び、実社会における文化の観光資源化と有効活用の在り方について、ケーススタディを基に探究することを目指します。
到達目標	観光文化および文化観光の概念と特徴を把握し、ケーススタディを通して適正な分析と考察を行い、文化の観光活用の在り方について自分の意見を持って論じることができる。
授業の進め方	講義毎に指定した文献を精読してもらい、レジュメを作成し、口頭発表をしてもらいます。また発表内容を基にディスカッションを行います。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	文献を精読し、内容の要約と考察、追加で調べた内容に関するレジュメおよび口頭発表を、授業内で評価します。他の受講生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスを適宜行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション： 本講義のねらいと授業概要について説明します。
第2回	観光文化領域における3つの射程： 観光文化、文化観光、観光と文化という3つの学問分野に関する概要と特徴について解説します。
第3回	持続可能な文化・社会を目指すサステナブルツーリズム①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第4回	持続可能な文化・社会を目指すサステナブルツーリズム②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第5回	環境問題に取り組むエコツーリズム①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第6回	環境問題に取り組むエコツーリズム②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第7回	民族文化を観光資源とするエスニックツーリズム①： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第8回	民族文化を観光資源とするエスニックツーリズム②： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第9回	観光文化領域に関するケーススタディ①： 受講生自身が観光文化に関連する研究テーマを設定し、先行研究のレビューと情報収集を行い、調べた内容をレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第10回	観光文化領域に関するケーススタディ②： 受講生自身が観光文化に関連する研究テーマを設定し、先行研究のレビューと情報収集を行い、調べた内容をレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第11回	観光文化領域に関するケーススタディ③： 受講生自身が観光文化に関連する研究テーマを設定し、先行研究のレビューと情報収集を行い、調べた内容をレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第12回	観光文化領域に関するケーススタディ④： 受講生自身が観光文化に関連する研究テーマを設定し、先行研究のレビューと情報収集を行い、調べた内容をレジュメにまとめ、口頭発表を行います。

第13回	まとめ： 本講義で学んだことを振り返り、獲得した知識や新たな視点などについてディスカッションを行い、総括します。
------	---

事前・事後 学修	事前学修としては、指定文献の精読、レジュメの作成および口頭発表の準備、事後学修としては、授業で行った口頭発表後のディスカッション内容に基づく振り返り作業が必要です。 事前・事後学修の時間数はともに5時間を目安とします。
-------------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	レジュメ：40% 口頭発表：40% ディスカッション：20%
テキスト	特になし。
参考文献	授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	観光振興研究演習[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 田村　こずえ	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的 と概要	観光振興の研究領域として持続可能な地域づくりの観点から観光振興に関して基本的な思考力を身につけ、観光を通じた地域づくりの実践的な知識の習得を目指します。
到達目標	観光振興の研究領域として持続可能な地域づくりの観点から観光振興に関して基本的な思考力の習得を目指す。
授業の進め方	【講義方法】 観光振興に関するに学生の関心事項等を、学生同士の討論を重視して講義を進めます。また、必要に応じてグループワークなどのディスカッション、地域社会等において実践的な学びの機会等により、能動的な学修を目指します。 ※授業計画は、受講生の人数や進捗状況などにより適宜変更になる場合があります。 ※必要に応じて、ゲストスピーカーの招聘やフィールドワークを予定しています。

アクティブ・ラーニング

グループワーク　ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題に対して、講義の中でフィードバックします。 課題はレポート形式またはプレゼンテーション形式によりますが、発表後に教員・学生間で議論を行い、一人ひとりの問題意識を深め課題解決力を養います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス
第2回	地域社会の現状（１）
第3回	地域社会の現状（２）
第4回	交流人口と関係人口（１）
第5回	交流人口と関係人口（２）
第6回	地域調査（１）（フィールドワーク等含む）
第7回	地域調査（２）（フィールドワーク等含む）
第8回	観光を通じた地域振興の実践1
第9回	観光を通じた地域振興の実践2
第10回	観光を通じた地域振興の実践3
第11回	観光振興の提案（１）
第12回	観光振興の提案（２）
第13回	発表・まとめ　総括

	【具体的な内容】 常日頃からニュース・新聞・文献・雑誌等から講義内容に関連する情報を収集するように心掛けてください。
--	---

事前・事後学修	講義ではしっかり傾聴してメモをとり、事後学修として講義の内容の理解に努める。 講義の課題や発表資料の作成及び準備等を行う。 【必要な時間】 受講生の興味関心や研究テーマなどに関連した資料の収集と収集した資料をまとめるための十分な時間を確保すること。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	・課題レポート：40% ・ディスカッション・発表：30% ・最終課題：30%
テキスト	受講生の興味関心や研究テーマなど必要に応じて適宜紹介します。
参考文献	受講生の興味関心や研究テーマなど必要に応じて適宜紹介します。

備考	・活発な議論を期待しています。自分なりの見解を持って授業に臨んでください。 ・観光と地域振興に関する情報を常日ごろから収集しておいてください。 ・主体的に学修する態度で講義に臨んでください。 ・フィールドワークや実習等の費用は、基本的に自己負担ですが、一部助成があります。
----	---

年度	2025
講義名称	観光産業・事業研究演習[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 顔 欒蘭	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	観光産業・事業に関わる修士論文の完成を目的とし、修士論文のテーマの決め方、構成方法、先行研究のまとめ方等について指導を行い、作成させる。また、修士論文で使用する日本語表現、表、グラフの作成方法、引用の方法等についても指導を行う。
到達目標	修士論文の先行研究をまとめ上げ、調査項目を決定する。
授業の進め方	論文作成の方法に関する教材を使用し、テーマの決め方を初めとする論文作成に必要な様々な事柄について指導を行うとともに、論文作成の手順に沿った課題を毎週提出し、作成させる。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題を提出した翌週の講義において、作成されたものについて検討、訂正を行う。
----------------------------	---------------------------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	講義についてのガイダンス
第2回	修士論文アウトラインの作り方
第3回	修士論文アウトラインの検討
第4回	修士論文テーマの決め方・検討
第5回	研究の目的・方向性の検討
第6回	修士論文構成の方法
第7回	修士論文構成の検討
第8回	先行研究の収集方法
第9回	先行研究の検討
第10回	先行研究の整理法・まとめ方
第11回	先行研究のまとめの検討
第12回	調査の方法・調査項目の検討
第13回	成果報告

事前・事後学修	修士論文作成に沿った課題に対し、自分なりにまとめたり、訂正を行ったりする。
---------	---------------------------------------

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	課題提出・課題の取り組み・授業態度60％ 成果報告40％
テキスト	特定のものはないが、その都度、必要な資料を配布する
参考文献	特定のものはないが、その都度、必要な資料を配布する
備考	課題は必ず提出する

年度	2025
講義名称	[冬集]観光目的地研究[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 横田 久貴	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	魅力的な観光の目的地形成に関する地域・まちの特色を活かした計画論および現場に即した知識を習得します。
到達目標	①観光目的地の計画論について理解し、現場に即した視座と知識を習得する。 ②設定する地域を事例として、観光地の形成過程や今後の観光動向を踏まえた地域・まちのあり方について、受講生自身の見解も含めて口頭や文章で説明することができる。 ③国際基準規格GSTCをもとに観光地の評価分析を行い、持続可能な観光の質的側面を洗い出すことができる。
授業の進め方	本講義は集中講義となるため、実施は概ね冬期休業期間（おおむね2月中旬）に実施します。 本講義は対象となる観光地に関する事前学習→フィールドワーク→事後学習の形式で行います。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	受講生が準備・発表した課題について、教員・受講生間でのディスカッションを通して追加的な情報提供やアドバイスをを行い、受講生の理解を深めてもらいます。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	集中講義1日目 ガイダンス・ケーススタディ 観光目的地として展開する地域を基本とし受講生の研究テーマに関連する地域を選定し、実施する。	対面授業
第2回	集中講義1日目 対象地域の概要調査① 基本調査	対面授業
第3回	集中講義1日目 対象地域の概要調査② 観光特性	対面授業
第4回	集中講義1日目 国際基準規格GSTC（Global Sustainable Tourism Criteria）を基にした観光の基準規格への理解	対面授業
第5回	集中講義2日目 現地調査（フィールドワーク）	フィールドワーク
第6回	集中講義2日目 現地調査（フィールドワーク）	フィールドワーク
第7回	集中講義2日目 現地調査（フィールドワーク）	フィールドワーク
第8回	集中講義3日目 現地調査（フィールドワーク）	フィールドワーク
第9回	集中講義3日目 現地調査（フィールドワーク）	フィールドワーク
第10回	集中講義3日目 現地調査（フィールドワーク）	フィールドワーク
第11回	集中講義4日目 調査結果のまとめ、ケーススタディの総括①	対面授業
第12回	集中講義4日目 調査結果のまとめ、ケーススタディの総括②	対面授業
第13回	集中講義4日目 研究発表・レポート、プレゼンテーション	対面授業

	【具体的な内容】	2025/04/01
--	----------	------------

事前・事後学修	研修地域の文献や新聞記事等を読み、対象地域の現況や課題について把握することが必要です。事後学習としては、調べた内容を整理して分析する作業が必要です。 なお、国際基準規格GSTCをSNSで検索し、規格の概要について理解しておくこと
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	講義（提出物・ディスカッション）40点 フィールドワーク（現地調査・レポート・プレゼンテーション）60点
テキスト	適宜指示します。 なお、国際基準規格GSTCをSNSで検索し、規格の概要について理解しておくこと
参考文献	適宜指示します。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	講師はISO9000シリーズ及びISO14000シリーズの審査員（保）として登録歴があり、持続可能な品質マネジメントシステム、観光マネジメントシステムの業務経験をもつ
備考	今年度は流氷観光（3泊程度）などでのフィールドワークを予定しています。 学生の自己費用負担は、札幌と対象地域の往復交通費と訪問先での飲食代が想定されます。（流氷観光船の代金は大学が負担します。）また、宿泊などその他の経費の一部は大学から補助が出る可能性があります。 なお、気象状況（流氷がない）やその他の学習環境の変化により、授業内容を変更する場合があります。

年度	2025
講義名称	観光ビジネス研究[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 藤崎 達也	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	観光産業は運輸・宿泊・旅行代理業を中心に発展してきた。これらは裾野の広い産業と言われている中で、観光学における周辺産業の研究を中心に行う。担当教員の実務経験を通し、観光地域におけるビジネスの現状と、昨今の観光施策の課題について学ぶことを目的とする。
到達目標	・「何が」中核的観光ビジネスなのかを説明することができる。 ・観光地における「伝統型ビジネス」と「新興観光ビジネス」について説明することができる。 ・現代の観光ビジネスの動向・アプローチを理解し、現在や今後に向けての課題を説明することができる。 ・民間と公共それぞれの観光施策の可能性と問題点を説明することができる。
授業の進め方	毎週与えるテーマについてレジュメを事前に提出してもらい、授業はその発表と出席者全員でのディスカッションを実施し、現状、課題、研究の視点などを確認する。 ※遠隔授業・オンデマンド授業は、ZOOMや動画での授業を45-50分程度し、その後、大学LMSシステム等を使い、授業の復習、映像による理解、資料配布、次週の課題、課題の提出とする。

アクティブ・ラーニング

PBL ディベート ディスカッション 反転学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	すべての課題について、授業内で適宜フィードバックする。
----------------------------	-----------------------------

事前・事後学修	【具体的な内容】 日頃から世の中のビジネスやマーケティングに関心を持つこと。 【必要な時間】 予習・復習にそれぞれ2時間を目安とします。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	●

成績評価基準と方法	レジュメ作成・発表 7回 各5点（合計35点） 授業中でのディスカッションへの参加 25点 積極性・自発的活動 40点
-----------	---

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業	1996年、知床で初の事業型ネイチャーガイドサービスを始め、有料のガイドサービスがなかった知床で夏冬を通してのガイド業を定着させた。特に冬の「流氷ウォーク」は、それまでの見るだけの観光を五感で楽しむ体験に変え、いまでは一冬で5千人が楽しむ人気ツアーとなっており、藤崎が設立したガイド会社「知床ナチュラリスト協会（Shinra）」は、現在も他のツアーとあわせ年間2〜3万人を受け入れている。そのプロデュース実績をかわれ、岩手県田野畑村にてサッパ船アドベンチャーズなどを核とする「番屋エコツーリズム」をプロデュース。
-----------------	--

年度	2025
講義名称	国際観光研究[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 顔 楽蘭	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	本講義では、国際観光分野における課題に関する考察・検討を行うのに必要な知見と方法論を習得するとともに、調査方法・データ収集・処理方法を学ぶ。また、論文・文献を批判的に検討した上で、研究方向を把握し、当該分野に存在する課題についての認識を深めていく。
到達目標	・国際観光の特徴や課題を客観的にとらえ、多角的に考えるための知見を習得し、分析を行うためのデータ処理・研究方法を学ぶ。 ・国境や文化圏を越える国際観光分野において必要とする異文化理解を深めるのと同時に、マクロ的な国際視野・価値観を形成させる。
授業の進め方	各課のテーマについてレジュメを提出してもらい、授業でテーマ発表・ディスカッションを実施し、研究課題、調査方法、論述視点などを検討する。 ※遠隔授業の間は、ZOOMでの授業を45-50分程度し、その後、大学LMSシステムmanabaを使い、授業の復習、映像による理解、資料配布、次週の課題、課題の提出とする。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題や研究テーマに関する質問や質疑は、基本的に授業内で適宜フィードバックする。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス（授業目標・計画・評価方法等）
第2回	観光と国際経済・社会・文化1
第3回	観光と国際経済・社会・文化2
第4回	観光と異文化理解
第5回	観光と異文化コミュニケーション1
第6回	観光と異文化コミュニケーション2
第7回	MICEと国際観光1
第8回	MICEと国際観光2
第9回	論文精読・検討・議論－国際経済・社会・文化
第10回	論文精読・検討・議論－異文化理解
第11回	論文精読・検討・議論－異文化コミュニケーション
第12回	精読と発表・議論－MICE
第13回	フィードバック・総まとめ

事前・事後学修	【具体的な内容】 ・予習については、進捗計画に応じて、研究課題について調べること、指定された文献・資料を読むこと、配布する資料を読むこと、課題に関して考察すること、などを事前に指示する。 ・復習については、都度の授業で検討した課題や学習ポイントを理解し・振り返りをする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
---	---

日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	プレゼンテーション（40%） 学期末のレポート（40%） 平常の授業参加の状況（20%） 以上により、総合的に評価する。
テキスト	特定せず、都度の授業で資料を配布する。

年度	2025
講義名称	[夏集]アウトドアレクリエーション計画[観研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	北海道におけるアウトドアレクリエーションの現状と課題について、事例研究とフィールドワークの実践を通して理解することを目的とします。
到達目標	アウトドアレクリエーション計画立案に必要な総合的視座を身に付けることともに、各種レクリエーションメニュー作成のための知識と手法を修得することができる。
授業の進め方	授業は集中講義形式で、夏季休業期間中に実施します。授業の流れは、事前学習→フィールドワーク→事後学習で行います。本講義はアウトドアレクリエーションの実務経験者を講師に招き、フィールドワーク先で担当教員とともに指導を行い、演習を通して理論的かつ実践的な知識とスキルを現場で養成します。

アクティブ・ラーニング

体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	受講生との活発なディスカッション、コメント・アドバイス、実習への協働参加を通して、受講生の研究課題に対する知識と理解を深めるよう、柔軟かつ包括的なフィードバックを適宜行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション： 本講義のねらいと授業概要について説明します。
第2回	アウトドアレクリエーション計画とは： アウトドアレクリエーションの概要とその計画方法について解説します。
第3回	北海道におけるアウトドアレクリエーションの現状と課題： アウトドアレクリエーションに関する北海道の事例を紹介し、その現状と課題についてディスカッションを行います。
第4回	アウトドアレクリエーションに関する留意点： アウトドアレクリエーションの活動および企画立案における注意事項について解説し、共通理解のためのディスカッションを行います。
第5回	フィールドワーク計画・準備①： フィールドワークの訪問先に関する情報収集および現地調査のための計画・準備を行います。
第6回	フィールドワーク計画・準備②： フィールドワークの訪問先に関する情報収集および現地調査のための計画・準備を行います。
第7回	フィールドワーク計画・準備③： フィールドワークの訪問先に関する情報収集および現地調査のための計画・準備を行います。
第8回	フィールドワークの実施①： 訪問先に滞在し、情報収集および現地調査に取り組みます。
第9回	フィールドワークの実施②： 訪問先に滞在し、情報収集および現地調査に取り組みます。
第10回	フィールドワークの実施③： 訪問先に滞在し、情報収集および現地調査に取り組みます。

第11回	フィールドワークの実施④： 訪問先に滞在し、情報収集および現地調査に取り組みます。
第12回	フィールドワークの実施⑤： 訪問先に滞在し、情報収集および現地調査に取り組みます。
第13回	総括： フィールドワークで行った情報収集および現地調査の結果をまとめ、レポートを作成します。

事前・事後学修	フィールドワーク実施前後に資料やデータの収集・整理作業、調査準備およびワークシートの記入作業を行う必要があります。事前・事後学修の時間数はともに5時間を目安とします。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	●
高度な専門職業人として要求される汎用技能	●

成績評価基準と方法	フィールドワーク：70% レポート：30%
テキスト	特になし。
参考文献	授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	観光経営演習[観研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	観光学研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 池見 真由	大学・観光学部・観光ビジネス学科

授業の目的と概要	観光経営に関する基礎理論と専門的知識を習得します。各地域・産業分野を拠点に創出された観光事業や地域住民を巻き込んだ取り組みを様々な事例から検証し、その経営形態やマーケティング、顧客管理、多面的な経済効果、持続可能な開発目標（SDGs）への貢献などに焦点を当て、理解を深めることを目的とします。
到達目標	観光経営の概念と特性について業種別・目的別・地域別の違いを理解し、様々な事例に対して根拠に基づき論理的に検証することができる。
授業の進め方	観光経営の理論や事例に関する文献資料を精読し、レジュメを作成して、授業内で発表してもらいます。また、観光経営に関連する研究テーマを受講生各自が設定して調査を行い、口頭発表を実施します。

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	文献を精読し、内容の要約と考察、追加で調べた内容に関するレジュメおよび口頭発表を、授業内で評価します。他の受講生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスを適宜行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	オリエンテーション： 本講義のねらいと授業概要について説明します。
第2回	観光経営の基礎： 観光経営の基本的理論について解説します。
第3回	地方自治体による観光事業の現状と課題： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第4回	民間企業による観光ビジネスの現状と課題： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第5回	地域住民による観光サービスの現状と課題： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第6回	日本の自然・人文・複合観光資源を活かしたビジネス： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第7回	北海道の自然・人文・複合観光資源を活かしたビジネス： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第8回	世界各国の自然・人文・複合観光資源を活かしたビジネス： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第9回	環境の保護につながる観光のマネジメント： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第10回	伝統文化の保全につながる観光のマネジメント： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第11回	地域の経済効果とまちの活性化につながる観光のマネジメント： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。

第12回	持続可能な社会とSDGsにつながる観光のマネジメント： 上記のテーマに関する研究論文を精読し、内容の要約と考察、追加で調べたことをレジュメにまとめ、口頭発表を行います。
第13回	総括： 本講義で学んだことを振り返り、獲得した知識や新たな視点などについてディスカッションを行い、レポート作成や研究報告を通してまとめます。

事前・事後学修	事前学修としては、指定文献の精読、レジュメの作成および口頭発表の準備、事後学修としては、授業で行った口頭発表後のディスカッション内容に基づく振り返り作業が必要です。 事前・事後学修の時間数はともに5時間を目安とします。
---------	--

DP（学位授与の方針）との関連（観光学研究科）

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識	●
日本の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力	
高度な専門職業人として要求される汎用技能	

成績評価基準と方法	レジュメ：40% 口頭発表：40% ディスカッション：20%
テキスト	特になし。
参考文献	授業中に指示します。

年度	2025
講義名称	[+冬集中]ジュニアスポーツ演習[ス研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
佐藤 文亮	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本講義では、小中学校期におけるスポーツを通じた体力づくりについて、地域等のスポーツ教室を活用して学修することを目指す。はじめに、身体機能の発達における身体活動・スポーツの効果に関する基本的な内容について概説を行う。次に、地域の行政・企業・団体等が主催するジュニアスポーツ教室に参加し、演習形式で学修する。
到達目標	【到達目標】 小中学校期におけるスポーツを通じた身体機能の発達を理解し、フィールドワークを通じて体力づくりの指導法およびジュニア期のコーチングについて修得する。
授業の進め方	【講義方法】 概説は講義および演習形式で行い、フィールドワークは学生自らが選択し、「課題解決型授業」を演習形式で行う。本科目は集中講義である。本講義は、運動生理学、発育発達領域およびバイオメカニクスおよび運動指導を専門とし、研究の実績を有する教員が担当する。担当者は地域でのスポーツレッスンおよび体力づくりに関する企画に参画した経験を有する。学生は自ら選択した地域と共同開催するジュニアスポーツ・イベントに参画し、フィールドワーク形式で学修する。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	【課題に対するフィードバックの方法】 課題については、授業内で解説する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	ガイダンス・・・ジュニアスポーツ演習の授業の進め方と意義について解説する。
第2回	身体構造の発育・・・形態の発育と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
第3回	身体機能の発達（１）・・・感覚、知覚および認知の情報処理系の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
第4回	身体機能の発達（２）・・・運動制御系の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
第5回	身体機能の発達（３）・・・筋機能の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
第6回	身体機能の発達（４）・・・呼吸循環機能の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
第7回	ジュニア期のコーチング（１）・・・自己理解について概説する。
第8回	ジュニア期のコーチング（２）・・・コーチング行動について概説する。
第9回	ジュニア期のコーチング（３）・・・運動の指導法について概説する。
第10回	ジュニア期のコーチング（４）・・・個別・専門コーチングについて概説する。
第11回	地域スポーツとのジュニアスポーツ活動（１）・・・プログラムの事前準備
第12回	地域スポーツとのジュニアスポーツ活動（２）・・・プログラムの企画・運営
第13回	地域スポーツとのジュニアスポーツ活動（４）・・・実習およびプログラムの振り返り

第14回	発表とまとめ
------	--------

事前・事後学修	小中学校期におけるスポーツを通じた体力づくりについて、広く見聞を広め、コーチング特論や運動技術演習をはじめとする講義や演習を積極的に受講すること。毎時間、小レポートを課す。また、フィールドワークごとに実習レポートを課す。これらをふまえ、事前および事後学習には、それぞれ、120分程度の時間を要する。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：フィールドワークでの取り組み状況（４０％）、レポート（６０％） 基準：作成された資料の構成と論理性を評価する。また、フィールドワークでの課題理解・解釈の正確さおよびグループワークでの発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	本講義は、運動生理学およびバイオメカニクスの視点から、野球における運動学習法の研究の実績を有し、かつコーチング、メンタルトレーニング、およびチームビルディングの資格を有する教員が担当する。
-------------------	--

年度	2025
講義名称	[冬集]高齢者スポーツ演習[ス研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本演習の目的は、高齢化社会におけるスポーツを通じた健康づくりについて、地域と大学との連携事業を活用して学修することである。はじめに、身体機能の老化と運動効果に関する基本的な内容について概説を行う。次に、高齢者のスポーツ・運動を通じた健康づくりの北海道での実践例について解説する。さらには、清田区や厚別区にある高齢者運動実践活動に参加し、演習形式で学修する。
到達目標	高齢者の健康づくり実践法を、地域連携課題事業を通じて修得する。
授業の進め方	概説は講義形式で行い、フィールドワーク活動は演習形式で行う。本科目は集中講義である。本演習は、それぞれ、運動生理学や健康科学を専門とし、健康教育の実績を有する教員が担当する。高齢化社会におけるスポーツを通じた健康づくりについて、地域と大学との連携事業を活用して学修する。

アクティブ・ラーニング

フィールドワーク

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	形態の老化
第2回	身体機能の老化（1）姿勢制御と随意運動
第3回	身体機能の老化（2）運動機能とトレーニング
第4回	高齢者のスポーツ・運動を通じた健康づくりの北海道での実践例（1）
第5回	高齢者のスポーツ・運動を通じた健康づくりの北海道での実践例（2）
第6回	高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定（1）清田区での事前準備
第7回	高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定（2）清田区での実施
第8回	高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定（3）清田区での指導実施
第9回	高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定（4）清田区での事後指導
第10回	高齢者健康づくり教室（1）厚別区での事前準備
第11回	高齢者健康づくり教室（2）厚別区での健康づくり教室参加
第12回	高齢者健康づくり教室（3）厚別区での健康づくり指導実施
第13回	高齢者健康づくり教室（4）厚別区での事後指導

事前・事後 学修	【具体的な内容】 高齢者におけるスポーツを通じた健康づくりについて、広く見聞を広め、関連する講義や演習を積極的に受講すること。あらかじめテキストや関連図書等を読んでおくこと。毎時間、小レポートを課す。また、フィールドワークごとに実習レポートを課す。これらをふまえ、事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。
-------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：作成された資料の構成と論理性を評価する。また、フィールドワークでの課題理解・解釈の正確さおよびグループワークでの発言などを総合的に評価する。 基準：フィールドワークでの取り組み状況（４０％）、 レポート（６０％）
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	身体運動機能特論[ス研]
講義開講時期	秋学期第1Q
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本授業の目的は、以下の5点である；①身体の構造や生理学の知見をもとに、運動力学の知見もふまえて身体運動時の運動機能を体系的に理解させる。②神経系・筋系に焦点を当て、最新の研究動向や研究成果等もふまえて概説し、理解させる。③ニューロン、感覚、運動の神経機構について解説するとともに、立位姿勢、歩行、打動作、蹴動作、跳動作および投動作の運動機能について解説する。④身体運動機能を身体の構造、生理学および運動力学の観点をもとに、体系的に理解する能力を習得させる。⑤身体運動機能の観点をふまえて、日常生活やスポーツ場面でのスポーツ健康指導を実践する応用能力を習得させる。
到達目標	身体運動機能を身体の構造、生理学および力学の観点から体系的に理解できる。さらに、日常生活やスポーツ場面でのスポーツ健康指導を身体運動機能の観点からふまえて、自らその知識を応用できるようになる。
授業の進め方	本授業では、パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。授業におけるプレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本講義は、運動生理学の研究を遂行してきた実務経験のある教員が、身体の構造、生理学、運動力学の知見をふまえて身体運動時の運動機能を体系的に理解させる講義を実施する。具体的には、立位姿勢、歩行、打動作、蹴動作、跳動作および投動作の運動機能に関する内容を明確に理解できる授業を実施する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	感覚（視覚・聴覚・体性感覚）
第2回	運動の神経制御Ⅰ（ニューロン）
第3回	運動の神経制御Ⅱ（中枢神経系）
第4回	姿勢と歩行の制御機構
第5回	神経系・筋系へのトレーニング効果
第6回	神経機能の老化とトレーニング
第7回	運動技能と神経調節
第8回	立位姿勢保持のバイオメカニクス
第9回	歩行・走行動作のバイオメカニクス
第10回	打動作の運動機能
第11回	蹴動作の運動機能
第12回	跳動作の運動機能
第13回	投動作の運動機能

事前・事	【具体的な内容】 身体運動機能を身体の構造、生理学および力学の観点から体系的に授業を実施する。あらかじめテキストや関連図書等を読んでおくこと。関係する資料検索・收拾を行い、学習の準備をすること。毎時間、小レポートを課す。
------	---

後学修	【必要な時間】 事前および事後学習には、それぞれ2時間を目安とする。
-----	--

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：レポートによる評価（60％）、授業への取り組み状況（40％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	藤原 勝夫 編著;姿勢制御の神経生理機構.杏林書院.
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	[冬集]人体構造学特論[ス研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	人体の構造と機能を体系的に理解することを目的とする。特に身体運動に関わる神経筋骨格系、呼吸循環器系、消化泌尿生殖系の（解剖学的）構造と（生理学的）機能について学修し、形態に基づく動作の成り立ちから人体の立体的かつ流動体としてイメージできるようにする。
到達目標	①人体の基礎的な構造と機能について説明できるようになる。 ②特に形態に基づく動作の成り立ちにつながる知識を理解する。
授業の進め方	スライドを用いて講義する。 やむを得ない事情で対面形式の授業が展開できない場合は、オンライン形式とすることがある。

アクティブ・ラーニング

PBL ディベート ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題は、感想シートの配布やeラーニングシステムを活用して提示し、授業内でフィードバックと解説を行う。また、本科目に関する質問は、個別対応とする。 身近にある身体の不思議や疑問などを題材に、人体の構造と機能について理解できるよう工夫する。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	人体構造学概論（活動機能構造連関とは）	対面授業
第2回	機能解剖学Ⅰ（肩甲帯の機能解剖学）	対面授業
第3回	機能解剖学Ⅱ（上肢帯の機能解剖学）	対面授業
第4回	機能解剖学Ⅲ（骨盤帯の機能解剖学）	対面授業
第5回	機能解剖学Ⅳ（下肢帯の機能解剖学）	対面授業
第6回	機能解剖学Ⅴ（脳脊髄の機能解剖学）	対面授業
第7回	解剖生理学Ⅰ（細胞と組織の解剖生理学）	対面授業
第8回	解剖生理学Ⅱ（呼吸器系の解剖生理学）	対面授業
第9回	解剖生理学Ⅲ（循環器系の解剖生理学）	対面授業
第10回	解剖生理学Ⅳ（消化吸収系の解剖生理学）	対面授業
第11回	解剖生理学Ⅴ（泌尿生殖系の解剖生理学）	対面授業
第12回	人体構造学総論（まとめ）	対面授業
第13回	期末試験	対面授業

事前・事後学修	【具体的な内容】 医学の基礎的知識を必要とするので事前に医学用語等を学習する。 事後は各系統別の構造と機能について復習する。 【必要な時間】
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	60% 期末試験 40% 授業内容確認レポートなど提出
テキスト	からだのしくみ事典 浅野伍朗 監修 成美堂出版
参考文献	その他、講義中に適時紹介する

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	医学部解剖学教室の研究員、大学病院の臨床現場、スポーツ指導の医科学スタッフとしての実務経験を豊富にもつ教員が、有資格者としての必要な知識と技術をスライドを用いて講義する。
備考	本科目を履修するにあたっては、人体の構造と機能についての基礎知識が必要となる。

年度	2025
講義名称	健康社会学特論[ス研]
講義開講時期	春学期第1Q
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	社会の変化に伴い、人々の健康に関する考え方も大きく変わってきている。本講義では、健康の定義やヘルスプロモーションの考え方について理解を深め、健康に影響を与える社会的要因について、公衆衛生学的な観点も含め解説をおこなう。また近年、わが国でも社会的な格差が問題になっていることをふまえ、健康と社会に関する指標や事例を関連付けて検討する。身近な地域の健康問題を発見・検討し、地域の人々と連携して問題を分析・改善できるようにする。
到達目標	健康についての定義・考え方を理解する。また、健康に関連する要因についてデータ・資料に基づき考察することができる。
授業の進め方	主として講義形式で行う。また、テーマによってディスカッション・データ分析・事例検討を行う。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。また、各自の課題をテーマにディスカッション・事例検討を行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	WHOの健康の定義
第2回	健康とは？
第3回	ヘルスプロモーション
第4回	身体組成・身体機能と健康
第5回	ライフスタイルと健康
第6回	生活習慣病
第7回	生活習慣病と予防施策
第8回	感染症
第9回	感染症と予防施策
第10回	社会と健康
第11回	社会経済的格差と健康
第12回	社会的不平等と健康
第13回	政治と健康

事前・事後学修	【具体的な内容】
	事前学習：毎回の講義テーマに関連する健康・社会に関連する図書などを読んで理解し、講義内での発表の準備を行う。
	事後学習：講義のテーマごとに、小レポートを課す。

2025/04/01

	【必要な時間】 事前および事後学習の目安は2時間程度とする。
--	--

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。 基準：講義内での提出物（30％）、発表（30％）、レポート（40％）
参考文献	【参考文献】 ・玉城英彦著；社会が病気をつくる－「持続可能な未来」のために. 角川学芸出版， 2010 ・イチロー・カワチ著；命の格差は止められるのか. 小学館， 2018

年度	2025
講義名称	スポーツ栄養学特論[ス研]
講義開講時期	春学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 小松 信隆	大学・スポーツ人間学部・スポーツビジネス学科

授業の目的と概要	アスリートのパフォーマンス向上やコンディショニング、一般の方々の健康維持・増進における栄養の役割について、栄養学、生理学の観点から学ぶ。それぞれの現場において必要な食事摂取の内容やタイミング、食事の消化吸収や代謝、それらに関わるホルモン分泌について学び、具体的な栄養管理方法について考案できるようにする。
到達目標	スポーツや健康維持・増進の現場における栄養の意義について理解し、様々なステージにとって適切な栄養摂取方法について具体的に考えることができる。
授業の進め方	講義、実習およびグループワーク

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	講義内で解説
----------------------------	--------

授業計画表

回	授業内容
第1回	栄養学の基礎
第2回	たんぱく質の消化吸収・代謝
第3回	脂質の消化吸収・代謝
第4回	炭水化物の消化吸収・代謝
第5回	ビタミン摂取の意義
第6回	ミネラル摂取の意義
第7回	水分補給
第8回	栄養素とホルモン分泌
第9回	食事摂取のタイミング
第10回	栄養コンディショニングとリカバリー
第11回	アスリートと傷病者の栄養アセスメント（身体組成・生化学検査）
第12回	調理実習（エネルギー補給）
第13回	調理実習（リカバリー）

事前・事後学修	授業計画に沿って予習および復習としてレポートを作成していただきます。
---------	------------------------------------

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
---------------------	---

スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	レポート70％、授業への取組み30％で評価する。レポートは講義内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜紹介する
参考文献	樋口 満（編著）、新版コンディショニングのスポーツ栄養学、市村出版 小林 修平・樋口 満（編著）、アスリートのための栄養・食事ガイド、第一出版 佗美 靖・花井 篤子編、新版生涯スポーツと運動の科学、市村出版

実務経験のある教員の有無

有り

年度	2025
講義名称	健康運動学特論[ス研]【ブレA】
講義開講時期	秋学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	ブレンド(A)
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	豊かで活力ある社会を実現するためには栄養、運動、休養のバランスの取れた健康的な生活習慣の確立を図ることが必要である。その実践の場としては、豊かな自然環境の中で積極的な健康づくりを実践できる「健康保養地」が適切であり、そのあり方、健康づくりの方策などを学ぶ。加えて人体生理・栄養学の基礎的知識の習得を目標とする。
到達目標	【到達目標】 スポーツ健康分野の現状を知り，問題点を認識することができる。 生活習慣病の成り立ちや、特に糖尿病や高脂血症などに対する食事・運動療法について理解できる。さらに、食事・運動療法実践の場としての「健康保養地」の意義について理解できる。
授業の進め方	【講義方法】 ハイブリッド型の授業形式をとる。具体的には、教える内容や状況に合わせて、対面授業と遠隔授業を行き来する授業形式である。

アクティブ・ラーニング

グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	毎回レポートを課す。次回の講義に、レポートの内容についてディスカッションを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	健康保養地の特性について概説する。	対面授業
第2回	水中運動の特徴について概説する。	対面授業
第3回	健康保養地での健康づくりの実践に関して、文献を読みながら、ディスカッションを行う。（ヒトの行動に焦点を当てる）	同時双方向型
第4回	健康保養地での健康づくりの実践に関して、文献を読みながら、ディスカッションを行う。（地域プログラムに焦点を当てる）	同時双方向型
第5回	生活習慣病、特に糖尿病・脂質異常症・高血圧の成因・治療における、運動・栄養学的アプローチについて概説する。	対面授業
第6回	生活習慣病、特に糖尿病・脂質異常症・高血圧の成因・治療における、運動・栄養学的アプローチについてディスカッションを行う（時代性をふまえた健康行動に焦点をあてる）。	同時双方向型
第7回	生活習慣病、特に糖尿病・脂質異常症・高血圧の成因・治療における、運動・栄養学的アプローチについてディスカッションを行う（心身の健康と運動、栄養と休養に焦点を当てる）。	同時双方向型
第8回	時間栄養学について概説する。	対面授業
第9回	時間栄養学について文献購読とディスカッションを行う（各自の日常の健康行動に焦点を当てる）。	同時双方向型
第10回	時間栄養学について文献購読とディスカッションを行う（各自の日常の健康行動に焦点を当て、第三者に提案する生活習慣について考える）。	同時双方向型
第11回	授業の振り返り発表（学生による授業実践）	対面授業

第12回	授業の振り返り発表（学生による授業実践）	対面授業
第13回	授業の振り返り発表（学生による授業実践）とまとめ	同時双方向型

事前・事後学修	【具体的な内容】 科目に関連する行事を実施した際は、到達目標に関するレポートを行う場合がある。 講義予定の項目について、事前に予習しておくこと。 【必要な時間】 予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：毎回レポートを提出（30％）、期末レポート（50％）、授業への取り組み状況（20％）
テキスト	適宜参考資料を配布する
参考文献	適宜参考資料を配布する

年度	2025
講義名称	運動発達特論[ス研]
講義開講時期	春学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 佐藤 文亮	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本講義では、乳幼児から高齢者に至るまでの人間行動の発達・加齢に関する仕組みを、主に生理学的、バイオメカニクスの観点から観察し、理解することを目的とする。ヒトの加齢発達に伴う、形態、体力、 感覚・知覚・認知機能等の変化について解説するとともに、それらに関する測定・評価法についても、最近の研究成果を織り交ぜながら紹介する。また、それらの発達の変化に影響を及ぼす環境・文化的要因、トレーニングについても言及する。
到達目標	進化、発育、成熟や発達に関する内容を明確に理解し、発育・発達における遊びやスポーツの意義を深く理解する。
授業の進め方	授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学修を目指す。本講義は、運動生理学およびバイオメカニクスの研究を遂行した実績を有する教員が、専門領域に加え、運動発達および高齢者に関する研究実績および実習事例を題材に実施する。進化、発育、成熟や発達に関する内容を明確に理解し、発育・発達における遊びやスポーツの意義を深く理解できる講義を実施する。

アクティブ・ラーニング

ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	子どもの年齢発達、遊び、および環境	対面授業
第2回	形態の発育	対面授業
第3回	筋の発達	対面授業
第4回	神経系の発達 1 （胎児期と新生児期）	対面授業
第5回	神経系の発達 2 （幼児期から児童期）	対面授業
第6回	神経系の発達 3 （青年期から成人期）	対面授業
第7回	運動行動の発達 1 （胎児期と新生児期）	対面授業
第8回	運動行動の発達 2 （幼児期から児童期）	対面授業
第9回	運動行動の発達 3 （青年期から成人期）	対面授業
第10回	形態の老化	対面授業
第11回	身体諸機能の老化 1 （筋系）	対面授業
第12回	身体諸機能の老化 2 （神経系）	対面授業
第13回	身体機能の発達および運動発達に関する測定法	対面授業

--

事前・事後学習	身体活動およびスポーツ関連の諸領域の中でも、進化、発育、成熟や発達に関する内容をメインテーマとして授業を実施する。関係する資料検索・收拾を行い、学習の準備をすること。毎時間、小レポートを課す。これらをふまえ、事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：授業内プレゼンテーションおよびレポート（２０％）、課題レポート（２０％）、最終レポート課題（６０％）とする。 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、定期試験の結果、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	・高石昌弘著、からだの発達, 大修館書店, 東京. ・Gabbard CP, Lifelong motor development(fourth edition), Benjamin Cumming, San Francisco. ・藤原勝夫 他 編著, 身体機能の老化と運動訓練, 日本出版サービス, 東京. ・藤原勝夫編著:運動機能解剖学.北國新聞社,石川.

年度	2025
講義名称	健康体力特論[ス研]
講義開講時期	秋学期第1Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	健康体力特論では、身体の構造や機能に関する科学的理解を基礎として、体力の維持・増進のための理論および方法について修得するよう概説する。 特に、健康、体力や運動能力の測定および評価に関する運動生理学、バイオメカニクスに基づく高度な知識を習得し、科学的根拠を有するデータ分析および知見の提示、またさらに体力を維持するための身体活動・トレーニング法やフィードバック法について解説を行う。
到達目標	健康の測定評価、体力の測定評価、運動能力の測定評価について妥当性の高いテストに基づき、信頼性の保証されるデータを取得し、適切なデータ分析による結果の提示と望ましいトレーニング方法の選択ができる。
授業の進め方	授業形態は教室での講義形式のほか、調査や現場での測定を行う。 プレゼンテーションソフトやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。

アクティブ・ラーニング

PBL ディスカッション 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	提出されたレポート課題等に対するコメントや添削によってフィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	健康の概念
第2回	体力の概念
第3回	健康関連体力の測定評価
第4回	バイオメカニクス(1)
第5回	バイオメカニクス(2)
第6回	エネルギー代謝系
第7回	レジスタンストレーニング（1）
第8回	レジスタンストレーニング（2）
第9回	持久性トレーニング（1）
第10回	持久性トレーニング（2）
第11回	ピリオダイゼーション
第12回	子どもの体力
第13回	生活習慣病とトレーニング

事前・事後学修	学校，スポーツチーム等での測定実習
---------	-------------------

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	2025/04/01
---------------------	------------

スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：レポートによる評価（６０％）、授業への取り組み状況（４０％） 基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。
-----------	---

年度	2025
講義名称	人間学特論[ス研]
講義開講時期	春学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 塚本 智宏	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	主として"子ども"期の人間を対象とする子ども人権論を通じて、人間とは何かを探究する。 教育や福祉あるいはスポーツの指導を含めて、子どもに対して教育や指導をする場合、あるいは、単に子どもに向き合うに際して、大人は、子どもとしての子どもに対し、また、人間としての子どもに対して、子どもにどのように接することが求められてきたのか、あるいは、どのように教育することが目指されてきたのか。その根拠や理由はどこにあるのか。歴史の中でつくりあげられてきた子ども人権論についての西欧のでの考察に学びながら、また、近年注目されてきているスポーツにおける子どもの権利論も同時に考察しながら、子ども人間論の基礎的知見の探究をめざしたい。
到達目標	・本講義の内容に関わって、文献・論文の調査の方法についての基本的知見とその技量を身につける ・人間について、それが持つ豊かな可能性と限界を、歴史的な研究を通して考察する力を身に着ける ・人権とりわけ子どもの人権・権利の歴史的形成を考察を通じて、その土台を成す人間に関する豊かな学問的見識を獲得する
授業の進め方	本授業では、ヨーロッパの中世から近代そして現代へと歴史が変化する過程で、徐々に発展してきた子どもの人間的価値や社会的価値への承認や発見を考察し、その具体的な思想や制度について、講義や学生自身による調査・報告を踏まえて、共に探究することを目指す。

アクティブ・ラーニング

ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	【講義方法】 基本は、教員による講義形式とそれに基づく討議 何回か必要な場面で、文献や論文に基づく発表・討論の演習形式 【課題に対するフィードバックの方法】 課題については、授業内で説明する。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	研究論文の作り方① 1.各自の研究テーマと調査した関連論文リスト提示並びに概要紹介 2.これまでの研究内容の既知の内容と未知の内容の区分、明確化 3.調査した内容の論理再構成 4.報告、論文の構成を考える	対面授業
第2回	研究論文の作り方② 1.本講義で扱う子どもの権利・人権についての研究対象を概観 2.講義を聴いたうえで、何が研究テーマなのかを各自考え、発表 3.各自の研究テーマに関して、相互にディスカッションする 4.それぞれの研究テーマに関して、既往研究をネット調査する。	対面授業
第3回	講義1.子ども発見以前の時代 ・絵画資料の利用 中世の子ども ・文書資料の利用 中世から近世の子ども 講義2.グリム童話の歴史と近代	対面授業
第4回	講義3 近代と子どもの発見 ルソー『エミール』の分析 近代の学校制度と子どもの誕生 ルソーから新教育時代 子どもの中に子ども	対面授業

2025/04/01

第5回	講義4 20世紀への転換と子ども＝人間の発見 「子どもの権利」発生の一つの筋道 「子どもの人権」発生のもう一つの筋道 コルチャックの子どもすでに人間思想	対面授業
第6回	講義5 コルチャックの子どもの権利思想 思想の背景と時代 コルチャックの子どもの権利思想	対面授業
第7回	講義6.子どもの権利条約の歴史とコルチャック 20世紀子どもの権利の歴史 三人のフロンティアと貢献	対面授業 研究発表
第8回	講義7 子ども権利条約と現代的課題 子どもの権利条約と現代日本における子どもの権利の課題 子どもの権利学習 研究報告発表	対面授業 研究発表
第9回	講義8 映像視聴と歴史分析 映画「コルチャック先生」の視聴 ホロコーストと人間	映像視聴と対面講義
第10回	講義9 映像視聴と歴史分析 映画「コルチャック先生」の視聴 ホロコーストと人間	映像視聴と対面講義
第11回	講義10 現代スポーツと子どもの権利 その1 子どもの成長発達権とスポーツ 子どもの人権とスポーツ	対面授業
第12回	講義11 現代スポーツと子どもの権利 その2 子どもの成長発達権とスポーツ 子どもの人権とスポーツ	対面授業
第13回	まとめの講義と発表 現代の子どもの権利の現状と課題の確認 各自の学びを発表報告する	対面授業

事前・事後学修	毎回の授業に際して、事前・事後の学習を行う。指示は毎回次回に向けて行う。
---------	--------------------------------------

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	・各授業に関するレポート提出 20％ ・必要に応じて課題として課される数回の研究報告 50％ ・最終レポート報告 30％
参考文献	塚本智宏、コルチャックと「子どもの権利」の源流、2019年、子どもの未来社

年度	2025
講義名称	解析統計学演習[ス研]
講義開講時期	秋学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	スポーツ健康に関する様々な情報を体系的に記述するデータ収集法および統計解析法を学ぶ。 統計解析の前提となる実験計画等の適切な扱い方や統計の基本を踏まえた適切なデータ解析法の選択ができるようにする。 記述統計学、推測統計学、ベイズ統計学を理解し、実験あるいは調査によって得られたデータの有効な分析方法を修得する。 RやPython等のデータ解析プログラミング言語の利用と開発について学ぶ。
到達目標	エクセル、SPSS、R、Pythonを利用したデータ分析および基礎統計解析ができるようになる。 差の検定、相関関係、多変量解析等のデータ解析が一通りできるようになる。 サンプリング、パワー、効果量の扱いを適切に行えるようになる。
授業の進め方	解析ツールは主にExcel、SPSS、R、Pythonを利用し、種々のデータに対して多様な分析を行う。 また、因子分析や共分散構造分析等の多変量解析の活用方法を学ぶ。 確率、確率分布、期待値、仮説検定、推定及び分散分析など、記述統計学から推測統計学、多変量解析法の基本的な概念について概説する。 これらは論文作成の一環において学修する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	提出されたレポート課題等に対するコメントや添削によってフィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	データアナリシスの概要
第2回	パラメトリック統計学
第3回	2群および多群の平均の比較
第4回	回帰分析
第5回	共分散分析，時系列分析
第6回	ノンパラメトリック統計学
第7回	主成分分析、因子分析
第8回	共分散構造分析
第9回	ロジスティック回帰分析
第10回	項目反応理論
第11回	信頼性分析
第12回	ベイズ統計学
第13回	まとめ

事前・事後学修	SPSSの操作，R、Pythonでの解析プログラミング	2025/04/01
---------	-----------------------------	------------

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：実習実技（８０％）、レポート（２０％） 基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	コーチング特論[ス研]
講義開講時期	春学期第1Q
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 阿井 英二郎	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本講義では、教育と研究を行う観点から解説するスポーツ指導・チームマネジメント・目標設定・メンタルトレーニング・コミュニケーション等のコーチングの原理原則を理解し、日常生活やスポーツ場でスポーツ健康指導を行えるような応用力を修得することを目的とする。また、「学校体育」および「競技スポーツ」におけるコーチングの重要性と応用例および工夫点も解説する。
到達目標	コーチングの原理原則を理解し、日常生活やスポーツ場でスポーツ健康指導を行えるような応用力を身修得し、実践できることを目指す。また、「学校体育」および「競技スポーツ」においてもコーチングの重要性を理解し、応用と工夫ができる指導力を身につけることを目指す。
授業の進め方	基本的には講義形式で行う。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。「学校体育」および「競技スポーツ」におけるコーチングの重要性と応用例および工夫点を理解できる講義を展開する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	ガイダンス(本講義の内容を概説と授業の進め方)、コーチング論の意義、目的、領域	対面授業
第2回	コーチング法(1)：セルフリーダーシップ	対面授業
第3回	コーチング法(2)：モチベーション	対面授業
第4回	コーチング法(3)：コーチの役割	対面授業
第5回	コーチング法(4)：個人と集団	対面授業
第6回	マインドフルネス(1)：理論、事例	対面授業
第7回	マインドフルネス(2)：技法・実践	対面授業
第8回	二次元気分尺度(1)：理論、事例	対面授業
第9回	二次元気分尺度(2)：実践	対面授業
第10回	コミュニケーションスキル(1)・・・コーチングに必要なスキル・チームマネジメント	対面授業
第11回	コミュニケーションスキル(3)・・・問題解決・応用	対面授業
第12回	スポーツコーチングにおけるアンガーマネジメント	対面授業
第13回	コーチング特論総括	対面授業

事前・事後学習	コーチングの原理原則を理解し、習得するための授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：最終レポート（６０％）、授業レポート（４０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	健康教育特論[ス研]
講義開講時期	秋学期第1Q
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	人々が健康の維持・増進を図るための知識や技術を習得し、健康の維持・増進に必要な意思決定ができるようになることをめざす健康教育の考え方と健康教育活動の実践について理解することを目的とする。始めに、健康教育の理念や歴史について概説する。次に、健康教育の企画・実施・評価、健康リテラシーの考え方やＩＴを活用した健康教育などに関して解説する。学習の総括として、各受講者が興味を持ったテーマについて、健康教育の理論やツールを適用し、対象者および地域特性に合致した具体的な健康教育を企画し、実施・評価について検討する。
到達目標	健康教育に関する理論・方法・実践について理解し、健康教育の企画・実施・評価を行えるようになる。
授業の進め方	主として講義形式で行う。また、テーマによってディスカッション・データ分析・事例検討を行う。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。また、各自の課題をテーマにディスカッション・事例検討を行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容
第1回	健康教育の概要とその歴史
第2回	健康教育における理論的背景
第3回	健康教育の実践と評価
第4回	健康教育における理論・実践・評価（プリシード・プロシードモデルについて）
第5回	健康教育における理論・実践・評価（トランスセオレティカルモデルについて）
第6回	ライフサイクルと健康教育
第7回	地域社会と健康
第8回	現代社会と健康（健康リテラシーの形成に影響を及ぼす諸要因について）
第9回	現代社会と健康（IT時代の健康教育について）
第10回	健康教育の方法・媒体やその選択
第11回	健康教育における研究動向
第12回	健康教育案の企画
第13回	健康教育案の発表

	【具体的な内容】 事前学習：毎回の講義テーマに関連する健康教育に関連する図書などを読んで理解し、講義内での発表の準備を行う。
--	---

事前・事後学習	事後学習：講義のテーマごとに、小レポートを課す。また、地域社会での健康教育に関する身近な出来事に興味関心を持ち、関連する資料などを読んで理解すること。 【必要な時間】 事前および事後学習の目安は2時間程度とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。 基準：講義内での提出物（30％）、発表（30％）、レポート（40％）
参考文献	【参考文献】 ・ローレンス・W・グリーン&マーシャル・W. クロイター著・神馬征峰訳「実践ヘルスプロモーション－PRECEDE・PROCEEDモデルによる企画と評価」 医学書院,2005 ・カレン・グランツ他編・曽根 智史他訳「健康行動と健康教育－理論、研究、実践」医学書院, 2006

年度	2025
講義名称	[夏集]保健体育科教育特論[ス研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 安田 純輝	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本科目は、保健体育科教育学に関する研究領域をカリキュラム論，教授・学習指導論，教師教育論ならびに研究方法論の観点から理解する。 また，本科目では，合理的な学習指導計画の立案ならびに保健体育科の授業実践の在り方について，多角的かつ批判的な視点から検討を試みる。
到達目標	①保健体育科教育学に関する研究領域を，カリキュラム論，教授・学習指導論，教師教育論ならびに研究方法論の観点から理解できる。 ②合理的な学習指導計画の立案ならびに保健体育科における授業実践の在り方について，多角的かつ批判的な視点から検討することができる。
授業の進め方	本科目は，講義形式を中心に展開する。 但し，グループワークや指導法の学習に際しては，実技を交えた演習形式による展開とする。 やむを得ない事情で対面形式の授業が展開できない場合は，オンライン形式あるいはオンデマンド形式とすることがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション 体験学習 反転学習 調査学習
--

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	本科目の課題は，LMSを活用して提示し，授業内でフィードバックと解説を行う。 授業外における本科目に関する質問は，個別対応とする。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	ガイダンス：講義の概要説明	対面授業（講義形式）
第2回	保健体育科の学習指導①：目標と内容	対面授業（講義形式）
第3回	保健体育科の学習指導②：学習指導計画	対面授業（講義形式）
第4回	保健体育科教育学における実践的研究の進め方①：実践研究の概要	対面授業（講義形式）
第5回	保健体育科教育学における実践的研究の進め方②：データの収集および分析	対面授業（講義形式）
第6回	保健体育科教育学における学術論文作成の基本①：雑誌の種類と性質・RQ	対面授業（講義形式）
第7回	保健体育科教育学における学術論文作成の基本②：研究・論文執筆の留意点	対面授業（講義形式）
第8回	保健体育科における学習指導計画の立案	対面授業（講義形式）
第9回	保健体育科の学習指導実践Ⅰ-①	対面授業（演習形式）
第10回	保健体育科の学習指導実践Ⅰ-②	対面授業（演習形式）
第11回	保健体育科の学習指導実践Ⅱ-①	対面授業（演習形式）
第12回	保健体育科の学習指導実践Ⅱ-②	対面授業（演習形式）
第13回	まとめ：最終課題の確認	対面授業（講義形式）

事前・事後学修	【具体的な内容】
	事前学習では、引用・参考文献の検索・閲覧・批判的検討に取り組み、
	教科教育法における今日的課題の解決に向けた示唆に富む授業の展開方法ならびに研究方法論を展開できるよう準備に励むこと。
	事後学習では、培った実践的知識を基に合理的な授業が展開できるよう研鑽に励むこと。
	【必要な時間】
	各回の予習・復習には、それぞれ150分程度を要することが想定される。

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	40%：授業への取り組み ディスカッションや学習指導実践への参加状況を総合的に評価する。 30%：リフレクション 毎時間リフレクションを実施する。展開された内容と関連付けて考察がなされているかを評価する。 30%：学習指導計画 模擬授業担当領域における学習指導計画（単元計画・時間計画）の作成を課し、その完成度を評価する。
参考文献	文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説：保健体育編。東山書房。 文部科学省（2019）高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説：保健体育編 体育編。東山書房。 岡田悠佑・根本想 編（2025）教員をめざす人の体育指導法：教えることが楽しくなるための理論と実践。みらい。 岡出美則ほか編（2021）体育科教育学入門（三訂版）。大修館書店。 『楽しい体育の授業』編集部編（2023）教材研究×体育：素材分析・子ども理解から授業へつなぐ超実践ガイド。明治図書出版。 その他、必要に応じて適宜配布する。

備考	本科目では、「中学校教諭専修免許（保健体育）」および「高等学校教諭専修免許（保健体育）」の取得に係る資質・能力を養う。
----	--

年度	2025
講義名称	[冬集]健康施策特論[ス研]
講義開講時期	秋学期
必選区分	0:選択
学年	2年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 桑原 ゆみ	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	議本講義の目的は、施策の基本を理解し、未来に向けた持続可能な健康施策の提案能力を身につけることである。 この目的を達成するために、本講義では、人々の健康に影響を及ぼす施策の基本を理解する。また、健康施策の立案・実施・評価の実際を理解し、プロセスとして展開していく必要性を検討する。さらに、未来に向けた持続可能な健康施策の立案を行い、具体的な提言を試みる。
到達目標	1. 人々の健康に影響を及ぼす施策の基本を知り、説明できる。 2. 健康施策を立案・実施・評価のプロセスで説明できる。 3. 未来に向けた持続可能な健康施策の立案を行い、具体的な提言を検討できる。
授業の進め方	施策の基本と健康施策の実際例について、授業担当者の教育・研究実践および自治体健康施策委員としての実務経験に基づいて講義する。 わが国の健康施策について学生がプレゼンテーションし、授業でのディスカッションを行い、理解を深める。 健康施策をプロセスとして理解するために、学生が興味関心のある施策の立案を行い、ディスカッションする。教員や学生同士のフィードバックを得るなど、アクティブラーニングも活用する。

アクティブ・ラーニング

グループワーク ディスカッション 反転学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	学生のプレゼンテーション内容および提出する課題についてフィードバックを講義時間に行う。
----------------------------	---

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	健康施策特論の概説と健康施策の基本的理解	
第2回	健康施策に関連する理論：ヘルスプロモーション、行動変容理論、エンパワメントと参加	同時双方向
第3回	わが国における健康施策の動向と具体例	同時双方向
第4回	健康施策のプロセス（立案・実施・評価）の基本的理解と具体例の検討	同時双方向
第5回	持続可能な健康施策の立案：テーマの検討	同時双方向
第6回	持続可能な健康施策の立案：目的と対象の検討	同時双方向
第7回	持続可能な健康施策の立案：実施方法の検討	同時双方向
第8回	持続可能な健康施策の立案：評価の検討	同時双方向
第9回	持続可能な健康施策の提案：プレゼンテーション	同時双方向
第10回	持続可能な健康施策の提案：ディスカッション	同時双方向
第11回	持続可能な健康施策の検討	同時双方向
第12回	持続可能な健康施策への具体的提言の検討	同時双方向
第13回	まとめ 健康施策の基本的理解の確認と持続可能な健康施策への提言	

事前・事後学修	事前：健康施策特論のシラバスを読み、準備する。2回目以降は、事後学習を講義前に振り返り、講義でのプレゼンテーションを準備する。（1時間程度） 事後：講義内容を振り返り、興味関心のある一自治体のホームページなどを調べ、講義内容と対応する自治体の情報を整理し、検討する。講義内で指示された文献などを抄読し、自分の意見を整理する。（4時間程度）
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	成績評価基準：授業における課題の理解・解釈の正確さ、作成した資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションの分かりやすさ、ディスカッションでの論理性と検討の深まりから評価する。 成績評価方法：プレゼンテーション（40％）、ディスカッション（40％）、課題レポート（20％）
テキスト	なし
参考文献	随時提示する。

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	看護師・保健師・自治体健康施策策定委員
-------------------	---------------------

年度	2025
講義名称	キャリア形成特論[ス研]
講義開講時期	秋学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	講義
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 原 一将	大学・スポーツ人間学部・スポーツビジネス学科

授業の目的と概要	スポーツ健康指導者となるために受講生自身のキャリアについて考えを深め、キャリア形成に必要な能力を養うことを目的とします。キャリア形成に関する考え方を最新の動向をふまえ体系的に概説します。その後、スポーツ健康指導と関連するキャリア形成についての事例に対して、グループ討論、提言書作成等の演習を実施することを通して、キャリアに対する考えを深めると共に、今後のキャリア形成に必要な能力の向上を図ります。
到達目標	・キャリア形成に関する考え方を身に付け、説明できるようになります。 ・スポーツ健康指導者のキャリア形成について考えを深め説明できるようになります。 ・自分のキャリア形成に必要な今後の行動等を理解し、実践できるようになります。 日々変化する時代に対応すべく、自立して生きていくための生活習慣、社会人基礎力をベースとした環境適応能力を身につけます。
授業の進め方	授業形態は講義形式と、受講生主体の討論、グループワークおよび提言書の作成、プレゼンテーション等の演習形式とします。

アクティブ・ラーニング

フィールドワーク ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については授業内で解説するとともにフィードバックについても授業内で行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	オリエンテーション	対面
第2回	キャリアとは	対面
第3回	キャリア形成とは	対面
第4回	キャリア形成とライフステージ	対面
第5回	キャリア形成と実践教育	対面
第6回	キャリア形成のためのポートフォリオ	対面
第7回	キャリア形成と就業	対面
第8回	北海道におけるスポーツ健康指導の傾向	対面
第9回	スポーツ健康指導を行うために必要なキャリア	対面
第10回	スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成（1）	対面
第11回	スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成（2）	対面
第12回	スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成（3）	対面
第13回	プレゼンテーション	対面

事前・事後 学修	必要に応じて授業の冒頭に、前回の授業内容の復習課題を出題する。必ず前回の授業内容を復習の上、出席してください。また、より良い提言書を作成するためには、授業時間外を活用する必要があります。
-------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：授業中の提出物（30％）、提言書の水準（40％）、プレゼンテーションの水準（30％） 基準：提言書およびプレゼンテーションは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価します。
テキスト	必要に応じて資料を配布します。
参考文献	一般財団法人全国大学実務教育協会編『実践キャリア考』実教出版、2013年

実務経験のある教員の有無

有り

	①組織において15年間採用コンサルタントをした経験 大学卒業後、大手就職情報会社に就職し、15年間採用コンサルタント業務に携わる。北海道を含む東日本全域において、大手～中小に至るまで約500社を担当。営業活動のほか、就活イベントの企画運営や各大学における就職ガイダンスでの講演および学内説明会の委託運営も行った。同社では就職情報事業だけでなく、入試広報事業や派遣事業にも携わった。 ②起業して20年間採用コンサルタントをした経験（現在に至る） 上記企業を退職後、採用コンサルティング会社を設立、20年間採用コンサルタント業務に携わる。企業の第二人事部としてより深くクライアントに入り込み、採用業務全般のアウトソーシングに重きを置いた。2005年にCDA（キャリアカウンセラー 現：キャリアコンサルタント）資格を取得。提携先の企業と共に学生向けの「就活ゼミ」を毎週開催。多いときは1回あたり200名を超える学生が参加した。同企画の成功で採用担当者を集めた「採用ゼミ」も開催した。 キャリア教育は学校社会と職業人社会の架け橋です。「大学での学びは社会に出てから役に立つのだろうか？」そう思われる人もいるでしょう。私も学生時代は同じ思いを抱いていました。しかし、大学で学んだことが直ぐ通用するほど社会は甘くありません。大学での学びが直ぐ通用する職業もほとんどありません。それはおそらく、仕事で発揮する能力と人間関係のなかで仕事に取り組む能力の両方が求められるからです。
実務経験のある教員の経歴と授業内容	一昔前と比べ、今や卒業後の進路は多種多様になり、必ずしも「就職」だけが進路ではなくなりました。「一生学生のままでいられたらどんなに幸せか」そう思われる人もいるでしょう。それだけ大学生活は自由であり、我が国における大学生はあらゆる意味で優遇されています。確かに満員電車で揺られ、毎朝出勤するのは社会人になって何年経ってもしんどいものです。しかし、社会は学生時代の何倍も楽しいところです。まず達成感があり、成長も実感できます。収入を得られ、幅広い世代の方々と知り合いになります。その楽しさを挙げるとキリがありません。そして社会人としての職業人生活は長く、大学のように4年という区切りはありません。 だからこそ私の授業では、大学での学びが日常生活や仕事生活で活用される事例を、授業内容と関連付けて紹介し、皆様に学びへの気づきを与えていきます。それにより「何のために学ぶのか」が明確となり学習意欲も向上します。同時に社会の現実もリアルに伝えていきます。夢を持つのは素晴らしいことです。しかし、全員が夢を持っているわけではありません。夢がない人は夢を持つことを夢にすればいいのです。そのうえで夢があるないに関わらず、現実を直視する重要性を説いていきます。ロマンチストである前にリアリストであること、大輪の花を咲かせるには、土を耕し水をやり、日に当てて栄養分を十分に与える必要があります。 また社会情勢に疎くならないよう、時事問題に関する資料を配布、取り上げたテーマについてディスカッションする機会も頻繁に設けます。今は正解のない時代です。大事なのは考えることであり、それを言語化することです。これは反復でしか効果は得られません。その代わりこの授業が終わったあとの皆さんは、少なからず成長しているはずですよ。 私は一般企業に勤めた後、30代後半にニート（引きこもり）やフリーターを経験しています。その後、起業し今に至りますが、そのような自身の経験を交えながら、そして数多くの卒業生と繋がっていますので、彼ら彼女らの事例も挙げながら、皆さんの道標となる授業を展開していきます。 皆さんの未来は開かれています。「希望と再生」をテーマにお互い頑張りましょう。

年度	2025
講義名称	身体運動指導演習[ス研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
佐藤 文亮	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	身体運動指導を通じて、パフォーマンスの向上、健康の維持・増進もしくは疾病の予防が図られる。身体運動指導の実践活動に役立つための身体運動機能等の測定・分析法を修得させる。これら測定・分析法をもとに、身体運動機能を検討できるようになるとともに、スポーツ健康指導に応用できるようになることを目的とする。
到達目標	身体運動指導の実践活動に役立つための身体運動機能等の測定・分析法が修得できる。これら測定・分析法をもとに、身体運動機能を検討できるようになるとともに、スポーツ健康指導に応用できるようになる。
授業の進め方	身体運動指導と関連した測定法と分析法に関する概説と演習を組み合わせで行う。本講義は、運動生理学的研究を遂行した実績を有する教員が実施する。身体運動指導の実践活動に役立つための身体運動機能等の測定・分析法を修得し、分析結果を活用したディスカッションを行う。また、それをスポーツ健康指導に応用できるよう、能動的学習を目指す。フィールドワーク等実践的学習の場に参加することがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク ディベート ディスカッション 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	身体運動指導と関連した測定の概要と演習の進め方	対面授業
第2回	運動負荷試験（エルゴメーター）	対面授業
第3回	運動負荷試験（トレッドミル）	対面授業
第4回	歩行運動とエネルギー消費量	対面授業
第5回	血圧・体脂肪率	対面授業
第6回	筋電図データ記録と分析	対面授業
第7回	筋血流	対面授業
第8回	脊髄反射（H波）	対面授業
第9回	脳波（感覚誘発電位と事象関連電位）	対面授業
第10回	運動誘発電位（経頭蓋磁気刺激法）	対面授業
第11回	眼球運動	対面授業
第12回	立位姿勢保持時の足圧中心位置	対面授業
第13回	上肢運動時の姿勢調節	対面授業

事前・事後学習	毎時間の授業前までには少なくとも、該当する身体機能の測定法ならびに分析法について、関連図書などを読んで理解しておくこと。毎時間、振り返り小レポートの作成を課す。これらをふまえ、事前および事後学習は、2時間を目安とする。
---------	---

2025/04/01

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：レポートによる評価（６０％）、授業への取り組み状況（４０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	体力評価演習[ス研]
講義開講時期	秋学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	体力構成要素の測定と評価を中心に学び、その理論と手法を修得する。 構成概念としての体力構成要素の計量化のプロセスを学び、体力テストの成り立ちを理解する。 体力評価とバッテリーテストの関係から、妥当性および信頼性に基づくテスト選択の手順を理解する。 また、実際の体力測定を通して体力の測定に関する機器の正しい扱い方を理解するとともに、体格および身体機能のデータを扱い、適切な分析方法とフィードバックの手続きを学び、効果的な体力の評価に関する能力を身につける。
到達目標	筋力、筋パワー、最大酸素摂取量、バランス、身体組成、体力テストによる測定評価を適切に行うことができる。スポーツ等に特異的な組テストの提案をできるようになる。
授業の進め方	講義と演習を交互に行う。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク 体験学習 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	提出されたレポート課題等に対するコメントや添削によってフィードバックを行う。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容
第1回	体力の構造と数理解釈
第2回	筋力、筋パワーの測定
第3回	筋力、筋パワーの評価
第4回	持久力の測定
第5回	持久力の評価
第6回	バランスの測定
第7回	バランスの評価
第8回	身体組成の測定
第9回	身体組成の評価
第10回	フィットネスの測定
第11回	フィットネスの評価
第12回	身体動作の測定
第13回	身体動作の評価

事前・事後学修	データ解析に関するプログラミング
---------	------------------

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：レポート（８０％）およびクイズによる評価（２０％） 基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているか評価する。
テキスト	適宜提示する

年度	2025
講義名称	運動技術演習[ス研]
講義開講時期	春学期
必選区分	0:選択
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	本演習では、「①生理学、解剖学、運動学等の知見にもとづく運動技術の理論を修得させるとともに、その技術の生理学的、バイオメカニクスの測定・分析法を修得させる。」、②「分析結果を活用して、自己の運動技能獲得とスポーツ指導につなげるようにする。」ことを目的とする。担当教員が行ってきたスポーツ種目を活用する。その種目は、卓球、野球である。
到達目標	運動技術の生理学的、バイオメカニクスの測定・分析法が修得できる。分析結果と生理学、解剖学、運動学等の知見にもとづいて、自己の運動技能獲得につなげるとともに、スポーツ指導に応用できるようになる。
授業の進め方	運動技術理解のための概説、演習および討論を組み合わせで行う。本演習は、卓球および野球における競技経験を有し、かつ運動生理学的研究の実績を有する教員が実施する。本演習は2名で実施するが、1-7回目を国田が主に担当し、8-13回目は、阿南が主に担当する。各運動技術の生理学的、バイオメカニクスの測定・分析法を修得し、分析結果を活用して、自己の運動技能獲得とスポーツ指導につなげるように、能動的学修を目指す。フィールドワーク等実践的学習の場に参加することがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	運動基礎技術（立位保持姿勢）の生理学的・バイオメカニクスの測定
第2回	運動基礎技術（立位保持姿勢）の生理学的・バイオメカニクスの分析
第3回	運動基礎技術（歩行）の生理学的・バイオメカニクスの測定
第4回	運動基礎技術（歩行）の生理学的・バイオメカニクスの分析
第5回	卓球技術（フォアハンドストローク）の生理学的・バイオメカニクスの測定
第6回	卓球技術（フォアハンドストローク）の生理学的・バイオメカニクスの分析
第7回	卓球技術の分析結果の考察
第8回	野球技術（投）の測定
第9回	野球技術（投）の分析
第10回	野球技術（打）の測定
第11回	野球技術（打）の分析
第12回	野球技術（投）の分析結果の考察
第13回	野球技術（打）の分析結果の考察

	【具体的な内容】	2025/04/01
--	----------	------------

事前・事後 学修	毎時間の授業前までには少なくとも、該当する身体機能の測定法ならびに分析法について、関連図書などを読んで理解しておくこと。毎時間の小レポート課題に対応することで各授業の振り返りを行うこと。 【必要な時間】 上記をふまえ、事前および事後学習には、それぞれ、120分程度の時間を要する。
-------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と 方法	方法：最終レポートによる評価（６０％）、授業レポート（４０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	健康増進プログラム演習[ス研]
講義開講時期	春学期第2Q
必選区分	0:選択
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	人々の健康の維持・増進に関わる要因について理解し、地域・学校・職場などで実際に行われている健康増進プログラムの内容を学習する。また、プログラムの立案・実施・改善が行えるよう、プログラム作成に必要な理論やツールについて理解し、受講者の特性に合致した設定での具体的な健康増進プログラムを作成できるようになることを目標とする。さらに、担当教員が参画している地域高齢者の介護予防事業への参加を通し、対象者やスタッフとの関わりや地域活動と大学の連携・協働について理解を深める。
到達目標	健康について基礎的な定義・考え方を理解する。また、健康の維持・増進に関連する要因についてデータ・資料に基づき考察することができる。
授業の進め方	概説は講義形式で行い、フィールドワーク活動は実習形式で行う。本講義は、地域での介護予防教室の運営に関わる実務経験のある教員が担当する。高齢化社会におけるスポーツを通じた健康づくりについて、実際の地域における介護予防活動に参加しながら実践的な学習を行う。

アクティブ・ラーニング

フィールドワーク 体験学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	健康の維持・増進について
第2回	健康行動の変容と理論（１）行動変容理論の概説
第3回	健康行動の変容と理論（２）行動変容理論の適用
第4回	地域における取り組み（１）生活習慣病予防
第5回	地域における取り組み（２）介護予防
第6回	学校における取り組み
第7回	職場での取り組み
第8回	健康増進プログラムの作成（１）各自の健康増進プログラムの概要について検討する
第9回	健康増進プログラムの作成（２）対象者
第10回	健康増進プログラムの作成（３）介入方法
第11回	健康増進プログラムの作成（４）評価
第12回	健康増進プログラムの作成（５）プログラムの改善
第13回	健康増進プログラムの作成（６）広報などについて

事前・事後学修	【具体的な内容】 事前学習：毎回の講義テーマに関連する図書などを読んで理解し、講義内での発表の準備を行う。 事後学習：講義のテーマごとに、小レポートを課す。また、フィールドワークごとに実習レポートを課す。	2025/04/01
---------	--	------------

	【必要な時間】 事前および事後学習の目安は2時間程度とする。
--	--

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	

成績評価基準と方法	方法：レポートおよび発表は、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。 基準：講義内での提出物（30％）、発表（30％）、レポート（40％）
参考文献	【参考文献】 ・石井敏弘他編「ケースメソッドで学ぶヘルスプロモーションの政策開発－政策化・施策化のセンスと技術」ライフ・サイエンス・センター,2001 ・ローレンス・W・グリーン&マーシャル・W. クロイター著・神馬征峰訳「実践ヘルスプロモーション－PRECEDE－PROCEEDモデルによる企画と評価」医学書院,2005

年度	2025
講義名称	【閉講】キャリア形成演習[ス研]
講義開講時期	春学期第1Q
必選区分	0:選択
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 原 一将	大学・スポーツ人間学部・スポーツビジネス学科

授業の目的と概要	キャリアについて視野を広げ、今後のキャリア形成に役立つ能力を向上させることを目的とし、北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズ調査を、地域連携事業にて行います。この過程を通じて、スポーツ健康指導に関するキャリアについての気づきを得て視野を広げると共に、キャリアを継続的に形成していく上で役立つチームや業務のマネジメント能力、文書作成能力およびプレゼンテーション能力の向上を図ります。
到達目標	・自分自身のキャリアについて、視野を広げて考えられるようになります。 ・基礎的な調査とその解析方法を身に付け、実施できるようになります。 ・マネジメント能力、文書作成能力、プレゼンテーション能力を向上させ、実践できるようになります。 日々変化する時代に対応すべく、自立して生きていくための生活習慣、社会人基礎力をベースとした環境適応能力を身につけます。
授業の進め方	スポーツ健康指導と関連する社会的ニーズに関する調査とその基礎的分析方法を学修します。その後、北海道体育協会との調査に関する地域連携事業をもとに、データ集計やグラフの作成、報告書作成やプレゼンテーションを行います。

アクティブ・ラーニング

PBL フィールドワーク ディスカッション 調査学習

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については授業内で解説するとともにフィードバックについても授業内で行います。
----------------------------	--

授業計画表

回	授業内容	授業形態
第1回	問題意識の設定と資料収集法～ブレインストーミングおよび資料収集法を理解する。	対面
第2回	仮説と質問項目の作成～調査票を作成するための仮説の立て方と質問項目の作成法を理解する。	対面
第3回	調査票の作成～予備調査用の質問紙を作成する。	対面
第4回	プレテストの実施～受講生の身近な人々を対象に予備調査を実施する。	対面
第5回	調査企画書の作成～調査協力の依頼状と調査企画書を作成する。	対面
第6回	北海道体育協会との連携事業（1）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズについての調査の打ち合わせを、北海道体育協会と行う。	対面
第7回	北海道体育協会との連携事業（2）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズについての調査を行う。	対面
第8回	調査内容に関するデータ集計およびグラフ作成～調査内容に関するデータを集計し、かつグラフの作成を行い、調査結果を可視化する。	対面
第9回	解析（1）～相関係数、分散分析、回帰分析を通して、データを解析する。	対面
第10回	解析（2）～重回帰分析、主成分分析、クラスター分析、ロジスティック回帰分析、因子分析等を活用して、データを解析する。	対面
第11回	報告書の作成（1）～解析結果の整理および執筆分担の確認を行う。	対面

第12回	報告書の作成（2）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズの報告書を完成させる。	対面
第13回	プレゼンテーション	対面

事前・事後学修	北海道体育協会と連携した調査の準備、実施、解析、報告書の作成は授業時間外に行う必要があります。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	基準：報告書は、自身で調べた内容が盛り込まれているかを評価します。 方法：授業中の提出物（35％）と、報告書の水準（30％）およびプレゼンテーションの水準（35％）を評価します。
テキスト	必要に応じて資料を配布します。
参考文献	一般財団法人全国大学実務教育協会編　『実践キャリア考』実教出版、2013年

実務経験のある教員の有無

有り

実務経験のある教員の経歴と授業内容	①組織において15年間採用コンサルタントをした経験 大学卒業後、大手就職情報会社に就職し、15年間採用コンサルタント業務に携わる。北海道を含む東日本全域において、大手～中小に至るまで約500社を担当。営業活動のほか、就活イベントの企画運営や各大学における就職ガイダンスでの講演および学内説明会の委託運営も行った。同社では就職情報事業だけでなく、入試広報事業や派遣事業にも携わった。
	②起業して20年間採用コンサルタントをした経験（現在に至る） 上記企業を退職後、採用コンサルティング会社を設立、20年間採用コンサルタント業務に携わる。企業の第二人事部としてより深くクライアントに入り込み、採用業務全般のアウトソーシングに重きを置いた。2005年にCDA（キャリアカウンセラー　現：キャリアコンサルタント）資格を取得。提携先の企業と共に学生向けの「就活ゼミ」を毎週開催。多いときは1回あたり200名を超える学生が参加した。同企画の成功で採用担当者を集めた「採用ゼミ」も開催した。
	キャリア教育は学校社会と職業人社会の架け橋です。「大学での学びは社会に出てから役に立つのだろうか？」そう思われる人もいるでしょう。私も学生時代は同じ思いを抱いていました。しかし、大学で学んだことが直ぐ通用するほど社会は甘くありません。大学での学びが直ぐ通用する職業もほとんどありません。それはおそらく、仕事で発揮する能力と人間関係のなかで仕事に取り組む能力の両方が求められるからです。
	一昔前と比べ、今や卒業後の進路は多種多様になり、必ずしも「就職」だけが進路ではなくなりました。「一生学生のままでいられたらどんなに幸せか」そう思われる人もいるでしょう。それだけ大学生活は自由であり、我が国における大学生はあらゆる意味で優遇されています。確かに満員電車で揺られ、毎朝出勤するのは社会人になって何年経てもしんどいものです。しかし、社会は学生時代の何倍も楽しいところです。まず達成感があり、成長も実感できます。収入を得られ、幅広い世代の方々と知り合いになれます。その楽しさを挙げるとキリがありません。そして社会人としての職業人生活は長く、大学のように4年という区切りはありません。
	だからこそ私の授業では、大学での学びが日常生活や仕事生活で活用される事例を、授業内容と関連付けて紹介し、皆様に学びへの気づきを与えていきます。それにより「何のために学ぶのか」が明確となり学習意欲も向上します。同時に社会の現実もリアルに伝えていきます。夢を持つのは素晴らしいことです。しかし、全員が夢を持っているわけではありません。夢がない人は夢を持つことを夢にすればいいのです。そのうえで夢があるないに関わらず、現実を直視する重要性を説いていきます。ロマンチストである前にリアリストであること、大輪の花を咲かせるには、土を耕し水をやり、日に当てて栄養分を十分に与える必要があります。

また社会情勢に疎くならないよう、時事問題に関する資料を配布、取り上げたテーマについてディスカッションする機会も頻繁に設けます。今は正解のない時代です。大事なのは考えることであり、それを言語化することです。これは反復でしか効果は得られません。その代わりこの授業が終わったあとの皆さんは、少なからず成長しているはずですよ。

私は一般企業に勤めた後、30代後半にニート（引きこもり）やフリーターを経験しています。その後、起業し今に至りますが、そのような自身の経験を交えながら、そして数多くの卒業生と繋がっていますので、彼ら彼女らの事例も挙げながら、皆さんの道標となる授業を展開していきます。

皆さんの未来は開かれています。「希望と再生」をテーマにお互い頑張りましょう。

年度	2025
講義名称	スポーツ健康テーマ演習Ⅰ〔ス研〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿井 英二郎	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
安田 純輝	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの教育研究領域を解説する。研究指導者それぞれの研究領域の概要について解説する。これを通じて、課題研究のテーマの着想につなげる。
到達目標	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの研究動向を理解する。
授業の進め方	授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本科目はオムニバス方式で実施する（1回目担当：国田、2-3回目担当：樋口、4-5回目担当：小林、6-7回目担当：安田、8-9回目担当：後藤、10－11回目担当：阿井、12-13回目担当：阿南）。担当者は、運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの専門分野を有する。それぞれの専門分野を通じて、スポーツ健康テーマの講義を展開する。必要に応じて、オンライン形式での展開を行うことがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内で解説する。
----------------------------	-----------

授業計画表

回	授業内容
第1回	運動制御機構
第2回	人体構造（1）
第3回	人体構造（2）
第4回	体カトレーニング（1）
第5回	体カトレーニング（2）
第6回	体育科教育（1）
第7回	体育科教育（2）
第8回	健康社会（1）健康とはどのような状態なのか？
第9回	健康社会（2）健康と社会の関連について

第10回	コーチング（１）コーチング法
第11回	コーチング（２）マインドフルネス
第12回	コーチング（３）投球動作
第13回	コーチング（４）運動学習

事前・事後学習	【具体的な内容】 運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングについて授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。毎時間、小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う 【必要な時間】 事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。
----------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（４０％）、レポート（６０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	スポーツ健康テーマ演習Ⅰ〔ス研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿井 英二郎	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
安田 純輝	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの教育研究領域を解説する。研究指導者それぞれの研究領域の概要について解説する。これを通じて、課題研究のテーマの着想につなげる。
到達目標	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの研究動向を理解する。
授業の進め方	授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本科目はオムニバス方式で実施する（１回目担当：国田、2-3回目担当：樋口、4-5回目担当：小林、6-7回目担当：安田、8-9回目担当：後藤、10－11回目担当：阿井、12-13回目担当：阿南）。担当者は、運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの専門分野を有する。それぞれの専門分野を通じて、スポーツ健康テーマの講義を展開する。必要に応じて、オンライン形式での展開を行うことがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	授業内で解説する。
----------------------------	-----------

授業計画表

回	授業内容
第1回	運動制御機構
第2回	人体構造（１）
第3回	人体構造（２）
第4回	体カトレーニング（１）
第5回	体カトレーニング（２）
第6回	体育科教育（１）
第7回	体育科教育（２）
第8回	健康社会（１）健康とはどのような状態なのか？
第9回	健康社会（２）健康と社会の関連について

第10回	コーチング（１）コーチング法
第11回	コーチング（２）マインドフルネス
第12回	コーチング（３）投球動作
第13回	コーチング（４）運動学習

事前・事後学習 【具体的な内容】 運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングについて授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。毎時間、小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う 【必要な時間】 事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。	
--	--

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（４０％）、レポート（６０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	【閉講】スポーツ健康テーマ演習Ⅱ[ス研]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿井 英二郎	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
安田 純輝	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの最新知見を解説する。研究指導者それぞれの研究領域の概要について解説する。これを通じて、課題研究のテーマの着想につなげる。
到達目標	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの最新知見を理解する。
授業の進め方	授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本科目はオムニバス方式で実施する（1回目担当：国田、2-3回目担当：樋口、4-5回目担当：小林、6-7回目担当：安田、8-9回目担当：後藤、10－11回目担当：阿井、12-13回目担当：阿南）。担当者は、運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの専門分野を有する。それぞれの専門分野を通じて、スポーツ健康テーマの講義を展開する。必要に応じて、オンライン形式での展開を行うことがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	運動制御機構
第2回	人体構造（1）
第3回	人体構造（2）
第4回	体カトレーニング（1）
第5回	体カトレーニング（2）
第6回	体育科教育（1）
第7回	体育科教育（2）
第8回	健康社会（1）
第9回	健康社会（2）

第10回	コーチング（１）
第11回	コーチング（２）
第12回	コーチング（３）
第13回	コーチング（４）

事前・事後学修	【具体的な内容】 運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングについて授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。毎時間、小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う 【必要な時間】 事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。
-----------------------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（４０％）、レポート（６０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	スポーツ健康テーマ演習Ⅱ〔ス研〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	1年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿井 英二郎	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
阿南 浩司	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
安田 純輝	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの最新知見を解説する。研究指導者それぞれの研究領域の概要について解説する。これを通じて、課題研究のテーマの着想につなげる。
到達目標	運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの最新知見を理解する。
授業の進め方	授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本科目はオムニバス方式で実施する（1回目担当：国田、2-3回目担当：樋口、4-5回目担当：小林、6-7回目担当：安田、8-9回目担当：後藤、10－11回目担当：阿井、12-13回目担当：阿南）。担当者は、運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングの専門分野を有する。それぞれの専門分野を通じて、スポーツ健康テーマの講義を展開する。必要に応じて、オンライン形式での展開を行うことがある。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	運動制御機構
第2回	人体構造（1）
第3回	人体構造（2）
第4回	体力トレーニング（1）
第5回	体力トレーニング（2）
第6回	体育科教育（1）
第7回	体育科教育（2）
第8回	健康社会（1）
第9回	健康社会（2）

第10回	コーチング（１）
第11回	コーチング（２）
第12回	コーチング（３）
第13回	コーチング（４）

事前・事後学修 【具体的な内容】 運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、体育科教育、健康社会、コーチングについて授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。毎時間、小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う 【必要な時間】 事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。	
--	--

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（４０％）、レポート（６０％） 基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅰ〔ス研〕〔国田〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を、研究指導教員からの研究アドバイスをもとにすすめる。研究を進めていく上で必要な文献に関して、精読に努め、理論化・分析能力の向上を図る。またさらに、研究分野によっては、予備実験等をもとに記録・分析法を修得させる。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究の方針の設定
第2回	関連文献の収集・資料整理
第3回	文献リストの作成
第4回	課題研究のテーマに関する討論（１）テーマ設定の検討
第5回	課題研究のテーマに関する討論（２）テーマ候補の絞込み
第6回	課題研究のテーマに関する討論（３）テーマ候補の設定
第7回	課題研究のテーマに関する討論（４）テーマ候補の発表
第8回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（１）
第9回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（２）
第10回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（３）
第11回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（１） プレゼンテーション準備
第12回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（２） 発表の予行練習
第13回	課題研究のテーマに関する中間報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（３０％）、レポート（３０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅰ〔ス研〕〔後藤〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科
後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を、研究指導教員からの研究アドバイスをもとにすすめる。研究を進めていく上で必要な文献に関して、精読に努め、理論化・分析能力の向上を図る。またさらに、研究分野によっては、予備実験等をもとに記録・分析法を修得させる。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究の方針の設定
第2回	関連文献の収集・資料整理
第3回	文献リストの作成
第4回	課題研究のテーマに関する討論（１）テーマ設定の検討
第5回	課題研究のテーマに関する討論（２）テーマ候補の絞込み
第6回	課題研究のテーマに関する討論（３）テーマ候補の設定
第7回	課題研究のテーマに関する討論（４）テーマ候補の発表
第8回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（１）
第9回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（２）
第10回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（３）
第11回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（１） プレゼンテーション準備
第12回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（２） 発表の予行練習
第13回	課題研究のテーマに関する中間報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。 2025/04/01
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（３０％）、レポート（３０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅰ〔ス研〕〔小林(秀)〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を、研究指導教員からの研究アドバイスをもとにすすめる。研究を進めていく上で必要な文献に関して、精読に努め、理論化・分析能力の向上を図る。またさらに、研究分野によっては、予備実験等をもとに記録・分析法を修得させる。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究の方針の設定
第2回	関連文献の収集・資料整理
第3回	文献リストの作成
第4回	課題研究のテーマに関する討論（１）テーマ設定の検討
第5回	課題研究のテーマに関する討論（２）テーマ候補の絞込み
第6回	課題研究のテーマに関する討論（３）テーマ候補の設定
第7回	課題研究のテーマに関する討論（４）テーマ候補の発表
第8回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（１）
第9回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（２）
第10回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（３）
第11回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（１） プレゼンテーション準備
第12回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（２） 発表の予行練習
第13回	課題研究のテーマに関する中間報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（３０％）、レポート（３０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	【閉講】課題研究Ⅰ[ス研][樋口]
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を、研究指導教員からの研究アドバイスをもとにすすめる。研究を進めていく上で必要な文献に関して、精読に努め、理論化・分析能力の向上を図る。またさらに、研究分野によっては、予備実験等をもとに記録・分析法を修得させる。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する。
----------------------------	-------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究の方針の設定
第2回	関連文献の収集・資料整理
第3回	文献リストの作成
第4回	課題研究のテーマに関する討論（１）テーマ設定の検討
第5回	課題研究のテーマに関する討論（２）テーマ候補の絞込み
第6回	課題研究のテーマに関する討論（３）テーマ候補の設定
第7回	課題研究のテーマに関する討論（４）テーマ候補の発表
第8回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（１）
第9回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（２）
第10回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（３）
第11回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（１） プレゼンテーション準備
第12回	課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（２） 発表の予行練習
第13回	課題研究のテーマに関する中間報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（３０％）、レポート（３０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、呈示する。
参考文献	適宜、呈示する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅱ[ス研][国田]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 国田 賢治	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究Ⅰの中間報告の内容を発展させ、課題研究論文として完成させる。論文作成を通じて、スポーツ健康領域における高度な理論と指導法を修得し、スポーツを通じた健康の維持および増進および体力の向上に寄与する能力を身につくようにする。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する
----------------------------	------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究に関する討論（１）研究テーマのおおまかな遂行案の設定
第2回	課題研究に関する討論（２）研究テーマの詳細な遂行案の設定
第3回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（１）
第4回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（２）
第5回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（３）
第6回	課題研究論文の作成（１）
第7回	課題研究論文の作成（２）
第8回	課題研究論文の作成（３）
第9回	課題研究論文の作成（４）
第10回	課題研究論文の作成（５）
第11回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（１）
第12回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（２）
第13回	課題研究のテーマに関する報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（２０％）、レポート（４０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。レポートおよび発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅱ[ス研][後藤]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 後藤 ゆり	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究Ⅰの中間報告の内容を発展させ、課題研究論文として完成させる。論文作成を通じて、スポーツ健康領域における高度な理論と指導法を修得し、スポーツを通じた健康の維持および増進および体力の向上に寄与する能力を身につくようにする。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する
----------------------------	------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究に関する討論（１）研究テーマのおおまかな遂行案の設定
第2回	課題研究に関する討論（２）研究テーマの詳細な遂行案の設定
第3回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（１）
第4回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（２）
第5回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（３）
第6回	課題研究論文の作成（１）
第7回	課題研究論文の作成（２）
第8回	課題研究論文の作成（３）
第9回	課題研究論文の作成（４）
第10回	課題研究論文の作成（５）
第11回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（１）
第12回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（２）
第13回	課題研究のテーマに関する報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（２０％）、レポート（４０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。レポートおよび発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅱ[ス研][小林(秀)]
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 小林 秀紹	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究Ⅰの中間報告の内容を発展させ、課題研究論文として完成させる。論文作成を通じて、スポーツ健康領域における高度な理論と指導法を修得し、スポーツを通じた健康の維持および増進および体力の向上に寄与する能力を身につくようにする。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する
----------------------------	------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究に関する討論（１）研究テーマのおおまかな遂行案の設定
第2回	課題研究に関する討論（２）研究テーマの詳細な遂行案の設定
第3回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（１）
第4回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（２）
第5回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（３）
第6回	課題研究論文の作成（１）
第7回	課題研究論文の作成（２）
第8回	課題研究論文の作成（３）
第9回	課題研究論文の作成（４）
第10回	課題研究論文の作成（５）
第11回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（１）
第12回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（２）
第13回	課題研究のテーマに関する報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（２０％）、レポート（４０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。レポートおよび発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅱ〔ス研〕〔樋口〕
講義開講時期	秋学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究Ⅰの中間報告の内容を発展させ、課題研究論文として完成させる。論文作成を通じて、スポーツ健康領域における高度な理論と指導法を修得し、スポーツを通じた健康の維持および増進および体力の向上に寄与する能力を身につくようにする。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する
----------------------------	------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究に関する討論（１）研究テーマのおおまかな遂行案の設定
第2回	課題研究に関する討論（２）研究テーマの詳細な遂行案の設定
第3回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（１）
第4回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（２）
第5回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（３）
第6回	課題研究論文の作成（１）
第7回	課題研究論文の作成（２）
第8回	課題研究論文の作成（３）
第9回	課題研究論文の作成（４）
第10回	課題研究論文の作成（５）
第11回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（１）
第12回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（２）
第13回	課題研究のテーマに関する報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（２０％）、レポート（４０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。レポートおよび発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。

年度	2025
講義名称	課題研究Ⅱ〔ス研〕〔樋口〕
講義開講時期	春学期
必選区分	1:必修
学年	2年
授業方法	演習
授業形態	対面授業
単位数	2単位
ナンバリング	スポーツ健康指導研究科

担当教員

氏名	所属
◎ 樋口 善英	大学・スポーツ人間学部・スポーツ指導学科

授業の目的と概要	課題研究Ⅰの中間報告の内容を発展させ、課題研究論文として完成させる。論文作成を通じて、スポーツ健康領域における高度な理論と指導法を修得し、スポーツを通じた健康の維持および増進および体力の向上に寄与する能力を身につくようにする。
到達目標	課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。
授業の進め方	授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価、人体構造学あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

アクティブ・ラーニング

PBL グループワーク フィールドワーク ディベート ディスカッション

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	課題については、授業内で解説する
----------------------------	------------------

授業計画表

回	授業内容
第1回	課題研究に関する討論（１）研究テーマのおおまかな遂行案の設定
第2回	課題研究に関する討論（２）研究テーマの詳細な遂行案の設定
第3回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（１）
第4回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（２）
第5回	課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（３）
第6回	課題研究論文の作成（１）
第7回	課題研究論文の作成（２）
第8回	課題研究論文の作成（３）
第9回	課題研究論文の作成（４）
第10回	課題研究論文の作成（５）
第11回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（１）
第12回	課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（２）
第13回	課題研究のテーマに関する報告会

事前・事後学修	関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。
---------	---

DP（学位授与の方針）との関連（スポーツ健康指導研究科）

スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識	●
スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知	●
子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力	●
研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力	●

成績評価基準と方法	方法：授業への取り組み状況（２０％）、レポート（４０％）、発表（４０％） 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。レポートおよび発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。
テキスト	適宜、紹介する。
参考文献	適宜、紹介する。